自殺するなら、引きこもれ

問題だらけの学校から身を守る法

本田透　堀田純司

光文社新書
326

いい学校からいい会社に入って、一生安泰という時代は終わりを告げた。
かたや学校で頻発するいじめ自殺。それを隠蔽しようとし「いじめはなかった」と強弁するダメ教師と無能な教育委員会、性根の腐った加害者とそんなわが子をかばう親。さらに教師自らいじめに荷担することも――。
もはや、こんなストレスだらけの学校に通う理由はひとつもない!
本書では、多くの人間が囚われている「学校信仰」を相対化し、不登校児や引きこもりを病気のように扱う社会の価値観がいかにおかしいかを解く。
そして、共同体の解体と雇用の流動化が進み、価値観が多様化した時代を前向きに捉え、それに適応する新しい生き方を提案する。

自殺するなら、引きこもれ

問題だらけの学校から身を守る法

本田透　堀田純司

光文社新書

プロローグ――学校から身を守るという、選択肢

本田透

数年前、学校におけるいじめ問題や、いじめを原因とした生徒の自殺問題が社会問題化したことがありました。そこで政府は学校のいじめ問題の解決に乗り出したと称し、文部科学省の統計では1999年から2005年までの間、公立小中高校におけるいじめ自殺者数は「ゼロ」になりました。

日本の学校は、統計上の「いじめ自殺者ゼロ」を達成し、「いじめのない学校」という理想の実現に邁進（まいしん）していた……はずでした。

しかし、言うまでもなく「7年間、いじめ自殺者ゼロ」という文部科学省のデータは、大嘘（おおうそ）でした。

まず、文部科学省は「いじめ」の定義を複雑化することで、「いじめ」の見かけ上の発生件数を減らしてみせただけだったのです（最近、修正されましたが）。

さらに、隠蔽（いんぺい）の問題が起こります。中央教育審議会（中教審）は２００３年の答申で「いじめ、校内暴力を5年間で半減」させるという5カ年計画を発表しました。日本各地の学校や教育委員会は、この数値目標を達成するために現実に発生している「いじめ」を隠蔽しようとしたのではないか、と考えられます。

もちろん、このような中教審の目標がなくとも、それ以前から学校における「いじめ」は隠蔽されていたに違いありません。「いじめ」を認めることは学校にとっての不名誉であり、教師が無能だという証拠であり、教育現場が荒廃しているという認めたくないイヤな現実だからです。

たとえば２００５年9月。北海道滝川（たきかわ）市の市立小学校の教室で、6年生の女児が遺書を残して自殺しました。その遺書には、学校でいじめられたことを示唆する内容が書かれていたのです。

「私は、この学校や生とのことがとてもいやになりました。それは、3年生のころからです。なぜか私の周りにだけ人がいないんです。5年生になって人から『キモイ』と言

われてとてもつらくなりました。」
「6年生のみんなへ
みんなは私のことがきらいでしたか？　きもちわるかったですか？　私は、みんなに冷たくされているような気がしました。それは、とても悲しくて苦しくて、たえられませんでした。なので私は自殺を考えました。」

遺書は、このような文面でした。教室でこんな扱いを受けたら誰だって、子供だって死にたくなります。どうして教師はこの「いじめ」を放置していたのでしょう。仮に気づかなかったのであれば、無能すぎます。知っていたのなら教師たる資格がありません。

ところが滝川市教育委員会は、この遺書の内容を把握しておきながら公表せず、「いじめはなかった」と結論して「いじめ」を隠蔽したのです。この一連の隠蔽工作がマスコミに漏(も)れて騒動となったため北海道教育委員会はいじめの実態調査を実施しましたが、今度は北海道教職員組合の執行部が21カ所の支部に対してこの調査に協力しないよう指導していたという報道がなされました。

福岡県北九州市では、「いじめ」事件を隠蔽していたことが発覚した小学校の校長が保護

者会の前日に首を吊って自殺するという事件も発生しました。
このような事態が終わらない背景には、まず「いじめ」という「問題」を「なかったことにする」、つまり「都合の悪い問題を直視しない」という現代日本社会の体質・精神性が大きく関与しています。統計上「ない」ことにしてしまえば、あるはずの「いじめ」も「なかった」ことになってしまう。
しかし、どうして学校に「いじめ」や「自殺」があってはならないのでしょうか。職場にだって「いじめ」や「自殺」は存在します。学校だって人間が大勢集まっている場所なのですから、それは当然起こります。むしろ子供のほうが大人よりも直接的に「いじめ」を行う。誰だって子供の頃は学校で「いじめ」を目撃したり、自分が当事者になった経験を持つはずです。なのになぜ、「学校にいじめはない」と思いたがるのでしょうか。
人間社会は、人間の悪の側面を引き出す場でもあります。「いじめ」はいじめる側にとっては一種のレクリエーション、つまり遊びです。それに、「いじめる側」に回らなければ自分がいつ「いじめられる側」に立たされるかわかりません。人間は、人間をいじめる生き物であり、時には人間を自殺に追い込んだり殺したりすることもできる生き物なのです。それが現実です。

「いじめ」はあって当然のものですが、だからと言って「なかったこと」にしたり「あっていいんだ、いじめられる奴が弱いんだ、悪いんだ」と居直って肯定してはいけないものです。根絶は不可能ですが、少しでも減らさなければならないのです。

本書は、学校における「いじめ自殺問題」の根源には、現代社会が「学校」を教会のごとく神聖視する「学校信仰」とでもいうべき信念に囚われており、そのため学校に行きたくない・行けない状態の生徒が学校を回避しづらい状況に追いつめられており、そのために自殺にまで追い込まれる生徒が跡を絶たないのではないか、という推測を前提にして書かれています。

そして、「学校に行って死ぬ人はいるが、学校に行かないために死ぬ人はいない」という逆転した発想から、学校で追いつめられた生徒やその親に「我慢して学校に通って死ぬくらいなら、いったん引きこもれ。不登校という形で自分の命を守れ」という緊急回避方法を提案するものです。

頭の中にこびりついた学校信仰、学校教というドグマを解体することで、

「別に、無理して学校に行かなくても死ぬわけではない」

と気づけます。気づくことができれば、もはや死しか解決策があり得ない、と追いつめら

れた子供やその親も、もっと合理的で効率的な解決方法を見出すことができるはずです。

本書の著者は二人ともにライター・エディターであって、教育関係者ではありません。実は僕（本田）と堀田は講談社の「メカビ」というムックで共にスーパーバイザー（監修）を務めているのですが、たまたま子供のいじめ自殺問題について「メカビ」内で対談していた際に、二人とも高校中退歴・引きこもり歴の持ち主で、似たような経歴を辿って出版業界に入っていたことを知ったのです。

ですから二人とも、学校に行かなくなり（行けなくなり）、部屋に数カ月の間引きこもり、学生でもなく社会人でもない中途半端な時期を10代のうちに経験した当事者なわけです。

とくに僕（本田）の場合は幼稚園時代から高校に至るまで、筋金入りの「いじめられっ子」です。学校に通っていた時期の半分くらいは、いじめっ子に復讐することか自分が死ぬことばかり考えていました。ですから、マスコミでいじめ自殺事件が報道されるたびに心が痛むというより当時の自分の環境を思いだして目眩と吐き気がします。さらに、「隠蔽」の問題についても小学校の時に実際に体験しています。

小学3年生の時、僕は担任の女性教師からいじめを受けていました。そのうち、生徒たち

も「先生がいじめるなら、オレたちも」という具合にそのいじめに加わりました。このままでは生きていられないと追いつめられた僕は恥を忍んで家族にその件を報告し、当然ながら母親が激怒して職員室に押しかけました。ところが、職員室では、いつも僕を鬼の形相で睨みながら放課後の教室に軟禁し、「お前は日本に住む資格がない」「お前は30歳までに死ぬ」と叫んでいた教師が、

「本田くん。先生、そんなこと言っていないわよねぇ」

と満面の笑みを浮かべて、まるで聖母マリアのような慈悲深さを見せ、母をまるめこんでしまったのです。

もちろん、この教師はその後も何の問題もなく学校に居続けました。

中学では、ある生徒がいじめられていることを先生に訴えたところ、訴えた僕が「偽善者」という理由でその生徒にかかわっていじめられることになった、という経験もしました。

もちろん、ほんとうの理由は僕が同級生たちを「いじめを行っている悪人だ」と告発したことに対する報復でした。しかし彼らは、自分が悪人だとは思ってもいませんから、本気で「偽善者を叩きつぶす」と義憤にかられていたのです。

確かに僕はどう考えてもズボラで金銭にルーズで自己中心的で善人ではありませんから、

今思えばあれは青臭い偽善的な行為だったのかもしれません。しかし、偽善よりも悪のほうが悪いに決まっています。学校を含む現代社会では、「善＝偽善＝悪」という奇妙な三段論法が罷り通っているのです。しかもそれは「悪など存在しない」というウソをつきとおすためのへ理屈なのです。「いじめはない」と言い張る教育委員会と、「いじめを告発する奴が偽善者＝悪だ」と言い張る生徒とは、同じコインの裏表です。大人・教師がそういう態度なので、生徒もそういう態度をコピーして覚えるわけです。

　これらの記憶を何度思い起こしても、「いじめられる側に責任がある」という弱肉強食理論は、間違っています。あの小学校教師は何らかの精神の病にかかっていたのか、人格が異常で子供をいじめて喜ぶサディストだったのか、どちらかだったとしか思えません。

　現実の学校とは、そういう場所なのです。

　また、これは本文で詳しく書いてますが、高校を中退することになる前後、僕は周囲から「学校に行かないなんて、お前はどうかしている」「もう終わりだ、破滅だ」「家の恥だ」と徹底的に人格を否定されました。

　これらの経験から、僕は「現代人は学校信仰に洗脳されていて、そして学校とは崇高にして神聖な現代の教会なのだ」「だから、いじめは隠蔽されなければならないし、いじめを苦

に自殺した生徒は最初からいなかったことにされなければならないのだ」という直観を得たのです。「美しい学校」には、いじめや自殺のような穢(けが)れた問題など存在してはならない、ということです。学校信仰のために、罪のない子供たちが毎年何十人、もしかしたら何百人も死に追いつめられ、しかもその死すら無視され、隠蔽され、タブーとして黙殺されているかもしれないのです。

しかし僕も堀田も、学校をやめましたが別に死にませんでした。むしろ僕の場合、あのまま我慢して学校に行っていたらたぶん死んでいたでしょう。もちろん高校を中退した後、いろいろ苦労しましたが、その後社会から脱落するということもなく、さほど収入は多くありませんが、講談社から著書を出版したりしてそれなりに社会人らしい人生を送っています。だいいち、高校をやめても、大学には入れるのです。二人とも高校中退↓大学進学組なのです。こういう経歴の人は意外と僕の周囲に大勢います。

してみると、「学校に行かなければもう終わりだ」というあの強迫観念は、いったい何だったのかな、と思うわけです。

そんなわけで本書の著者二人は教育問題については素人(しろうと)なのですが、実体験に基づいて義憤（というより個人的な憤(いきどお)りですね）にかられ、敢(あ)えていじめ自殺問題について考察せざ

るを得なかったわけです。

で、その結論が、「自殺するくらいなら、引きこもれ」だったのです。

もちろん、なにがなんでも学校に行くなとか、いつまでも引きこもれ、と言っているわけではありません。「自殺するくらいなら」緊急避難的に学校に行かないという選択肢が、実は目の前に広がっているんだよ、学校信仰というドグマがその選択肢を奪い取っているだけなんだよ、と言いたいのです。繰り返しになりますが、学校に行って死ぬ人間はいても、学校に行かなかったから死ぬ人間はいないのです。

最後に、軽く本書の内容を一瞥(いちべつ)しておきます。

「第1章　学校の正体」では、学校制度のそもそもの成り立ちについて、そして学校制度が果たしている機能について概観します。これは、目の前の学校信仰というドグマを歴史的視点によって相対化するための作業です。また、現在の学校がどのような状況になってしまっているか、その現状と原因にも軽く触れています。この章は本田が担当しています。

「第2章　流動化した社会」では、ネオリベラリズム（新自由主義）と社会のグローバル化によって従来のライフスタイル（その中には、学校神話も含まれています）が解体されつつ

ある現代社会の情勢を分析し、すでに「学校信仰」は過去の物語になった、ということを示します。この章は堀田が担当しています。
「第3章　フリーターの人でも安心して暮らせる社会を」では、第2章に引きつづき学校信仰の崩壊の問題について論じた後、学校という伝統に回帰する方法論の可能性と限界について触れ、もう一つの「学校に行かない」という選択肢によって現実的危機を回避する方法(高等学校卒業程度認定試験など)についての情報やその当事者である堀田の体験談を提供します。第2章と第3章がこの本の中核パートにあたります。
「第4章　孤独力、妄想力がコンテンツ立国を支える」は余談のようなパートです。最近では学校に適応できない子供にADHD(注意欠陥・多動性障害)やLD(学習障害)といった「病気」「障害」の概念が押しつけられていますが、実はエジソンやアインシュタインといった天才も現代ではADHDないしLDに相当するという逸話を紹介しています。
また、「不登校から引きこもりに、そして第四次産業(情報コンテンツ)従事者に」という現代的ケースとして本田の体験談も書いていますが、これはまあオマケとして付け足したものです。これほど学校に適応できないダメな人間でも、現代社会にはちゃんと働き場所があるんだよ、というサンプルとして読んでいただければ幸いです。

最後になりましたが、社会学関連の参考文献資料などに関して多大なるご教示をいただきましたた早稲田大学の池岡義孝先生に謝辞を述べさせていただきます。ほんとうにありがとうございました。

目次

第１章　学校の正体

本田透

＊学校とはなにか

学校とは、現代の教会です。

現代人にとって学校とは「あって当たり前・ないと困る」機構です。子供は学校に通うのが当然で、学校に通わない子供は何やら深刻な心理的・社会的問題を抱えている異常な子供という扱いを受けます。ひどい場合は子供が不登校だというだけで無条件に心療内科や精神病院に送りこんだりします。

しかし考えてみれば、学校という制度は日本が近代化した明治時代に、憲法や国会や近代的軍隊といったもろもろの制度と一緒に欧米から輸入した外来思想の一つにすぎず、江戸時代の子供は寺子屋で読み書きそろばんを習っていれば事足りていたわけです。

学校とはつまり近代国家にとって必要不可欠な制度だったから輸入された文化の一つであって、それ以上でもそれ以下でもありません。行かないからといって人間的に問題があるとか心に病を抱えているとか、そんなたいそうなものではないのです。

現代（特に戦後）の日本人は、一般には無宗教だと言われていますが、実際には「学校教」という宗教を信じているのかもしれません。

学校教を信じている親は、子供が学校に行きたがらなくなると、あたかも自分の子供が悪魔に取り憑かれてしまったのではないかというくらいに大袈裟に恐れおののきます。

キリスト教圏の人々を震撼させたホラー映画『エクソシスト』では、はじめに娘が十字架や神を冒涜する言葉を吐きはじめます。母親はそんな娘を病院に連れて行くのですが、いまいち原因がわかりません。そこで最後にはカトリックの神父にすがって悪魔祓いを実行してもらいます。

実は、不登校児に対する大人の恐れやとまどいも、『エクソシスト』に登場する親や神父が神を冒涜する娘に対して感じる恐怖と同じものです。今の日本では「学校へ通う」という行為そのものが実は「神を信じる」という行為と等価なのです。不登校とは、だから、学校教を信じる現代日本人にとって「絶対に犯してはならないタブー」なのです。

江戸時代はこうではなかったはずです。たぶん、寺子屋に行かない子供がいたとしても、たいていの親は「しょうがねえガキだ」と叱りつけて終わりだったでしょう。まさか「うちの子が寺子屋に行かないのは、キツネに憑かれているからに違いない」と祈祷師を呼んだり町医者に泣いてすがったりするような親はいなかったはずです。

もちろん寺子屋に通って読み書きそろばんを身につけておいたほうが、将来何かと役に立

ちます。だから、行かないよりは絶対に行ったほうがいい。しかし、寺子屋に通わないからといってその子の全人生が崩壊してしまうといった恐怖を感じる大人はいなかったでしょう。

つまり現代における「学校」は、社会的な技能その他を身につける教育機関という本来的な意味の他に、中世ヨーロッパにおける教会のような宗教的意義をも持たされているわけです。学校に通うという行為に、宗教的意味・超越的価値があると信じられているのです。ですから日本では極端な学歴信仰社会が生まれたわけです。

最初に「日本を学歴社会にしよう」という意図があって学歴社会が生まれたのではなく、学校を神聖視・特別視する心性が最初にあって、その結果として学歴社会が生まれたんですね。

そう考えれば、不登校児をすぐに精神病院や心療内科に送りこもうとしたりする親のうろたえぶりにも納得がいくというものです。言うまでもなく、そのような親の大袈裟な態度は、ますます子供を苦境に追い込みます。映画『エクソシスト』でも、神への信仰心を失った娘がどんどん重症の悪魔憑きになっていくのは、母親が娘を病院に送ったり神父を呼んだりして話を大袈裟(おおげさ)にしていったためです。

この本の最初に述べたように、無理して学校へ行ったために死ぬことはあっても、学校へ

行かないからといって死ぬことはありません。しかし、学校へ行かないことを親から「お前の人生はもうおしまいだ」と責められたりいろんな施設に送りこまれたりすれば、その子は人生に絶望して結局死んでしまうかもしれません。

不登校やいじめといった問題に直面した親はまず、自分や子供の心の中に強固に築かれている「学校信仰」を相対化して、冷静になることが必要なのです。「学校へ行かないともう破滅だ」という恐怖や焦りは、「教会に通わないと地獄に堕ちる」という中世キリスト教信者の思いこみと同じで、何の合理的な理由もないのです。

いま現在不登校中の人自身に関しても、同じです。学校に行かないから自分の人生はもう終わりだ、と怯えることはないのです。それらの宗教的なドグマを解いていけば、気が楽になります。まずは落ち着いて「学校に行かなくても死にはしない」という「本当の現実」を認識することから今後の人生の再設計をはじめればいいのです。

もちろん、行かないよりは行ったほうが何かと得することが多いのですが、行かないから人間失格だ、なんてことはないのです。

＊学校制度の誕生

現代日本において一大宗教勢力となっている「学校」という制度は、もともとは明治期に西欧から輸入した「近代国家（国民国家）システム」の一つの要素でした。

では19世紀の西欧諸国における「学校制度」（本書では、全国民へ義務教育を課し、また大学教育を開放した近代的な教育制度のことを指します）とは何だったのかというと、それは「産業革命によって成立した資本主義社会を支えるために必要とされた制度」だったのです。

まず学校が誕生して、そこで十分な教育を受けた市民たちが資本主義社会を築いたのではなく、最初に産業革命が起こって資本主義社会が成長し、それを維持・拡大するために全国民への学校教育が求められたのです。

産業革命が最初に起こったイギリスでは、労働者階級の子供を工場で長時間働かせる資本家があいついで現れ、また人口が集中しはじめた都市部にはスラム街が形成され、犯罪や貧困が増加して社会問題となりました。そこで、これらの都市部労働者階級の子供に対する初等・中等教育が必要とされたのです。

資本主義社会は、補助的な福祉システムによる一定量の社会的還元を行わない限り、必ず

資本家と労働者との経済格差が増大する仕組みになっています。19世紀のイギリスでは、だから、大変な格差が発生しました。６歳７歳の子供が工場で働かされていたのです。
このような状況を放置しておくと、都市のスラム化が年々進行し続け、当然のことながら社会情勢もどんどん不穏になります。それに、年端もいかない子供よりも一定の教育を受けた大人を労働者として雇うほうが、長い目で観ればよほど生産性が高かったのです。
また資本主義社会化を強力に推進するには、国家（政府）の中央集権化と「国民国家」化がどうしても必要でした。故に、それまで教会や私的機関に任せていた教育という仕事を国家自らが行い、民衆の「国民意識」や勤労意欲（日本風に言えば、「立身出世主義」といっていいでしょう）を養う必要が生じたのです。
このような条件がいろいろ重なったため、西欧諸国は「義務教育」を含む近代的な学校制度を整備させざるを得なくなったのです。学校は、中世には教会が運営していた制度（と呼べるほど統一的なものではありませんでしたが）だったのが、近代になってから国家が運営する制度になったわけです。

このような資本制社会の形成の過程において求められた人間的条件は、一般的にいえ

ば、アダム・スミスが「諸国民の富」（１７７６）で述べたように、ひとつには生産性を高めることのできる科学的な知識や技術であり、ふたつには資本制社会の秩序に適合的な心的態度や行動能力であった。

（長尾十三二『西洋教育史』東京大学出版会、１９９１）

つまり、資本主義社会に適応できる大勢の労働者を産みだすために、全国民に対する教育が必要不可欠となったのです。ですから、学校は子供に読み書きだけでなく、道徳観念をも教えなければならなくなりました。神への信仰心を教えるかわりに、国家への忠誠心・愛国心を養う必要も生まれました。また、優秀な労働者を揃えるため、数学や理科といった科学知識を子供に教える必要も生じました。

産業革命によって、人間はそれまでよりはるかに多くのことを学ばなければ社会に適合できなくなってしまったわけです。

さらに、「学問を修めて労働することによってどのような出自の人間でも立身出世が可能になる」という個人主義的な立身出世主義を教える必要も出てきます。つまり、資本主義社会を生きることに希望を見出してもらおうということです。民衆がそのような希望を失えば、

働かない人々が増加して資本主義のシステムが停滞してしまいます。
ところが、実は個人主義的な国だったイギリスには不干渉主義という障害があったため、せっかく世界で最初に産業革命を起こした国だったにもかかわらず学校制度の成立が大きく立ち遅れてしまいます。
一方、産業革命に乗り遅れた「後進国」のドイツは、産業革命の遅れを取り戻すために急激に資本主義社会に適応した学校制度を作り上げていきます。
もともとドイツはイギリスやフランスに比べて国家主義色の濃い国でした。というのは、三十年戦争の後遺症によって統一が遅れたからです。国家としての統一が遅れたからこそ、統一のための強固な国家主義思想が必要だったのです。興味深いことに、義務教育という制度をもっとも早く実現した国が、このドイツでした。これは国家主義と義務教育とが元々同じルーツを持っていることを示しています。
そもそも、強力な中央集権システムを持つ近代国家が誕生する以前は、学校や教育は地方の教会や大学がめいめい好きにやっていたものでしたから。

＊時代とともに揺れ動く教育内容

明治期に日本が学校制度を輸入する際に大いに参考とした国が、このドイツです。

日本でも江戸時代までは、学舎（まなびや）といえば寺子屋が主流でした。今で言えば私立の学習塾みたいなものです。公立学校というものは、幕府直轄の昌平坂（しょうへいざか）学問所や各藩の藩校など武士育成用のものを除いて存在しませんでした。藩校に通えない庶民が本格的な学問をするためには、私塾に行かねばなりませんでした。江戸時代の日本は、それぞれの藩がめいめいに半独立していて、強力な国家の下にまとまっているわけではなかったので、国民全体を対象とした公立学校とか義務教育といった制度は必要なかったのです。

日本にはじめて西欧風の学校制度が導入されたのは明治５（１８７２）年です。この年に「学制」が発布されたのです。

もちろん、いきなり「全ての家庭の子供を小学校に通わせるように」なんておふれを出しても、そうそう受け入れられるわけはありません。子供は当時、一家の重要な労働力でしたから。実際に児童の就学率が１００％近くになるまでには、学制発布から紆余曲折（うよきょくせつ）を経て数十年もの時間がかかりました。

日本の学校教育の内容は、時代によって二転三転してきました。文明開化を急ぐ当初は外

国の教科書を翻訳した「翻訳教科書」を使用していましたが、国家としての体裁（ていさい）が整いはじめると、儒教思想に基づく道徳教育を取り入れたり教育勅語を取り入れたりして、日本独自の国家主義的な学校教育体制を完成させていきます。もちろん、もともと西欧の学校制度を模範として学校を設けたのですから、これは予定通りの道順でした。

さきほど、ドイツにおいて国家主義的な学校制度があわただしく整備されたのは、ドイツが国家統一および産業革命に乗り遅れたためだと書きました。

たとえばイギリスではさっさと産業革命が起こったので、あまり無理しなくても自然と強力な国家が生まれていったわけですが、ドイツは立ち遅れてしまったがために、その遅れをカバーするために強固な学校制度を必要としたわけです。となると、ドイツよりもさらに文明開化に遅れた日本では、さらなるリカバリーが必要だったはずです。

もちろん国家主義の基盤としての学校教育では、福沢諭吉的な「立身出世主義」というもう一つの思想も必要とされていました。「貧乏な家に生まれても、学校で勉学に励めば立派な人物になれる」という思想ですね。

江戸時代までは「農民の子は農民、町人の子は町人」でしたから、そういう立身出世欲というものは誰も持っていません。持つ意味がなかったのです。しかし近代の国民国家は、そ

うであっては困るのです。各地の小学校に二宮金次郎の銅像が建てられたのも、二宮金次郎を「学問に励んだ人物の成功例」つまり生徒たちの規範として押し出すためだったのです。
逆に考えれば、二宮金次郎の逸話を流布しなければ、親は貴重な労働力である子供を学校なんかに通わせたがらなかったとも言えます。
「学制」と同時に出された「被仰出書」には、

人々自ら其身を立て、其産を治め、其業を昌にして、以て其生を遂る所以のものは他なし、身を修め智を開き才芸を長ずるによるなり。……生を治め産を興し業を昌にするを得べし。……自今以後一般の人民……必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す。

とあり、子供を学校へ通わせることを嫌がった民衆に向けてこんこんと「立身出世主義」を説いています。しかし、民衆……特に農家では子供は大事な労働力でしたから、当然反発も起こるわけで、「学制」に反対する農民騒擾が全国で発生しました（図1 - 1）。
当初は政府の財政基盤が確立していなかったために授業料が無償ではなかったというのも

小学校入費出銭反対	京都(明治6)、島根(明治7)
学校賦課金反対	茨城(明治9)
学校新築増額反対	山梨(明治9)
小学校廃止	鳥取(明治6)
学校引き渡し	宮崎(明治6)
教育内容に反対	敦賀(明治6)
学校破壊	埼玉、北条、鳥取、名東、福岡(明治6)、三重、岐阜(明治9)

(『講座　日本教育史』第二巻〈第一法規出版株式会社〉318ページの表をもとに作成)

図1-1　明治初期「学制」反対諸騒擾一覧表

反発を受けた一因です。

当時は、民衆が学校を破壊する事件がたびたび起こっていたんですね。学校が教会の如き権威となった今の時代からは、考えられません。

ともかく、「学校へ通わせれば、将来出世してくれるかもしれない」と親に思いこませたり、当初は徴収していた小学校の授業料を無償にしたり、あれやこれやの手練手管(てれんてくだ)を使うことで日本政府はやっと就学率を100%近くにまで上昇させたのです。それでも通学率が90%を超えたのは、実に大正に入ってからでした(図1-2)。

「子供はみんな学校へ通う」という常識が日本に定着してから、まだ100年も経ってい

年　次	就学率（％）	通学率（％）
明治6（1873）	28.13	15.99
13（1880）	41.06	28.26
16（1883）	47.41	33.42
20（1887）	45.00	27.04
30（1897）	66.65	43.99
35（1902）	91.57	68.40
41（1908）	97.80	76.83
大正3（1914）	98.26	90.15

（『講座　日本教育史』第三巻〈第一法規出版株式会社〉17ページの表をもとに作成）

図1-2　通学率と就学率の動向

ないのです。

ちなみに教育勅語が発布されたのは明治23（1890）年です。この前年には大日本帝国憲法が発布され、ようやく日本政府は西欧諸国なみの近代国家としての体裁を整えつつありました。その仕上げとして、学校制度の場に「国家主義思想」を導入したわけです。

もちろん、これもドイツを見習っての政策であり、とくに日本だけが政治と教育とを一緒くたにしていたわけではありません。そもそも近代国家における学校制度は、そういう性格のものなのです。

イギリスやアメリカをまねていればもう少し違った展開になったはずなのですが、日本がドイツを手本にしたのは、ドイツが日本同様の「遅れてきた近代国家」「慌(あわ)てて資本主義化・富国強兵政策を推し進めている新入り国家」だったからです。両国は立場的に近かったのです。ですから明治政府がドイツを手本にしたのは必然といえます。

明治35（1902）年には、教科書疑獄事件が起こり、翌年に教科書の国定制が成立します。この教科書疑獄事件は教科書検定に関わっていた業者と役人がいっせいに逮捕された事件ですが、もしかしたら教科書の国定制を導入することを目的として、敢えて大がかりな捜査を行ったのかもしれません。

一方では女子教育も盛んに行われるようになりますが、これは近代国家における労働力としての大人＝国民を育成するためのものではなく、労働者である夫を家庭で支え子供を育てるための「良妻賢母」を育成するためのものでした。

その後、第二次世界大戦が勃発して日本が劣勢に立たされはじめると、国家主義教育は極端なレベルにまで肥大します。言うまでもなく、戦争に敗れそうになって国家が存亡の秋（とき）に立たされたため、国家主義的な教育をますます推し進めることで不利な現実をリカバーしようとしたのです。

小学校は「国民学校」という名称に改められましたが、もともと近代国家における小学校・中学校とは国民学校なんですね。ですから、これは小学校がより「正直」な名称に改まったということです。

ただ、もはや個人の立身出世とか言っている場合ではないので、学校の目標は「皇国民の育成」一点に絞られることになりました。国家が滅びれば個人（国民）の立身出世もありません。歴史教育にも、いわゆる皇国史観が導入され、「天孫降臨（てんそんこうりん）」の伝説が正史として教えられることになったりしました。

ところがこの後、終戦を迎えたことによって、学校教育の中身は180度変わりました。ドイツ的な国家主義色は除外され、民主主義的な教育（アメリカ的な教育）が導入されました。現代日本の学校は、この戦後期に作られた教育制度の延長線上にあります。

このように現代の学校の歴史は、昭和20年を起点として考えてもわずか60年余りにすぎず、明治の「学制」からも130年という短いものです。

資本主義社会では、ある程度の知識を習得しなければそれなりの職につくことが難しくなります。なので、子供には「教育を受ける権利」が認められているのです。

しかし一方で、資本主義社会（近現代国家）に適応した人間を創りあげるための育成機関としての学校という側面もまた、戦中戦後を問わず常に存在するのです。ですから、子供には本来は国民として「学校に通う義務」も課せられるわけです。

ただし、実は日本では子供の「通学義務」は定められておらず、親に対する「就学義務」

のみが設けられています。つまり小中学生が自分の意志で不登校になった場合、誰もその子を罰することはできないのです。不登校じたいは犯罪ではありません（ただし、親が子供を学校へ通わせないことは罪になります）。

＊学校は真理や真実を教える場ではない

学校制度を取り巻く状況がこれだけ定まらない有様ですから、学校で教えられる教育内容じたいも時代の要請に応じて二転三転し、定まることがありませんでした。学校とは国家が国策として運営している制度であり、その内容はその時代と状況に応じて変転するものなのです。一例として、教科書の中身を時代順に並べて紹介してみます（参考資料：海後宗臣他『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍、１９９９）。

学制導入当時は、ともかくも「文明開化」が急務でしたから、教科書も西欧の本を翻訳したものを使うことが当たり前でした。

地理の教科書『小学読本』はアメリカ本の翻訳・編集ものですが、いきなり「凡世界に、住居する人に、五種あり。亜細亜（アジア）人種、欧羅巴（ヨーロッパ）人種、メレイ人種、亜米利加（アメリカ）人種、阿弗利加（アフリカ）

文部省編纂
七千部限
小學讀本 卷一
明治六年三月 師範學校彫刻
岐阜縣翻刻

小學讀本卷之一
第一回
凡世界に、住居する人に、五種あり、○亜細亜人種、○メレイ人種、○欧羅巴人種、○亜米利加人種、○阿弗利加人種なり、○日本人は、亜細亜人種の中なり、

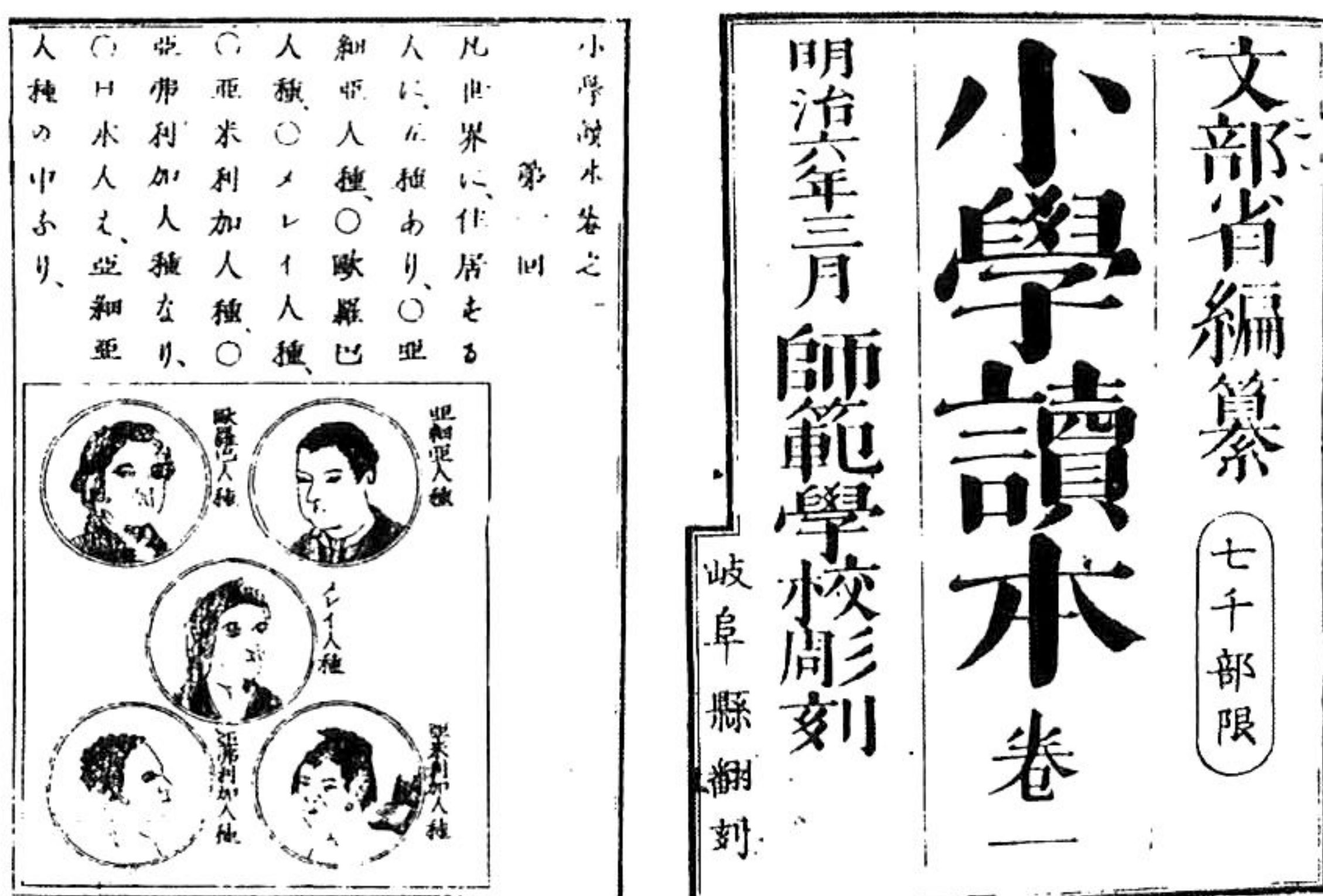



図1‐3 『小学読本』田中義廉編（東書文庫蔵）

人種なり。日本人は亜細亜人種の中なり。」でスタートします（図１‐３）。メレイ人というのは何でしょう。「日本人は亜細亜人種の一員」という概念もまた、明治のこの時期に輸入された思想なのです。言われてみれば確かにアメリカ人やドイツ人よりも中国人や朝鮮人のほうがはるかに日本人に見た目が似ていますから、この思想はすんなり受容されたのでしょう。

明治12（１８７９）年になると「学制」は廃止され、「教育令」に切り替えられます。

この頃になると急激な文明開化主義に歯止めがかかり、そろそろ日本独自の文化・思想を作りだそうという動きが顕著になります。その結果、学校教育でも儒教と皇国思想が教えられるようになりました。明治23年に教育勅語が発布され、ついで教科書の国

図1 - 4 『尋常小学修身書　巻二』(東書文庫蔵)

図1 - 5 『尋常小学日本歴史　巻一』(東書文庫蔵)

定制度が成立したあたりで、近代日本の学校制度はおおむね器が完成します。

この時期の修身の教科書を見てみますと、図1 - 4のように二宮金次郎が理想の人物像として大きく取り上げられています。金次郎の徳はもちろん「学問好き」が第一ですが、儒教精神に基づいて「親孝行」とか「勤労精神」もあげられています。「仁義忠孝」ですね。

また歴史教科書では、南北朝時代をどう教えるかで議会での紛糾がありまして、最終的に政府は南朝を正統とする立場を取りました。なので、以後の教科書で楠木正成(くすのきまさしげ)が忠臣として語られるようになりました(図1 - 5)。

第二次大戦中の国民学校で使われた修身教科書ともなりますと、

日本 ヨイ 國、
キヨイ 國、
世界ニ 一ツノ
神ノ 國、
日本 ヨイ 國、
強イ 國、
世界ニ カガヤク
エライ 國。

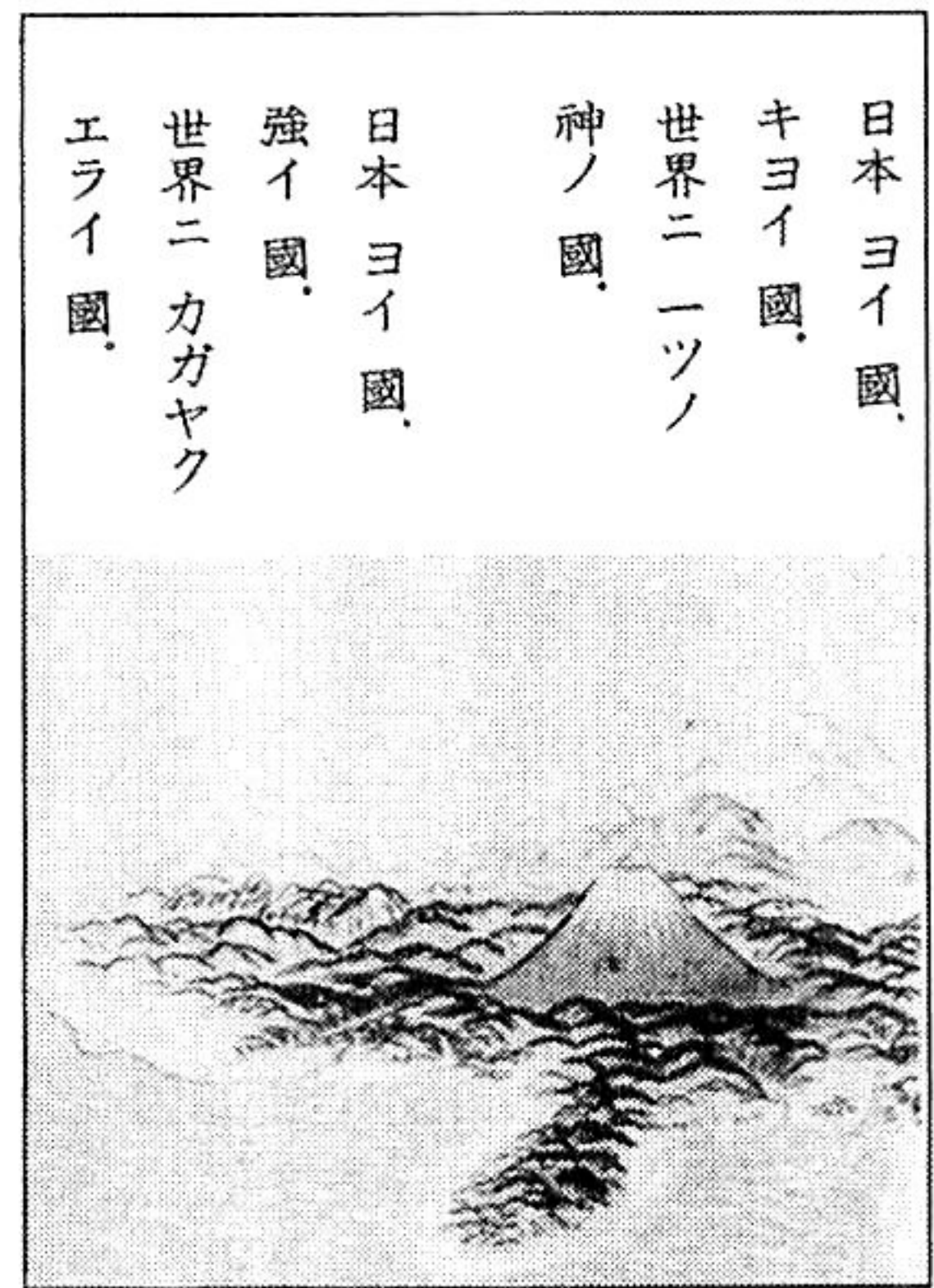



図1-6 『ヨイコドモ　下』（東書文庫蔵）

「日本ヨイ国、キヨイ国。世界ニ一ツノ神ノ国。」と、ナショナリズムが激しくレベルアップしていますね（図1-6）。

　現代人の視点で見ると小学校の教科書としてはいくらなんでも極端なんじゃないかと思いますが、アメリカとの戦争に負けそうになっていたので国民の戦意を維持するためにこれくらい大袈裟な教育活動が必要だったのです。愛国心とは、国家が危機に瀕した時に高揚する（高揚させねばならなくなる）感情なのです。

　中国でも、朱子学が盛り上がったのは宋が北方民族のたてた金政権に追われて南方に逃げていた時期ですからね。

　一方、当時の歴史の教科書はいきなり神国高千穂（しんこくたかちほ）の峰、そして天孫降臨からスタートします（図1-7）。

　これが戦後の教科書になりますと、宇宙人みたいなゴーグルを被った土偶に代表される縄文土器あたりからスタートするようになるわけですから、とても同じ教科とは思えません。

第一　神國

一　高千穗の峯

大内山の松のみどりは大御代の御榮えをことほぎ、五十鈴川の清らかな流れは日本の古い姿をそのままに傳へてゐます。

遠い遠い神代の昔伊弉諾尊・伊弉冉尊は、山川の眺めも美しい八つの島をお生みになりました。これを大八洲といひます。島々は、黒潮たぎる大海原に、浮城のやうに並んでゐました。つづいて多くの神々をお生みになりました。最後に、天照大神が、天下の君としてお生まれになり、日本の國の基をおさだめになりました。

図1－7　『初等科国史　上』（東書文庫蔵）

さて、一口に「戦前」といっても時代によってこれほど教科書の内容は異なります。つまり教科書の内容（特に文系教科）はその時代の国策に沿って策定されるものであって、絶対不変の真実というわけではないのです。

ちなみに僕が地元神戸で公立小中学校に通っていた時には、道徳の授業はほとんど実施されていませんでした。たぶん代々の担任の先生が日教組の組合員かなにかで、道徳の授業を意図的にサボタージュしていたのでしょう。「世界ニ一ツノ神ノ国」はいくらなんでも極端ですが、二宮尊徳の親孝行話くらい教えてもいいんじゃないかと子供心に思いました。

そういえば中学の世界史の授業では、ソ連と中国ばっかり教えられたような気がします。中学でヨーロッパ史をまったく教わらなかったので、大人にな

ってからやむを得ず自分で勉強しました。おかげでいろいろな面でかなり損をしました。
そもそも学校制度とは国策の一環であって、資本主義社会＝近現代国家を維持するために「立身出世主義」と「国家主義」を教えるシステムであることはすでに述べましたが、戦後はこの両輪のうちの「国家主義」がタブーとされたわけです。
さすがに最近になって、これを復活させようとする動きが活発になっていますが、今までの教科書の変遷を見てもわかるように日本の学校教育はどうにも極端から極端に振れる傾向があり、中庸の精神に欠けている面があります。「左」と「右」ばかりで、真ん中がないのです。日教組時代の反動でまたしても極端な「国家主義」に走らなければいいのだけど、と思います。
まあいずれにしても僕が言いたいことは、学校は別に「真理」を教える場所ではない、ということです。何をもって「真理」や「真実」と言うのかと問われると難しいのですが、学校とは近現代国家に必須の機関の一つであって、そこで教えられる内容は時代的・相対的なものだということは確実です。学校は神聖なる学舎でもなければ真理を教授してくれる教会でもないのです。

＊国家にとって都合のいい人間を育てる

さて戦後の学校はご存じの通り「受験戦争」「偏差値教育」「学歴主義」といった現象を産みだしました。これは恐らく、学校の「国家主義」的な側面がほぼ全面的に排除された結果、学校のもう一つの側面である「個人主義的な立身出世主義」だけが極度に発達したことに起因します。個人主義を完全に排除していた戦中の国民学校時代と、真逆（まぎゃく）になったわけです。

立身出世主義は、資本主義社会を維持するために必要不可欠な思想です。誰もがスローライフ・エコライフに目覚めて森や海に引きこもってしまったら、資本主義は成り立ちません。しかしながら、元々は国家主義の側に振り向けられるはずのエネルギーまでもが学校内で立身出世主義に集中させられた結果が、受験戦争であり学歴主義なのではないでしょうか。

ついでに、学歴偏重の価値観が肥大した理由には、生徒を集団で教室内に長時間拘束して集団授業を受けさせるという学校のシステムがサラリーマンの育成に向いていたということもありました。企業側は、学校での集団生活に適応できない生徒は会社に入っても職場環境に適応できないだろう、と判断できるわけです。

現代における不登校児への親の過剰反応は、子供がこの立身出世競争のレールから脱線してしまうことへの恐怖が一因になっていると思われます。「良い学校へ行けば良い会社に就

職できて立身出世できる」という明治以来の信仰が、戦後の高度経済成長期を生きた日本国民に広く信じられてきたのです。

しかし、この「良い学校へ行けば良い会社に就職できて立身出世できる」という信仰が今、揺らいでいるのです。

そもそも、「大学進学→企業に就職→サラリーマン→終身雇用→定年退職して年金で悠々自適に老後を暮らす……」という戦後日本人のライフスタイルじたいが、もはや幻想と化しつつあります。今は苦労して企業に入ってもいつリストラされるかわかりませんし、はたして年金を貰えるのかどうかもはっきりしません。先行きがこれだけ不透明になってしまった以上、将来のために黙々と学校に通い続けることに意義を見出せなくなる生徒が増加したのは当然といえます。

それに、教師の質も悪いです。なにしろ自動車の運転免許と同じで、一度教職の資格を取って採用試験に受かればよほどのことがない限り教師という職業からはじかれることはありません。教職は、それこそ終身雇用に近いのです。

しかも、大学で資格を取り採用されれば誰でもすぐに教師になれるので、社会経験がない子供がそのまま教師になってしまう。サラリーマン養成のための学校のはずなのに、教師自

身にサラリーマン経験がないというおかしな事態が起こるのです。
ですから、中には悪質な教師も大勢混じっています。特に目立つのが、生徒に対して性的なハラスメントや肉体的または精神的ないじめを行う「大人子供教師」ですね。いちいち例をあげるまでもありませんが、「最初から子供への性的興味が目的で教師になったんじゃないか」と疑いたくなるような教師の事件が毎日のように報道されていますよね。
逆に、真面目な教師は、その真面目さがたたって学級崩壊や過酷な労働条件などの現状に悩んで鬱になりやすいそうです。生徒をいじめたりいたずらしたりしている教師は職場が薔薇色にみえて絶対に鬱になったりはしないでしょうから、これはもう悪循環というか、「悪貨が良貨を駆逐する」という状態になってしまっていると言えそうです。

＊レジャーランド化する学校

学校の意義が揺らいでいるということについて、もう少しだけ詳しくみてみます。
戦後の学校は「国家主義」の完全な排除によって、「立身出世主義」のみを教える場となりました。なにしろ学校から「立身出世主義」まで奪い取ってしまうと、日本という国が資本主義社会・国民国家として成り立たなくなってしまいます。それではは日本を占領したアメ

リカとしても困ってしまうわけで、戦後日本は経済大国（＝戦争をしない資本主義国家）としての復興を目指す路線を走ることになりました。その結果、高度経済成長時代が到来し、日本は経済復興したわけです。

で、その過程で、「学歴社会」「受験戦争社会」が成立したのです。すでに国家主義はなく、残ったものは個人主義と資本主義の論理だけですから、どのような人間でも学問を修めて良い学校に行けば立身出世の道が開けるように感じられたのです。逆に考えれば、国家という巨大なイコンが事実上消滅したわけですから、個人的に出世しない限り、個人の救済・安定も望めないのです。

国家と聞くと民衆を洗脳して弾圧する組織というイメージも浮かぶかもしれませんが、実際には国家（近代以前は、教会だったりしました）という大がかりなシステムによって人生の救済・安定を保証してもらうことで民衆が安心して生きていけるという側面もあるのです。しかし戦後は、国家がその役割をおおっぴらに果たせない状況になりました。そこで、それまでの日本ではなかなか根付かなかった個人主義が発達し、極端な学歴社会を産みだした……というのが僕の考えです。

そうなると、学校は同じ国に暮らす仲間の集まりではなくなり、受験戦争のライバルが集

う闘いの場みたいになります。実際、ガリ勉は妬(ねた)まれていじめられます（進学校ではそんなことはないと思いますが）。クラスの全員が、立身出世レースに立ちふさがる敵なのです。

１９８０年代初頭にマスメディアで第一次いじめ問題ブーム・校内暴力ブームが起こりましたが、これは学校が弱肉強食の競争社会と化した結果だったかもしれません。

しかし、そのような過激な受験戦争とその裏面としての校内暴力は、'80年代以後徐々に衰退していきます。というのは、一つには少子化が進行したからです。今や、大学が倒産する時代になってしまいました。どこでもよければ、誰でも大学に入れるのです。

もう一つは、受験の産業化が進行し、よほど頭の良い子供を除けば裕福な家庭の子供でないと東京大学に入れないという「経済＝学歴格差」が顕著になったためです。幼稚園児の「お受験」なんて、庶民には夢のまた夢ですよ。

つまり、誰でも簡単に大学には入れるが（建前平等）、本当に良い大学には金がないと入れない（現実不平等）、という状態になったんですね。田舎の公立中学・公立高校を経て東京大学に合格するなんてことは、ほとんど夢物語になってしまいました。

学歴格差社会の到来です。

こうなると、立身出世主義の物語は、たちどころに色あせてしまいます。毎日新聞の最近

の記事によると、日本の高校生は他の国の高校生に比べると出世意欲が圧倒的に低いのだそうです。

高校生意欲調査：日本、出世意欲低く

日本の高校生は米中韓の高校生よりも「出世意欲」が低いことが、財団法人「日本青少年研究所」（千石保理事長）の「高校生の意欲に関する調査――日米中韓の比較」で分かった。「将来就きたい職業」では、米中韓に比べ、明確な目標を持てない日本の高校生の実情が浮かんだ。

調査は06年10月～12月、日米中韓の高校生計５６７６人を対象に実施。進路や人生目標、職業意識などを聞いた。所属する高校を通じて実施したため、回収率は１００％になるという。

「偉くなりたいか」という問いに、「強くそう思う」と答えた高校生は中国34・４％▽韓国22・９％▽米国22・３％に対して、日本はわずか８・０％。卒業後の進路への考えを一つ選ぶ質問では、「国内の一流大学に進学したい」を選択した生徒は、他の３国が37・８～24・７％だったのに対し、日本は20・４％にとどまった。

また、将来就きたい職業（複数回答）では、日本は99年調査よりも弁護士や裁判官、大学教授、研究者の割合が低下。特に、公務員は前回の31・7％から大幅減となる9・2％だった。逆に「分からない」を選んだ生徒が6・2ポイント増の9・9％になった。千石理事長は「食べることに困らなくなり、今の高校生は『偉くなりたい』という意

「あなたは偉くなりたいと思いますか」という問いに「強くそう思う」と答えた高校生の割合。

「あなたは高校卒業後の進路について、どう考えていますか」という問いに「国内の一流大学に進学したい」と答えた高校生の割合。

欲がなくなってきている。また、（従来『出世』と考えられてきた）職業に魅力や権威がなくなっている」と分析している。

（毎日新聞２００７年４月25日付西部朝刊）

偉くもなりたくないし、一流大学に行きたくもない、という高校生が増えたわけです。裕福になりすぎてハングリーさが消えたという考え方もできますが、「どうせ出世できない」「一流大学になんて、どうせ入れない」という学歴格差社会の現実が見えてしまっている高校生が増えたのだと思います。

また、公務員ですらいつ組織が民営化されるかわからず、もはや終身雇用が保障されているとも思えなくなったのでしょう。

もう学校は「立身出世」を教える場でも「国家主義」を教える場でもなくなってしまったのです。

では、学校はどうなったかというと、レジャーランドになったわけです。

つまり、遊び場ですね。

最初にレジャーランドと化した学校機関は大学でした。大学は早くから、（一部を除いて）

サラリーマンを養成する機関と化していました。資本主義社会の代表的な労働力といえば、サラリーマンです。大学はサラリーマン予備軍を集める機関となり、大学の偏差値と格によって企業が新卒サラリーマンを選別するというシステムができあがりました。

そうなると、学者を目指しているわけでもなんでもない若者がただただ就職活動のために大学に集まってくるという事態になり、大学は４年間にわたる巨大なモラトリアム空間になったわけです。

少子化が進むと、高校もレジャーランドになっていきました。無理して受験勉強する必要が薄れたので、多くの高校もまた大学へ進むためのモラトリアム空間になったのです。義務教育と大学の間のつなぎの場という状態に。

学校はそもそもレジャーランドに最適な空間です。あくせく労働しなくてもいいですし、今の学校は男女共学が基本ですから同年代の異性といくらでも知り合えます。個人主義とモラトリアムと、男女共学。この三つが重なったところに、学校のレジャーランド化という現象が現れたのです。

こうなると、レジャーランドとしての学校に馴染(なじ)めない生徒は、学校に行く意欲を喪失してしまいます。何のために行かなければならないのか、目的が見あたらないのです。

(滝川一廣「不登校はどう理解されてきたか」より)

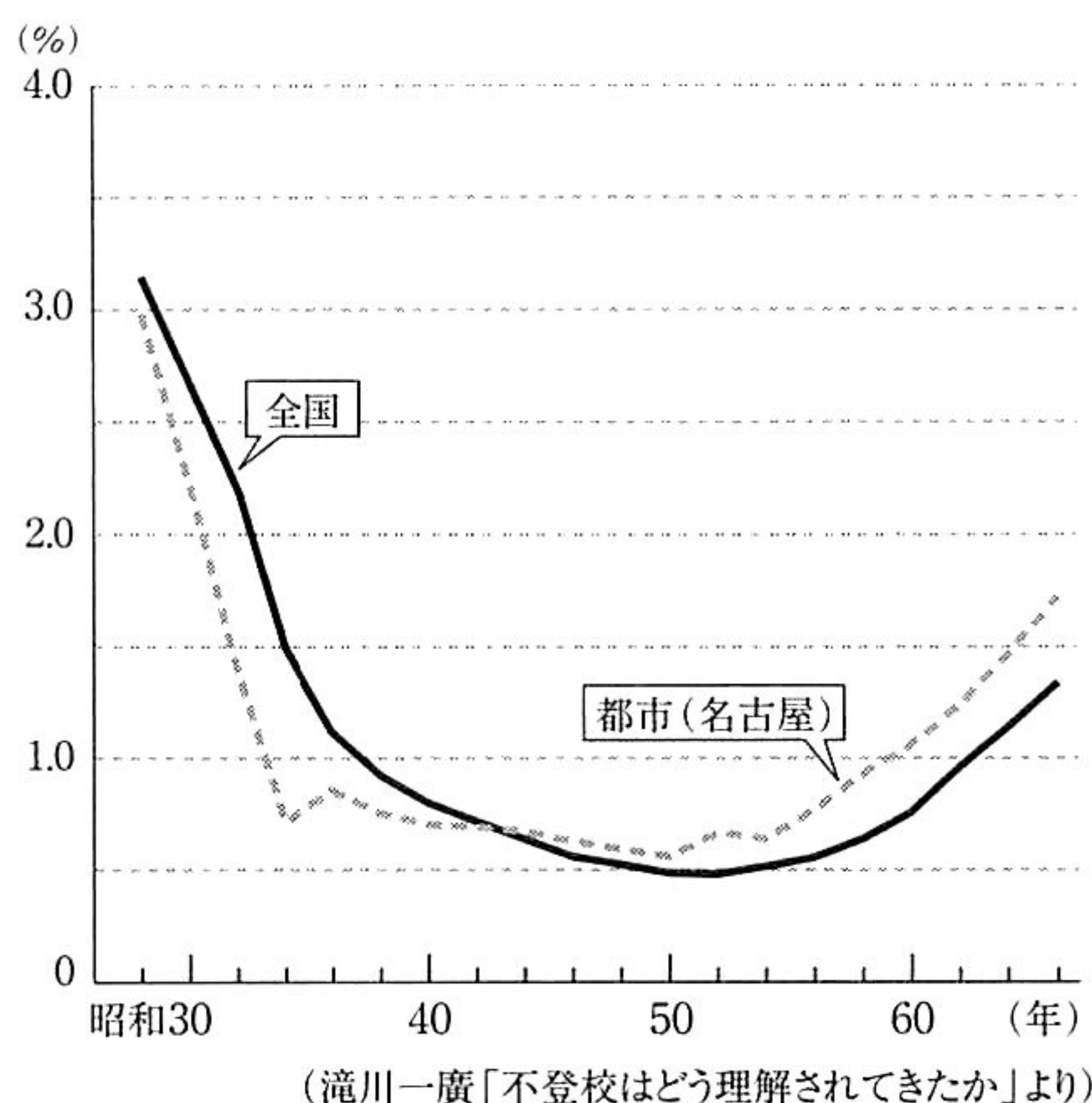



図1-8　中学生の長欠率(年間50日以上欠席した生徒の割合)の推移

実際、中学生の不登校現象は、昭和50（1975）年を境に増加の一途を辿っています(図1-8)。

小学校でも昭和60（1985）年を過ぎた頃から不登校児童数が上昇しはじめていますが、しかし実は昭和50年頃の「ほぼ100%の小中学生が登校していた」という時代のほうが世界史的には異常なのです。

……ほぼ100%の子どもが登校していたのは昭和50（1975）年を挟むわずかの間だけだったとわかる。海外に目を向ければ、米国では地域差が大きいものの平均して6%を越す欠席率（1980）、英国にいたっては欠席率は全国で10%、都市部の中学校では25%にも上り（1990）、実に多くの児童生徒が休んでいる。……こうしてみると長欠率の年々の増加は驚くことではなく、わが国も英米の水準に近づきつつあるに過ぎぬとも考えられようか。

（滝川一廣「不登校はどう理解されてきたか」広田照幸監修、伊藤茂樹編著『リーディングス　日本の教育と社会8　いじめ・不登校』日本図書センター、２００７所収）

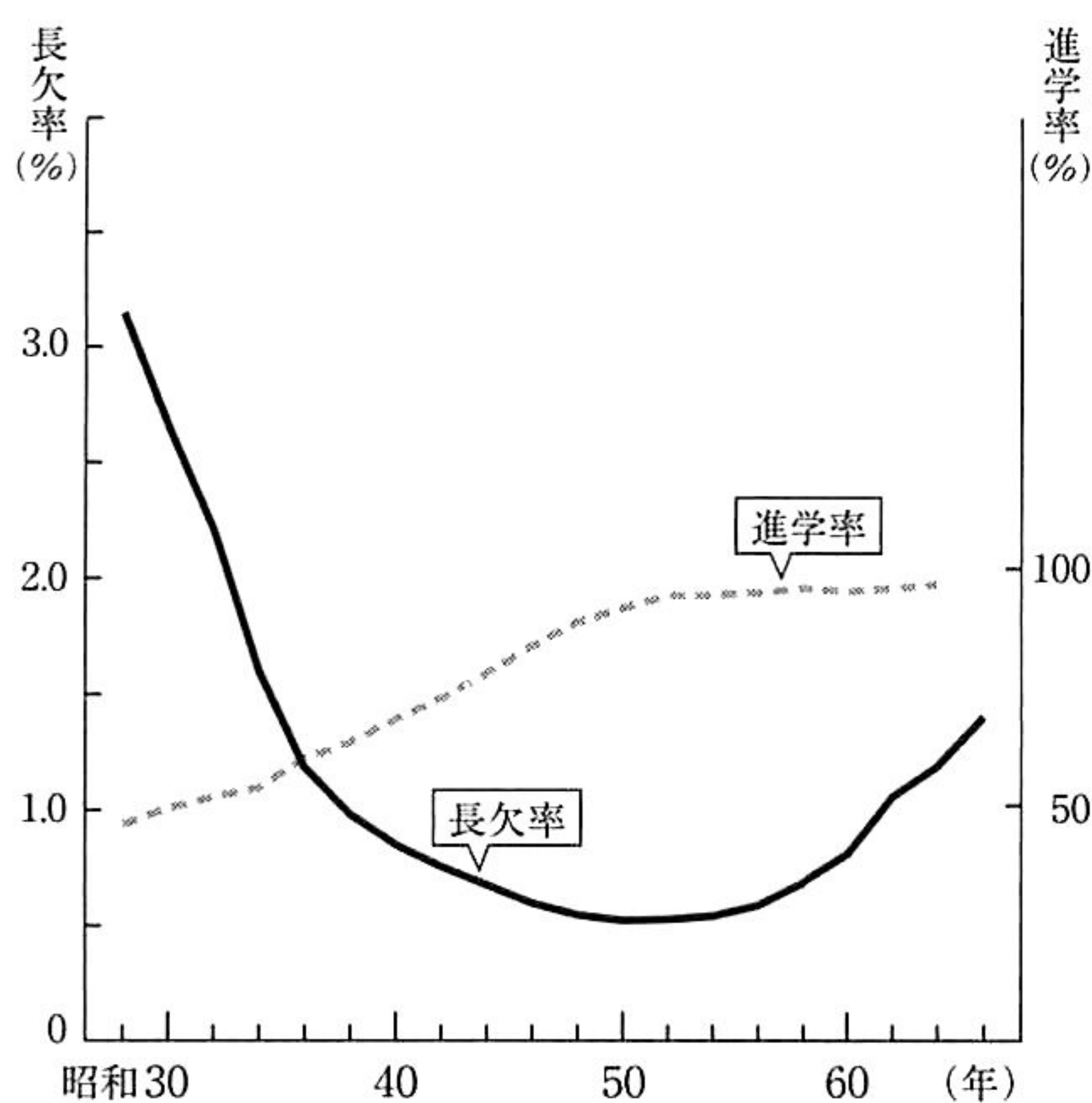
滝川一廣によれば、日本での不登校はまず都市部の学校からはじまったといいます。当初、マスメディアに代表される社会はこの「明確な理由もなく学校に通わない子供」に対して「登校拒否」とか「登校拒否症」という一種の精神疾患のレッテルを貼って対応しようとしたり、受験戦争が不登校の原因になっていると考えたりしたそうです。しかし、実際には高校への進学率の上昇曲線と、不登校児の上昇曲線とは、相関関係がないのです（図１‐９）。

むしろ高校進学率がほぼ１００％に到達した瞬間から、中学生の不登校が増加に転じていることがわかります。

図1-9　中学生の長欠率と高校進学率の推移

これは、受験戦争が不登校を産んだのではなく、学校のレジャーランド化（＝ある種の子供にとっての学校という制度の無意味化）が不登校を産んでいるのではないかという僕の考えに裏付けを与えてくれるデータかもしれません。

滝川によれば、

……（昭和）50年に第三次産業人口がついに全体の50％を超え、さらに上昇を続けていることがわかる。第一次産業の激減はもとより、第二次産業も下降線を描いている。最先進国的・超近代的な高度消費社会に入ったのである。……制度的な耐用年限がいよいよやってきたのである。子どもたちがなんらかの負荷や違和を学校生活に抱いたとき、その負荷や違和をおしてまで登校を続けさせるだけの重要不可欠性や絶対性（聖性）を学校がもちえない社会になった。……近代化の進展によってわが国の伝統であった集団主義的な生産様式・生活様式が急速に解体している今の社会では、学校の大がかりな集団性に耐えるトレーニングが社会人としての将来につながる実感も保証もない。……現代社会にあって、資格取得の問題さえ除けば、ぜひとも学校に通わねばアクセスできない知識や技能がどれだけあろうか。こうして50年を境に長欠率は反転上昇し、増加の一

途となったにちがいない。

（滝川一廣「不登校はどう理解されてきたか」前掲書）

コンピューターやＩＴの勉強も満足にできない現在の学校はレジャーランドと化するしかなく、それにたかが中学・高校の教科書に書いてあるようなことは自宅で独習できる程度の初歩的な知識にすぎません。

学校をレジャーの場として楽しめないタイプの生徒は、だから、学校へ通う意味を喪失してしまうのです。

近年の学園ものの漫画や小説などを見ても、取り上げられるシチュエーションは「恋愛」「部活動」「体育祭」「文化祭」「夏休み」「友情」「セックス」などで、授業のシーンは一コマで片付けられるか、授業中に違うことに夢中になって先生に叱られるか、くらいしか描かれません。「ああよく寝た」の一言で終わるケースもあるくらいです。「学校で勉強することが立身出世の道に繋（つな）がる」という思想がすでに崩壊しているわけです。

もちろん、一方で学校という旧来の価値観を守るため、教師による「教育再生」をテーマに掲げた漫画やドラマも多く作られてはいるのですが……。

「金八先生モデル」教え子に投票依頼　落選の久留米市議を供応買収容疑で逮捕　県警

福岡県警捜査二課と久留米署は二十四日、公選法違反（供応買収）の疑いで久留米市議糸井清（72）＝同市野中町＝と妻の節子（71）の両容疑者を逮捕した。元教員の清容疑者はテレビドラマ「3年B組金八先生」のモデルとして知られていたが、二十二日投開票の久留米市議選で、教え子らに飲食接待して自身への投票を頼んでいたという。

調べでは、二人は共謀して三月中旬ごろ市内の飲食店で、清容疑者の小学校教諭時代の教え子や知人ら十人に対し、自分への投票と票の取りまとめを依頼し、一人約千八百円の飲食接待をした疑い。二人とも容疑を認めているという。県警によると会合には三十数人が参加しており、今後任意の事情聴取を進める。

同市議選は一市四町合併後初の選挙で、定数四十二に対し六十四人が立候補。清容疑者は二〇〇三年の旧久留米市議選で初当選し再選を目指したが、落選した。

清容疑者は福岡教育大学付属久留米小の教諭時代、俳優の武田鉄矢さんの教育実習を指導。武田さんも「教師とはどういうものか教わった」と話していたことから「金八先生のモデル」としても知られていた。

（西日本新聞2007年4月25日付朝刊）

生徒たちはこういう現実をインターネットを通じてよく観察していて、その手のお話にはすっかり醒めているのではないでしょうか。

そもそも「3年B組金八先生」という教育ドラマじたい、現実の学校が崩壊しはじめた'80年代初頭に、学校の崩壊を食い止めるために「必要」とされて生まれた物語なのです。かつての日本は生徒を学校へ通わせるために「二宮金次郎」という理想的な生徒の物語を流布したのですが、現代の日本社会は「金八先生」という理想的な教師像を流布することで生徒の心を学校につなぎ止めようとしているんですね。

＊「出家（しゅっけ）」というシステム

しかし、本当に人は学校に通わなければ勉強もできず、人間的にも成長できないのでしょうか？　他に、どんな生き方も許されないのでしょうか？　これは、大いに疑わしいです。

現代の学校制度の対極に位置するシステムが「出家」ですね。

出家というのは、社会の外に出てしまう、ということです。競争社会から外れるのです。

もちろん社会の外にも別の社会（お寺とか）があるわけですが、とにかく出家している間は俗世間のことには関わらない。

まあ今では「出家」といってもかなり緩いシステムを採用しているところが多いのですが、それはそれだけ出家する人が減ったということでしょう。だいいち仏教やキリスト教の信者でなければ、狭い意味・一般的な意味での「出家」はできない。ですから、無宗教な現代人は出家したくてもできないというのが現状でしょう。

昔は、托鉢している僧侶には施しを与えるのが当たり前でした。社会に背を向けて孤立して生きていくというライフスタイルが、認められていたのです。

しかし今では、出家とか僧侶に憧れる若者に対して、すぐに「現実逃避にすぎない」なんて厳しいことを言ったりしますよね。まぁこう言う人はそもそも「社会」と「現実」の区別がついていないわけですが。

現代の社会では、資本主義社会のレールから外れてしまうという意味で、出家もホームレスも引きこもりも同様に「平均の外」「標準の外」という扱いを受けるのです。

つまり、「働かずに生きていく」という行為そのものが、現代社会においては罪悪なわけです。現代社会は資本主義社会であり、労働という行為そのものを崇拝する社会ですから。

それでも托鉢僧は一応「僧侶という職業」を持っていると認定されるので、かろうじてセーフなのですね。反対に、寺社組織に所属せず勝手に托鉢をやっていると、いろいろな差別用語を貼られて叩かれます。

「引きこもり」や「ニート」なんて言葉も、ありていに言えば「働かない人間を社会的・道義的に責めるための言葉」です。「働かない大人」は「学校に行かない子供」と同義ですから、「不登校」も同じ役割を持っています。

確かに、国民全員がいっせいに出家してしまったら、社会は成り立たなくなります。仏教が大流行した大昔の中国ではあまりに出家する人間が多くて経済にダメージを及ぼしたので、出家制度を国家が統制していたと聞きます。

しかし、世を捨てて生きるという生き方を社会がきちんと用意しておくことが、いつの時代でも必要なのではないかと思います。最後には出家という道があると思えば、もっと人間は気楽に生きられるのではないでしょうか。今の資本主義社会では、人間は生まれてから死ぬまで永遠に競争し続けなければなりません。これでは息苦しくてやっていられません。

もちろん、現代の国家も出家に代わる「引退システム」を整備してはきたのです。

日本には、晩年になってようやく、年金を貰ったり老人ホームに入ったりして悠々自適の

隠遁生活が可能になる……というシステムが一応存在します。古代ローマには、奴隷に対しても数十年の兵役を務めたらローマ市民権を与えて都市に住まいを与え、生活の面倒を見る……という市民制度がありました。それと同じです。我慢して定年まで労働すれば、後は楽に生活させてあげようということです。

しかし、ご存じのように日本の年金制度は破綻しかかっており、老人ホームにしても多額の資金を調達できた人だけが入ることが可能という有様になりつつあります。そのような大金を払えない多くの庶民の老後ケアは、安価な民間の在宅介護システムに切り替えられていくことでしょう。

それに、老後になってやっと引退できるという現状のシステムは「年老いて労働できなくなってはじめて出家が許される」ということを意味します。無産階級の人間は、なにがあっても年を取って長年の労働で身体がボロボロになるまでひたすら働かなければいけないというわけです。なんだか働きアリの生涯みたいです。

仮に人生70年としますと、現代の人間は5歳で幼稚園や保育所に通い始め、60歳くらいで引退し、残りの10年前後を「出家」として暮らすということになります。

もし勝手に家を捨てたら「出家」とは呼ばれず、「ホームレス」と言われます。仕事をし

ない時期を作ると「ニート」と呼ばれ、思索にふけると「引きこもり」。出家（不労働）と還俗（労働）を繰り返す人は「フリーター」。学校に行かなければ「不登校」です。

マックス・ウェーバーをひっぱりだしてくるまでもなく、資本主義社会における第一義の信仰とは「労働への信仰」です。中世のキリスト教徒が教会へ行く義務を怠ったら社会から制裁されたのと同じように、現代人は労働の義務を怠ると社会から非難されるわけです。

「通学の義務」の本質とは、「子供版・労働の義務」なのです。実際には日本の子供には「通学の義務」はなく、親に「就学の義務」があるだけなのですが、それでも不登校を理由に子供が道徳的に非難されたり、あげくのはてには病人扱いされてしまうのは、現代の日本人が「労働の義務と通学の義務」を神聖視しているからなのです。

そしてそこには、「社会から一時的に出家することによって、得られるものもある」という柔軟な発想はありません。ともかく継続すること、忍耐強く学校や会社に通い続けることだけが求められるのです。

しかしながら「出家」は元来「修行」です。逃避ではない。

一見ただ怠けてさぼっているように見えても、実は内面であれこれと精神修養のようなことをやっているのかもしれません。学校で机に座って授業を聞いていることだけが学習だと

考えるのは、現代人の陥(おちい)りやすい誤謬(ごびゅう)ではないでしょうか。この話については4章で具体的に述べてみます。

＊脱学校の社会

ところで学校が宗教的制度であり国家が運営する教会の代用品であるという考え方、学校がサラリーマン育成センターであるという考え方は、おそらくイヴァン・イリイチがオリジナルでしょう。

教育機会を平等にすることは、たしかに望ましいことでもあり、実現可能な目標でもある。しかしこれを義務修学と同じことだと考えることは、魂の救済と教会とを混同することにも等しいのである。学校は近代化された無産階級の世界的宗教となっており、科学技術時代の貧しい人々に彼らの魂を救済するという約束をしているが、この約束は決してかなえられることはない。

国民国家は学校を採用し、全国民をそれぞれが等級づけられた免状と結びつく等級づけられたカリキュラムの中に義務としてひき入れたのであるが、それはかつての成人式

の儀礼や聖職者階級を昇進していくことと異ならないものである。近代国家は自国の教育者の判断を、善意の怠学者補導官や就職条件を通して国民に押しつけてきたが、それはちょうどスペインの国王たちが彼らの神学者たちの判断を、中南米の征服者や宗教裁判を通して被征服民族や国民に押しつけたのと全く同じことなのである。

（イヴァン・イリイチ『脱学校の社会』小澤周三訳、東京創元社、１９７７）

イリイチによれば、近現代国家における学校には、次のような社会的機能があります。

- 「終わりのない消費という神話」の創出。学校で教授されるという儀礼体験を経て、生徒はすべての活動において常に学校（専門化された制度）を必要とするようになる。
- 「価値測定の神話」の創出。学校に通う生徒は、カリキュラムによって測定され続ける結果、価値とはすべて数値化・文書化されうると考えるようになる。
- 「価値を詰めこむ神話」の創出。学校において教師はカリキュラムの販売者であり、生徒は消費者となる。
- 「無限に進歩するという神話」の創出。

つまり、学校とは資本主義社会の雛形なのです。そこで生徒は、資本主義社会の基本ルールを徹底的に叩きこまれるのです。

たとえば、学校を休むという行為は、会社を欠勤するということに等しい罪悪です。

教室で朝から夕方まで黙って座っていられないということは、会社の職場で黙々と仕事を遂行できないということに等しい。

教室や部活でいじめられる生徒は、職場で上司や同僚とうまくやっていけない社員に等しい。

勉強をしない生徒は、働かない社員、余剰価値を生み出さない労働者に等しいのです。

イリイチが言いたいことは、学校とは人間を資本主義社会・国民国家に適応したタイプの「大人」に改造するための、「通過儀礼」の場だということです。入学とは洗礼であり、教師とは神父であり、そして不登校に陥った生徒は煉獄に落ちたという罪悪感を背負わなければならないのだ、と。つまり、資本主義という宗教の敬虔な信者を養成するための教会こそが、学校なのだ、というわけですね。

イリイチはそこで「学校制度を廃止しよう」と提言したわけですが、さすがに廃止は行き

すぎとしても、学校制度の歴史的な誕生理由や発展してきた経緯を忘れて学校制度を絶対視・神聖視する現代人にとって、学校というドグマを相対化する効果が彼の思想にはあったわけです。

＊「いじめられる側」に問題はあるのか

学校とはそもそも何かという問題に関する話はこれで終わりです。この本の後半、４章では、「それでは本当に、学校に行かない人間が現代社会の中で生きていけるのか」という疑問について考えてみたいと思います。

ある日のこと。仕事の合間になんとなくビデオサーバーを見ていると、不登校やいじめの問題について、テレビのワイドショーでとある高い社会的地位を持ったコメンテーター（もちろん「勝ち組」の人です）が、

「人間だって生物なんだ。生物の世界は、弱肉強食なんだ。だから人間の世界だって弱肉強食なのであって、いじめられる弱者が悪いんだ」

という主旨の発言をしていました。

この発言は別に視聴者から非難されなかったみたいなので、つまり今の世間にはこういう

風潮が広まっているようなのです。

僕は「歴史は繰り返されるな」と思いました。

「弱肉強食の論理」が西欧で広範に支持されるようになったのは生物学者チャールズ・ダーウィンの『種の起源』が出版された１８５９年以後のことだと思いますが、新しいところでは自然淘汰理論にＤＮＡという科学知識をくっつけたリチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』という本もヒットしまして、なんとなく、

「生物の世界は、適者生存＝弱肉強食」

「人間もＤＮＡによって作られている生物である」

「人間の世界も、だから、適者生存というルールで成り立っている」

というふうに考える風潮が広まっているのではないかと思います。

ダーウィンの進化論はそもそも生物に関する学説でして、人間や社会とは無関係な思想だったのですが、時はまさに19世紀。産業革命を果たして資本主義化していた西欧の列強国家が植民地主義・帝国主義を究めようとしていた時代でした。ですから、人間社会に「適者生存」「進化」「淘汰（とうた）」というダーウィンの概念を適応することにより、帝国主義を理論的に正当化できると考える人たちがいたわけです。

こういう思想を「社会進化論」と呼びます。

代表的な思想家としては、イギリスのハーバート・スペンサーやドイツのエルンスト・ヘッケルがあげられます。

スペンサーは、資本主義の自由競争市場こそが人間社会における適者生存・弱肉強食ルールを保証するシステムだとして資本主義・自由主義を支持しました。

ヘッケルはダーウィニズムをドイツに紹介した人物で、自ら書いた社会進化論の本もベストセラーとなりました。ヘッケルによれば国家間の戦争もまた、弱肉強食・自然淘汰・社会の進歩という進化論的目的のために行われるものなのです。ニーチェの「力」と「超人」を志向する哲学も、ヘッケルの影響を受けていると言われています。

ヘッケル以後、社会進化論はイギリスのゴルトンを経由して優生学という学問思想に発展します。ゴルトンは、遺伝子的に劣等な人種を、自然淘汰に任せておくことなく、人為的に淘汰して人類の「退化」を食い止めなければならないと言いだしました。このゴルトンは実はダーウィンの従兄(いとこ)です。彼の進化論に触発されて優生学の発想を思いついたのでしょう。

ゴルトンは、人間の世界に「社会」というシステムが存在する限り、人間は生物学的に正しい生き方(「自然淘汰」や「適者生存」「弱肉強食」)を生きられないと考えました。つま

り、文明社会は昔から「弱者の救済」という一つの機能を担ってきましたが、これは本来自然界・生物界にはありえない人工的なルールだというのです。まあ、確かにそうかもしれませんが。

ところがゴルトンはここから、ダーウィニズムを人間社会において実現するためには、そのような文明の機能じたいを放棄して社会的・人為的な弱肉強食の世界を作らなければならん……というのですね。

というのも、そうしなければ、いずれ人間は劣等な遺伝子に汚染されて、退化してしまう、現状の平等社会・助け合いの社会は優秀な人間を逆淘汰してしまうシステムになっている、というわけです。

また、ヘッケルとおおむね同時期に活動したイタリアのロンブローゾは、犯罪者は遺伝によって生まれるという説を唱えていました。遺伝ですから、外見つまり見た目からして犯罪者はすでに「犯罪者の顔」をしているのだ、というのです。「犯罪者は見た目が9割」というわけです。

優生学が後にナチスドイツと結びついたことはわざわざ書くまでもないでしょうが、最近になってこのような思想……人間の世界も弱肉強食であるべきだという思想が、復活してき

たようなのです。

１９７６年に発表されたドーキンスの『利己的な遺伝子』は、「種」を「ＤＮＡ」に書き換えて復活した「20世紀のダーウィニズム」といえます。生物界は、実は種（個体）ではなくＤＮＡの自然淘汰・適者生存・弱肉強食の世界だというわけです。しかもドーキンスは同書の中でさっそく「ミーム」なる「文化的遺伝子」という概念を産みだし、「利己的な遺伝子」の世界観を人類の社会・文化にまで拡張しました。

歴史は繰り返すのです。

ドーキンス自身はまさか優生学思想を復興させようとは考えていないでしょうが、「利己的な遺伝子」の思想がいずれまた現実の社会体制に導入されないとも限りません。「学校でいじめられるほうが弱いから悪い」という発想は、近年のそのような風潮から飛びだしたものだと思われます。ソ連が崩壊してアメリカ＝資本主義社会が一人勝ちになった結果、弱肉強食の思想が世界的に復活しはじめているのかもしれません。

人間が他の生物と違うのは、弱肉強食の論理だけで生きていない点、社会を形成して弱者を含めた全ての人間を生かそうと努力してきた点にあります。人間からそういう相互扶助の精神を奪ってしまえば、動物が持ち得ない破壊力を持った兵器による絶滅戦争に行き着いて

しまいます。人間は、自然界の生物とは異なる桁外れの暴力性を手に入れてしまったがために、相互扶助の精神を持たなければ生き延びられなくなった動物なのだといえます。弱肉強食理論（もちろん資本主義社会的に言えば、「自由競争の論理」でもありますが）一辺倒では、問題はますます悪化するばかりでしょう。

ニーチェの「力への意志」哲学を貫いたドイツは、世界大戦を引き起こして大勢の人間を死なせました。相互扶助の精神は、ニーチェが言ったように確かに弱者のルサンチマンから生まれてきたのかもしれませんが、そのルサンチマンをルサンチマンのまま放置しておくと大勢の人間が戦争やテロという暴力によって死ぬことになるのです。だから社会という相互扶助システムが必要なのです（もっとも、過剰な暴力を産みだす原因も同じ社会なのですが……）。

しかし、そもそも人間界における「弱者」とは何でしょうか？

DNAを残せない人間が「弱者」なのか。

金を儲けられない人間が「弱者」なのか。

身体に不具合があれば「弱者」なのか。

「犯罪者顔」をしていたら「弱者」なのか。

先ほども書いたとおり、人間は相互扶助社会というシステムを持ち、生物学的な自然淘汰に逆らおうとする文化を持っています。もちろん異民族を虐殺するといった問題行動も多々起こしてきましたが、それでも誰かがどこかで歯止めをかけようと努力します。人間の文明は単純な「弱肉強食」の論理では割り切れない複雑なシステムなのです。

実はそこでは、元々「弱者」と蔑(さげす)まれていた人間が、新たな文化を創出するという人間独自の営みが脈々と繰り返されてきたのです。このことについては、第４章でもう一度検討してみます。

第2章　流動化した社会

堀田純司

＊「学校を出て、就職すればそこそこ幸福に暮らせる」の終焉

１９９０年代半ばからはじまった「市場原理の導入」「小さい政府化」といった改革の結果、日本経済はバブル崩壊後の長期不況、「失われた15年」から、ようやく抜け出す道を見つけたとされる。

しかしその一方、いっこうに減少する気配のない中高年の自殺、フリーターなどの非正規雇用や職業にも学業にもつかないいわゆるニートの増加、就職してもすぐにやめてしまう若者、ネットカフェで暮らす人々の出現など、「厳しい現実」がクローズアップされるようにもなった（図２‐１、２‐２、２‐３）。

こうした〃厳しさ〃は教育の世界でも見られるようになり、学校の現場では過酷で陰湿ないじめが大きな問題になっている。

この本の二人の著者は、いじめに対して「いじめにあったら学校をやめてしまえ。そして引きこもれ」と、いささか極端に聞こえるであろう主張を行っている。これはなにも奇をてらって提案しているわけではない。

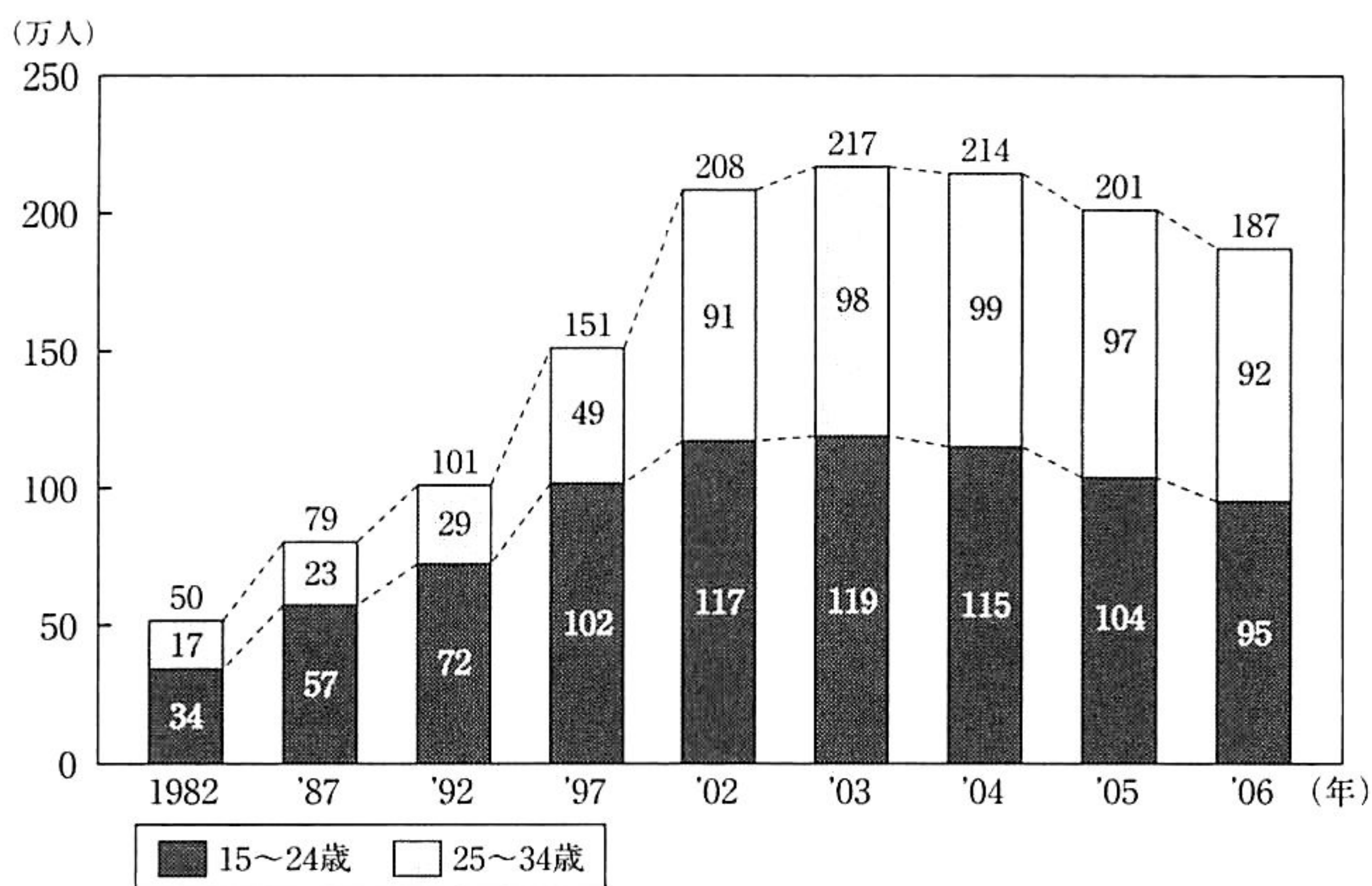
教師でも解決できないようないじめの問題を、当事者である個人が解決するのは無理であ

（『平成19年度版　労働経済白書』より）

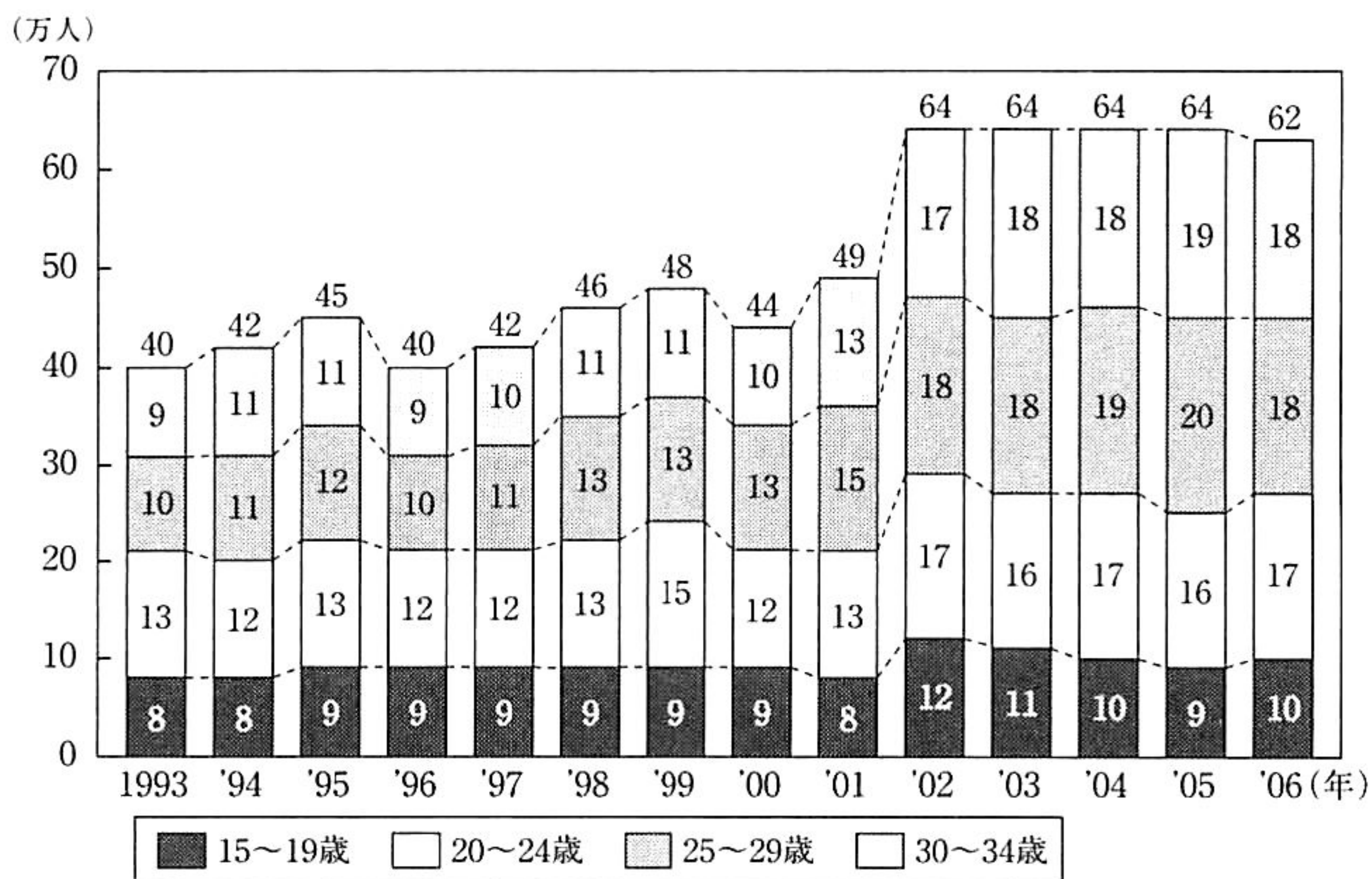
図2-1　年齢階級別フリーター数の推移

（『平成19年度版　労働経済白書』より）

図2-2　若年無業者数（いわゆるニートを含む）の推移

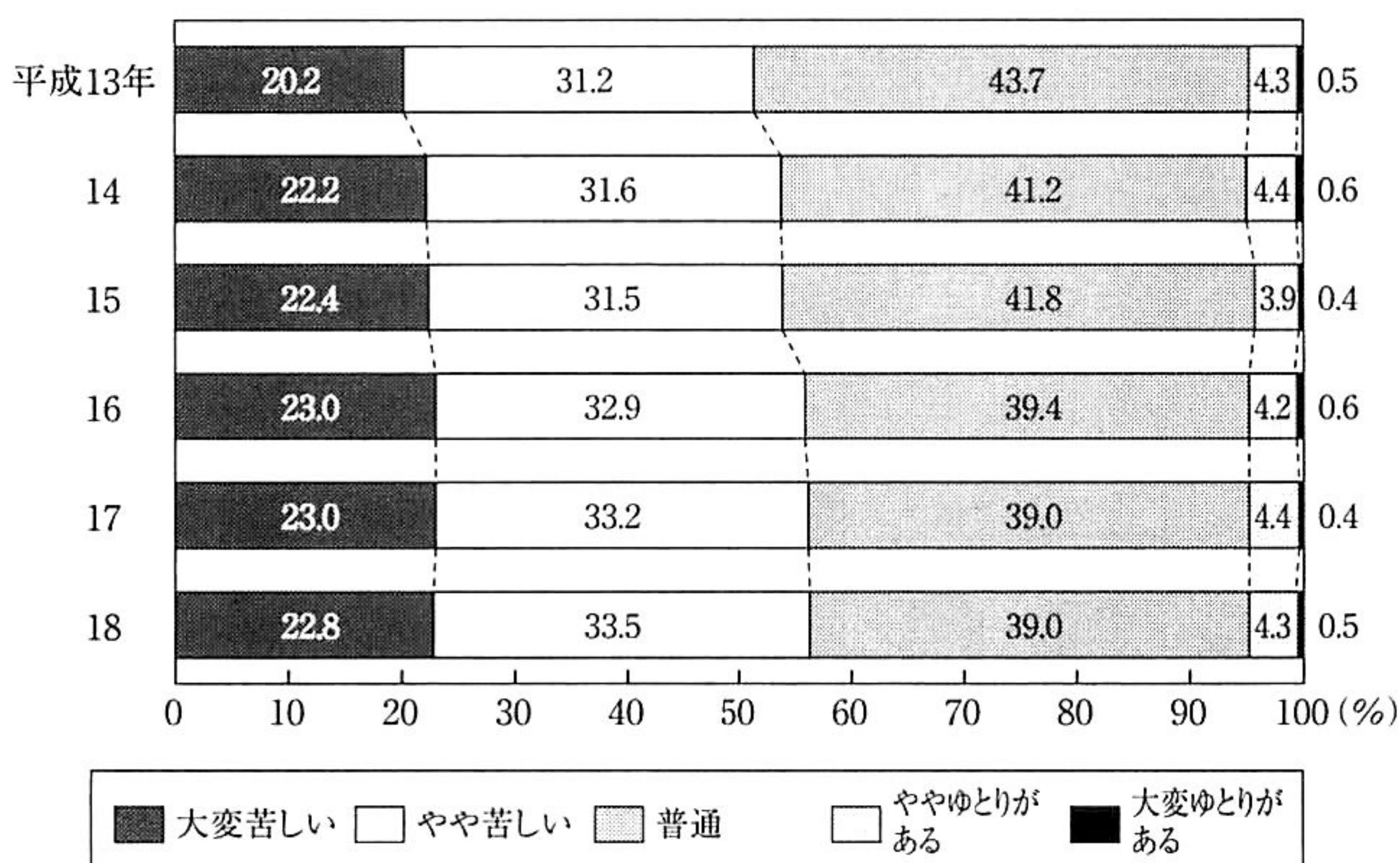



図2-3　生活意識別世帯数の構成割合の推移。
年々生活意識も「厳しさ」を増していることがわかる

る。それは勇気の問題ではない。唯一、現実的な解決の方法はいじめにあったら学校に行かないことである。

それなのに学校から逃げることができず、ついには死を選んでしまうという悲しい事件が起こるのは、「誰もがみんな学校に行く」ことが、私たちみんなの間であまりにも当たり前になっているためである。

しかし時代は、変わった。「学校を出て、就職すればそこそこ幸福に暮らせる」という時代は終わった。その一方で日本人のライフスタイルも多様になり、学校に行かないことが大きなハンディとは言えない世の中にもなった。だから、ひどいいじめにあうようならば学校をやめたほうがいい。それは恥ずかし

いことではない。
この本の二人の著者も高校を中退して、そして引きこもった経歴を持つが、学校をやめたからといって人生が終わることはなかった。むしろ「やめてよかった」と考えている。学校をやめると人間関係が希薄になり、引きこもりになってしまうかもしれない。それでも、死ぬよりは絶対にいい。
筆者（堀田）の担当する2章と3章では、'90年代以来の日本社会の変貌と、私たちの価値観の変化について述べ、その変化を根拠に「やめても大丈夫である」ことを提案していく。

＊流動化した価値観

現代の日本社会では伝統的な規範が崩れ、生活におけるさまざまな分野の価値観が、長期の安定よりも自由な選択へと変化した。たとえば労働分野でいうと、少し前までの日本人の労働観では、学校を卒業して定職につき、職を変えないことが美徳とされてきた。しかしそうした長期固定雇用の世界はとうにすぎさり、今の職が自分に合わないと感じれば転職するのが当たり前になった。
もともと日本人は生涯で経験する職業の数が少なく、離職率はアメリカの半分程度だった。

しかし現在では、中学卒業後に就職した人の7割、高卒の5割、大卒の3割が3年以内に離職する、いわゆる「七五三問題」が話題となるように、雇用が流動化している。

また在宅労働や定職につかないなど、労働のスタイルも多様化した。就職せずに起業を試みる人や、そもそも働かない人も、もはや珍しくなくなった。

仕事だけではない。家族の関係も流動的になった。平成18年度の離婚件数は25万8000組（図2-4）。これはだいたい3組に1組が離婚する計算になる。ロシアやアメリカ、そしてこの分野で近年躍進した韓国など、2組に1組が離婚する〝離婚先進国〟には及ばないものの、日本の離婚率も増加傾向にある。

ちなみに筆者も、平成11年度に1件貢献している。

また、結婚しても別居のまま暮らすカップルや、シングルマザーを選択する人など、家庭のスタイルも選択の幅が広がった。

さらに注目すべきは、〝したいと思ったことを実行する人が増えた〟だけではなく、社会もまた〝したいと思ったことを実行する人〟を許容するようになったことである。

以前ならば、転職には「思い切った決断」という響きがあった。「ヘッドハンティング」「キャリアアップ」などという言葉が定着し、職を変えることがそれほど重大なチャレンジ

(厚生労働省HPより)

図2-4　離婚件数の推移

(内閣府大臣官房政府広報室「男女共同参画社会に関する世論調査」より)

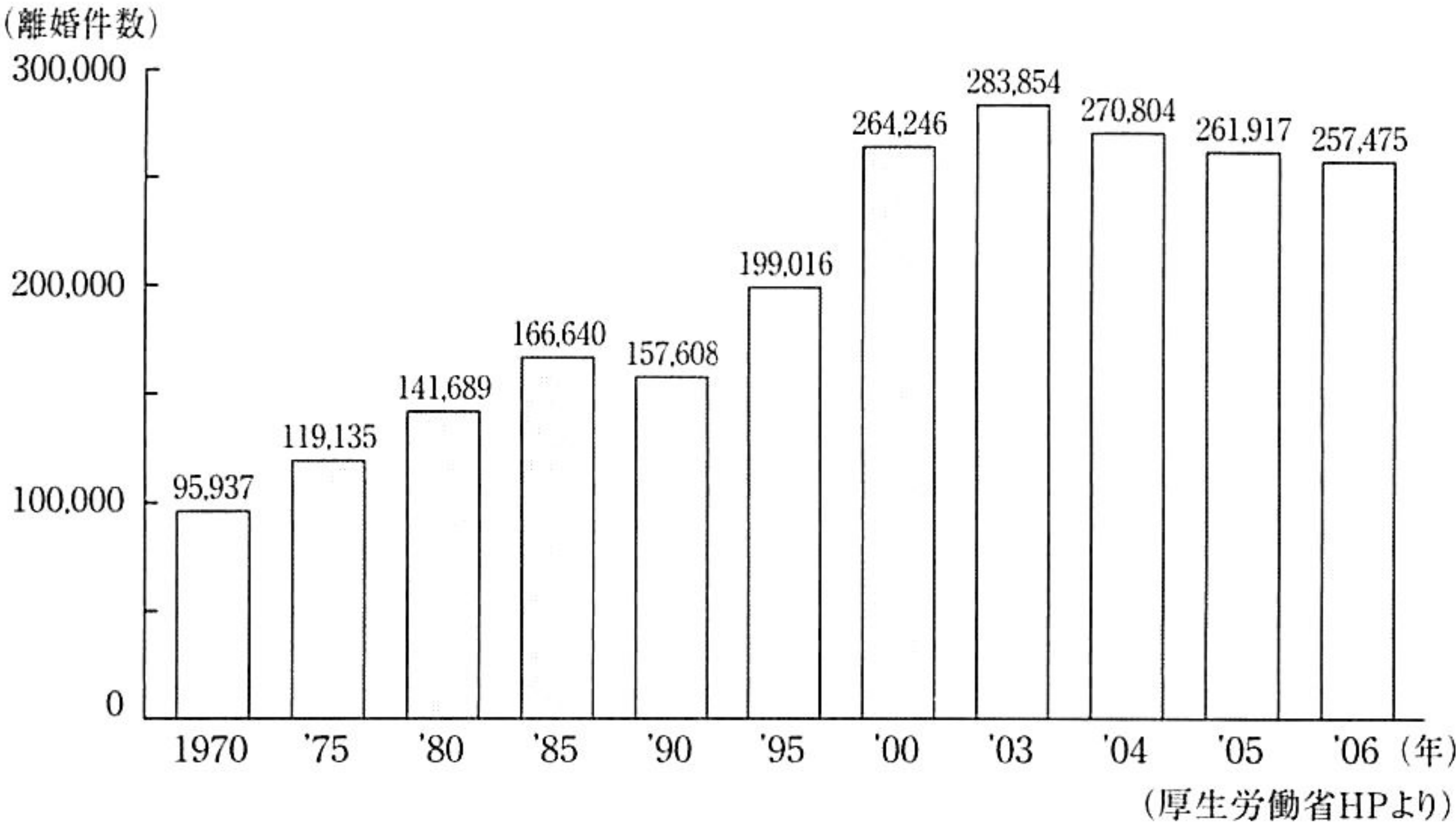
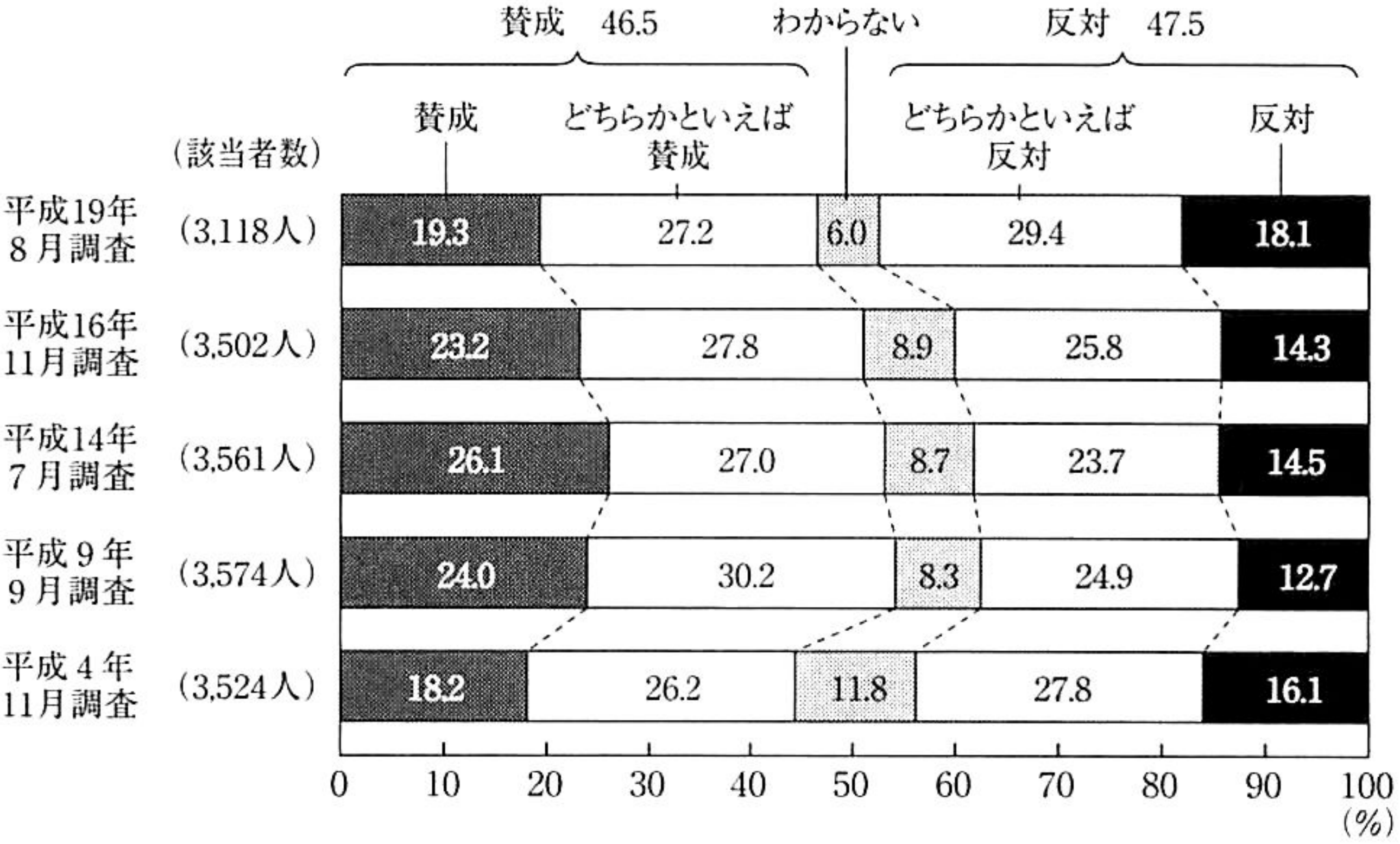



図2-5　「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」という考え方について

※相手に満足できなければ離婚してもよいという意見を肯定する人は'90年代後半をピークに近年むしろ減少している。これは後に説明する流動化の反動として起こる再保守化、価値の二極化の流れだと思われる。ただ、依然として4割の人が離婚を支持している。

と見られなくなってきたのは、'90年代中盤以降の話である。
起業を目指す人も、以前ならひとつ間違えれば「山師」と呼ばれたものだった。しかし現代では「イノベーター」という尊称が奉（たてまつ）られる。
離婚について言えば、かつては、はっきりと「出戻り」という蔑称が存在した。娘が出戻ったことを親類にひた隠しにする親御さんもいたくらい、離婚はスキャンダルだったのである。
しかし現代の日本で「相手に満足できなければ離婚する」と考えるのは、むしろ常識といっていいだろう（図2-5）。現代の日本で用いられる、一度の離婚経験者を指す「バツイチ」という言葉には、どちらかというとコミカルなニュアンスがただよい、あまり悲劇的な色彩は感じられない。

＊ストレスフルな「自由」

こうした変化の結果、人は自分の人生をずいぶん自由に選択できるようになった。しかし、それはそれでシビアな話である。
「選択の自由」があることはいい。しかし日々選択にせまられ、自分の判断と責任で物事を決めていく生活は、なかなか厳しくストレスフルである。以前ならば社会的な規範に従って

選択すればよかった（逆にいうと選択の余地が少なかった）のに……。

伝統や社会的な規範とは「これに従えば、そこそこ幸せになれますよ。従わないと失敗しがちですよ」という、いわば人生のマニュアルのようなものだ。だから〝伝統や社会的な規範が崩れる〟とは、「学校を出て就職すれば、安定した暮らしができる」といった人生のマニュアルがもはや通用しなくなることを指す。

もともと「社会的な規範」とは不動のものではなく、時代時代の価値観にしたがって変化するものだ。農業社会、工業社会にはそれぞれに規範があり、その時代時代の風土に適した伝統がつくられた。

現代は消費が時代の主役となった消費社会である。消費社会では変わらないことよりも頻繁な変化、安定性よりも高い流動性が求められる。

その結果、人がより自由に人生の選択を繰り返すことができる「規範が厳しくないことが規範」ともいえる時代になった。というと、よいことづくめのように響くのだが、選択の幅が広がるイコール失敗する選択肢が増えることでもある。

変化が激しく先行きの不透明な現代社会で、もはや共同体の慣習や、社会的な規範（あるいは宗教）に行動の基準を求められずに、主体的に人生を選択していくことは、結構厳しい

ことである。
２００５年にゲーム会社のコナミが、日本の「占い市場規模」の調査を行った。その結果は約７００億円である。グッズなど関連商品を含めると１兆円に達するという指摘もある。
もちろん大部分の人は「いい結果が出たら、その日の気分もいい」といったように〝カジュアル〟に占いに接していると思われる。だが、産業界では市場規模が１兆円になると「その業界は一人前」という見方がある。この21世紀の日本に「一人前の業界」として占いが存在しているわけで、これはやはり現代人に日々の選択への不安がつきまとっていると考えられるのではないか。たとえそれがちょっとしたものであっても、自分の行動を後押ししてくれるなにかを求めていることを示しているといってよいだろう。
こうした時代、その厳しさに直面した結果、先進諸国で生活する人に顕在化してきた現象がセックス、仕事、食事、スポーツなどあらゆる分野における「中毒」であると、イギリスの社会学者、アンソニー・ギデンズ氏が指摘してきたことは広く知られている。
その上でギデンズ氏は、「ジグムント・フロイトの新規性は主体的に未来を切り開くために、自分の過去を再点検することにあった」（『暴走する世界』佐和隆光訳、ダイヤモンド社、２００１）と述べている。このフロイトの療法に対する解釈は、私たち日本人にとって非常

に理解しやすいはずだ。
なぜならば、現代の日本で注目を集めるオタク文化は、シビアな現実に生きる大人が、みずからのアイデンティティの原点を、過去に体験したアニメや漫画の世界のノスタルジーにおくライフスタイルといえるからだ。
やや余談だがオタクと呼ばれる人々が、いつの間にか巨大な消費集団となっていたことに日本社会が気がついたのは、'90年代中盤の『新世紀エヴァンゲリオン』の大ヒットがきっかけだった。この作品の映画版が公開された'97年は、「癒しブーム」が話題になった年でもある。

＊規制か？　自由か？

筆者は、主にキャラクタービジネスやロボティクスといった、世界の中でも日本がユニークな業績を上げている分野のノンフィクションを書くなどしながら、細々と暮らしている人間である。
そうした筆者が共同体の利益と個人の自由、公と私の問題に興味を持ったのは思春期の経験に由来する。

大阪府、それも南部のあまりガラのよくない地域で中学生活を送っていた筆者は、ライトにヤンキーグループに片足をいれつつ暮らし、その日のことしか考えない生活を送っていた。その後、ある高校にもぐり込みバブル期を高校生として体験することになる。

その高校は「キリスト教的自由の精神」で知られるイギリス国教会系の男子校だったが、なに、その自由の精神とは欧米的な香りが漂う（ただよ）ブルジョワ風のものではなく、本当のことをいうと、かつて学生運動の時代に拠点となり、その結果〝ほとんど校則がなくなってしまった〟という学校だった。

それが「キリスト教的自由の精神だから」などと大雑把（おおざっぱ）なことを言われるようになったのは、いかにも大阪らしいいい加減さで、あっという間に脱イデオロギー化していたためである。

その学校は私服通学であり、一応最低限の校則はあったはずだが、それが厳しく運用されることはなかった。また、大学受験を目指すよう、学校にあれこれ指導されることもなかった。筆者の場合、中学まではそれなりにうるさい学校に通っていた。校則で丸刈りにされるほか、アルバイトや繁華街での遊興の禁止など学外の生活まで規制され、また学業に関しても厳しく指導された。

ただ、程度の差こそあれ、あの時代、どこの中学生も似たような生活を送っていたはずだ。それがいきなり自由な世界に放り込まれるとなにが起こるか。自分自身の強固なライフプランを持つ生徒は大丈夫だったが、そうでない生徒の中には自堕落な生活を送り、ダメになっていく者が大量に現れたのである。

筆者もまたその口で、部活動をやっていた1年目はまだよかったが、2年目から面白おかしく暮らすようになり、しょっちゅう学校を抜けてダベり、また当時のバブルの空気を吸って自分たちでディスコのパーティなどを企画するようになっていた。というと、いかにお洒落(しゃれ)で華やかなスクールライフであったのかを自慢しているように響くだろうが、まったくイケメンでなく、また中流家庭に生まれて金もなく、性の暴走などは望むべくもなく、それでも必死にバブリーたらんと食らいついていく若き日の筆者の姿は、非常にダサダサであった。それは当時でも自覚していた。

念のために言っておくが、筆者は別に自分を卑下(ひげ)しているわけではない。真にファッショナブルでイケメンな生活というものは、ひとにぎりの恵まれた人にのみ許されるものである。大部分の人間は、イケメンたることは無理でも、少なくとも「イケメンたらんと努力しています」という情報を放つために必死にがんばっているわけで、筆者もそうであったにすぎな

い。

高校生の頃は、親に泣いてせびってＤＣブランドの服を買ってもらい、数少ないそれらの中から毎日なにを着るかと身をやつし、連日遅刻していたものだった。その後、同じ服を着て人前に出ることがいっこうに気にならなくなり「俺には月水金と、火木土の2パターンの服しかないっスから」と豪語する現在にいたるが、それはさておき高校の時分は皆そのような感じで遅刻者が1日４００人も現れて、さすがに少し問題になったのを覚えている。

将来の展望などまったくなく、とにかく2０００円のお金をつくって、友人たちと飲み放題の店に出かけ、勉強などはまったくせず赤点を積み重ねる日々だった。偏差値は30台である。

わが高校は、ある意味、規制緩和のモデルケースのような校風で、自由であるかわりに赤点ラインがやや高く、また補習など単位未修得者に対する救済措置もあまりなく、今でいうところの自己責任原則が敷かれていた。その結果、筆者は卒業できずに中退することになる。数学と物理は、入学以来中退するまでとうとう一度も、赤点以外は取れなかった。

＊学校における自己責任原則

当時、同じような生活を送っている友人が筆者に、校風への怒りを露にしながら「俺たちはええけど、弟や親戚にこの学校を勧められるか」と聞いてきたことがあった。

思春期、青春期というと「自分勝手で汚れた大人の支配に対する反発」があるもののようだが、彼は逆に「『おのれで好きにやれ、責任は自分でとれ』と放り出される世界も、それはそれで無責任ではないか」と不満を感じていたのだ。

確かに。中学生の時、筆者が願書をもらうためにその学校を訪れると、先輩たちが「やめとけ、やめとけ」と声をかけてきたものだった。後にまた筆者も、願書を求めて並ぶ中学生らに大声で同じメッセージを伝えたが、実は筆者の性質にその校風は合っていた。まあ、合い過ぎて中退することになり、その後引きこもり時代を迎えることになるが、自分の責任だから仕方がないと考えていたのである。

とくにどの教師からも手を差し伸べられることもなく、また厳しく指導されることもなかったが、彼らはただ教師としての責任を淡々とこなしていたわけで、別に恨むことはなかった（これはあくまでも筆者の時代の筆者の体験であり、現在の校風はかなり変わったはずである）。

もっともこのように感じていたのは、筆者がなにも「すべてはおのれのせい」と責任感あふれる男だったからではない。先にも述べたが筆者の中学校は大阪府でもあまりリベラルではない地域にあり、頭を坊主刈りにするなど非常に規制の厳しい学校で、それがとても嫌だった。そんな世界にくらべれば無規制であること、「自由という名の牢獄」で生活を送ることなど平気だったのだ。

また、筆者は典型的な中流サラリーマン家庭の出身で、そのせいか筆者にも強固な「1億総中流」意識が流れており、なんとなく自分も普通に学校を出て定職につくのだろうなと思っていた。それがあまりに常識と化していたために、学校を中退してボヘミアンな生活を送るという現実にいまひとつ、実感がわかなかったのである。

高度経済成長期に確固たるものになった戦後日本の「幸福のモデル」が、高校生といえども存在していたのだ。

あそこで幸福のモデルから転がり落ちてしまわなければ、筆者もまた学校を出て定職につき、将来マイホームを持つために貯金に励んだりしながら幸せな家庭を持つことを夢見ていたことだろう。

もちろん筆者は、マイホームや幸福な家庭を持つことを批判しているわけではない。それ

ではひがみである。そうではなく、社会の流動化とともに、幸福の姿もまた多様になったと言いたいのだ。

国家を挙げてひとつの目標に取り組む時代は終わった。現在の世の中では「学校を出れば、就職できる。そしてそこそこ幸福になれる」というモデルはもう通用しない。その意識が徹底していないために、本来は学校をやめるべき状況でも、学校に行かざるを得ない人がいるのが、悲劇だと考えているのである。

＊「伝統の崩壊」と「伝統への回帰」の二極化

ネットワークが発達し、人は国境を越えて自由によその国の人とコミュニケーションしたり情報にアクセスしたり物を買ったりできるようになった。また物流や交通手段の整備によって世界は物理的にも小さくなった。

このように世界のグローバル化が進むにつれて、国家や伝統的な共同体に対する人々の帰属意識も薄れていくだろうと考えられていた。各地域のローカルな文化は、いわゆる〝グローバルスタンダード〟へと収斂（しゅうれん）し、その結果、国境の意義は次第に薄れていくはずだったのだ。しかし、歴史は、予想どおりには進まなかった。

実際には、グローバル化による伝統の崩壊と、その一方で伝統的な価値への回帰が起こったのである。つまり、二極化していったのだ。

この二極化は「大きな政府」から「小さな政府」へと転換していく時期に、どこの国でも見られる普遍的な現象である。

近年、私たちの生活の場は、慣習によって守られた共同体から、無機質で合理的な競争空間へと変質している。

「格差社会を招いた」と評判の悪いネオリベラリズム（新自由主義）だが、「規制を緩和し、政府の介入を排して市場の活動に委ねる」「政治権力と経済権力の分離」「結果の平等ではなく機会の平等」といった理念自体は、そう批判されなくてもよいはずである。

しかし実際には広く支持されているとは言えない。これはネオリベラリストたちが、あることをついうっかりと忘れていた、あるいは恐らくこちらが真実に近いと考えるのだが、わざと無視したためではないかと筆者には感じられる。

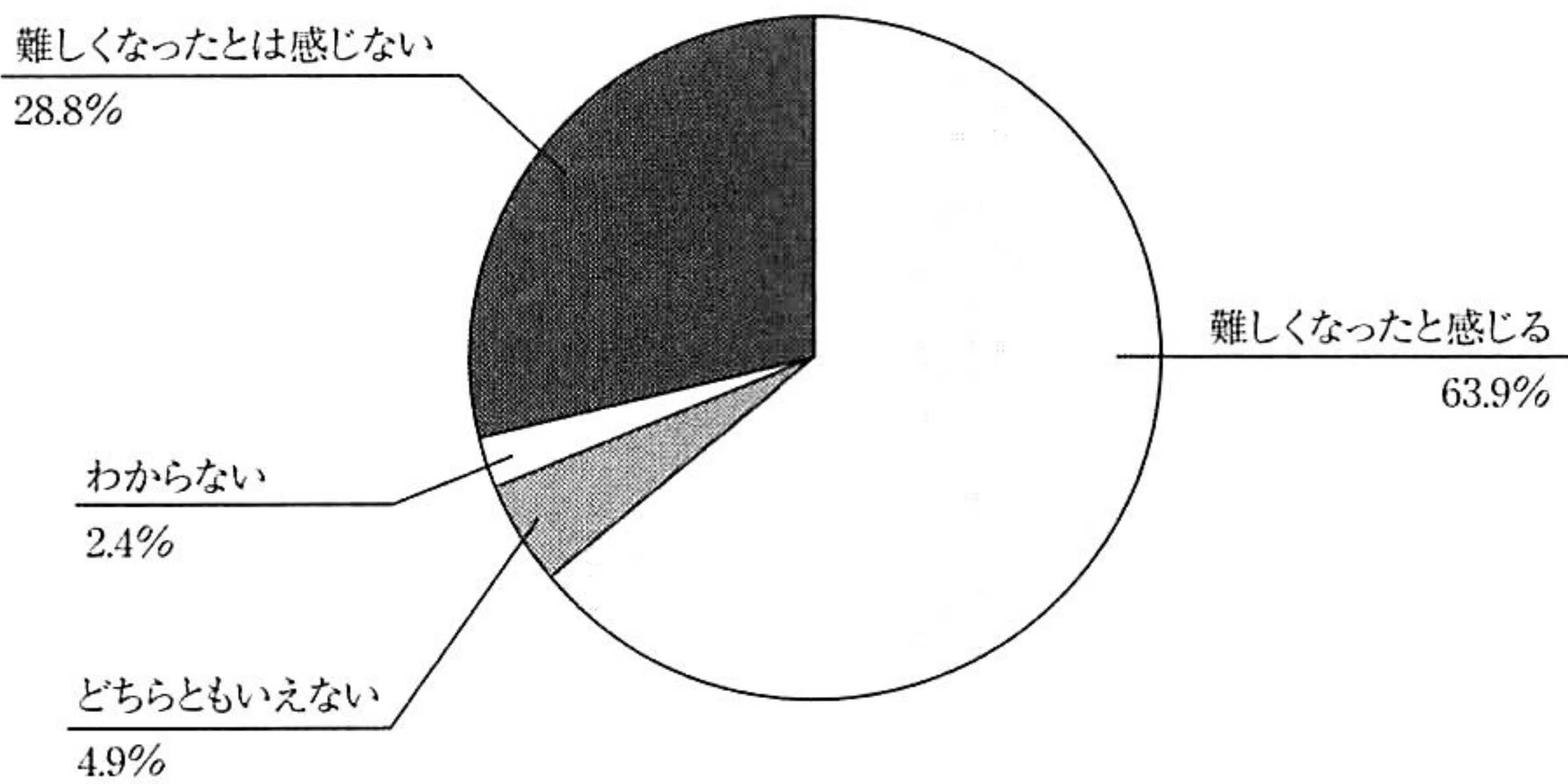
そのあることとは人間の心の問題である。自由で誰に対しても平等に機会が与えられる社会とは、同時に、否応なしにその機会を活用しなければならない社会でもある。しかし、誰もが経済的勝者になることを目指し、競争して暮らしたいわけではない。合理的だが、変化

（内閣府大臣官房政府広報室「安全・安心に関する特別世論調査」2004年6月より）

図2-6　一般的な人間関係について。
現代人は人間関係が難しくなったと感じている

が激しく先行きも不安で、しかも情緒を失った「競争の場」で暮らすのは、非常にさびしい(図2-6)。

かつてショーペンハウアーという哲学者は「人間の思潮は合理主義と証明主義、すなわち客観的認識源泉の使用と、主観的認識源泉の使用の間を、行きつ戻りつ揺れ動いている」といった。

要するに、人間が暮らしていくためには合理主義だけでは足りない。たとえば、なにかしら愛着を感じる伝統的な慣習のような、非合理的なものも必要だということである。

現代人は、生き方のモデルの強制が希薄になり自由になったのはいいのだが、その反面「ではいったいどのように生きればいいのか」

という難題に直面した。そして、大げさな言葉でいえば、ゆらぐアイデンティティの確認を伝統的な価値に求めるようになった。

その結果、現実にはグローバル化による伝統の崩壊と、反動的な伝統的価値への回帰という、二つの現象が同時に起こるようになったのだ。

＊『クラッシュ』と『ブロークバック・マウンテン』

2006年にアカデミー作品賞を争った二本の映画、ポール・ハギス監督の『クラッシュ』と、アン・リー監督の『ブロークバック・マウンテン』は、この二極化をそれぞれ絶妙に表現していた。さすがはよくも悪くもグローバル化最先端国、アメリカの作品である。

「人種差別を取り上げた」と評されることが多い『クラッシュ』だが、それだけではない。この映画ではひとつの衝突事故を軸にして、政界進出をもくろむ検事、父親の介護問題を抱えた白人の警察官、裕福な黒人のテレビ業界人、小さな商店を営む中近東系の移民、アジア系やラテンアメリカ系などさまざまな人々が、ロサンジェルスという街に、自分たちの文化を持ち寄り、あるいは現地のコミュニティに同化しようとしながら暮らしている様子が描かれる。

そういう生活はとてもストレスフルである。ときに悲劇も起こるが、世界一グローバル化が進行した街でみんな自分なりに精一杯、生き方を見つけようとしている。この作品で描かれたのは単なる人種差別ではない。「文化」といって大げさであれば「ライフスタイル」の「衝突（クラッシュ）」だ。

一方、男同士の愛を描いた『ブロークバック・マウンテン』の物語は、'63年のワイオミング州から始まる。現代でこそ、同性間の結婚や、結婚と同じような権利と義務が発生するパートナーシップを認める国もあり、同性愛者の生活も社会的に認知されるようになった。しかし、この映画の舞台となる'60年代のアメリカ西部では、結婚が認められるどころか、同性愛者であることが周囲に知られると、待ち受ける運命は〝私刑（リンチ）による死〟だった。この映画の背景には、アメリカ社会に厳然と存在し、今なお大きな政治問題になっている伝統的な規範がある。

この映画の原作小説を書いたＥ・アニー・プルー氏は、現代社会には馴染（なじ）めなかった男が、妻が事故死した後に父祖の地に移住し、そこで自分の生き方を見つけていくという物語（『シッピング・ニュース』）も書いている。伝統への回帰に自覚的な書き手なのかもしれない。『ブロークバック・マウンテン』は製作者たちの予想を超える商業的成功を収めるが、しか

しアカデミー作品賞を受賞したのは『クラッシュ』の方だった。『ブロークバック・マウンテン』は、いくら美しくても過去のファンタジーであり、自分たちの目前にあるシビアな現実から目をそむけてはいられないという、アメリカの心境を代弁しているかのような受賞だったと筆者は感じる。

＊癒し、自分探し、武士道

このようなグローバル化と伝統回帰の二極化を、一個人で体現していた人が日本社会にも現れていたことにお気づきだろうか。

それは元首相の小泉純一郎氏である。この人は、市場原理主義的な改革を実行し、官業の民営化を推進。伝統にとらわれず小さな政府を目指す姿勢を示す一方で、靖国神社への参拝を行い、伝統重視の姿勢を見せた。

日本でも、’90年代の初頭から個人のアイデンティティのゆらぎが顕在化するようになり、「癒し」のプロセスが注目されるようになった。さらに21世紀に入ると、伝統的な価値の懐古が、一種の社会的流行となった。

’90年代から頻繁に言及されるようになった「本当の自分探し」とは、混迷するアイデンテ

イティの確認作業である。

その初期には「愛は勝つ」「友達が大切」「夢を持つことが大事」などのメッセージを盛り込んだ歌が流行したが、こうしたメッセージは、わざわざ人に歌ってもらうまでもなく当たり前のことである。しかしこれはこれで伝統的価値の再確認作業であり、意味のあることではあった。

その後、21世紀に入り、映画『ALWAYS三丁目の夕日』（2005）で話題となった昭和30年代ブームや、武士道の普遍的な価値を説いた藤原正彦氏の『国家の品格』（新潮新書、2005）など、プチ・ナショナリズムと呼ばれる、日本の伝統的価値を再確認するムーブメントが台頭する。

『プリンシプルのない日本』（新潮文庫、2006）の白洲次郎氏の再評価なども、希薄になった日本的価値再発見の過程の現象だった。また『世界の中心で、愛をさけぶ』（片山恭一著、小学館、2001）などに代表される「純愛ブーム」も、純愛という滅びつつある価値の確認だったと言える。

現代社会の重要なキーワード「負け犬」を定着させた酒井順子氏の著書『負け犬の遠吠え』（講談社、2004）では、30代になってから歌舞伎など伝統的日本文化に大きくハマ

るという「30代からの日本文化回帰現象」が指摘されている。
これは、長らく信じていた自分のライフスタイルに、ふと疑問を感じたとき、共同体の伝統的な価値に回帰し、自らのアイデンティティを確認するという、大いに納得のいく心理過程である。
また厳しい現実社会を生きる大人に、子供の頃に親しんだおもちゃやグッズを提供するビジネスは「思い出産業」「思春期産業」としてすでに一ジャンルが築かれている。先行きの不透明な社会で暮らす中、かつての自分にとって強烈にリアルであった世界を再体験することで、人は癒されているのだ。
過去のヒット作のリメイクに関しては一概に「伝統回帰」とはいえないが、大月(おおつきとしみち)俊倫氏プロデュースによるTVの『鉄人28号』(映画版は2007年)のように、明確に「昔の日本はよかった」という主張をはらむ作品も少なくない。
アメリカでは'60年代以降に「自分の体のことは、自分の責任である。それゆえ自分がよければいい」という思想が台頭。仕事や性、妊娠中絶や家族のあり方について伝統的な価値の解体が進んだ。現在はこうした思想の行き過ぎに対する反動で、'60年代の文化への回顧が起こっているという。

昭和30年代ブームが起こった日本の状況とそっくりである。というかあちらが本場、先輩なのだが。

こうした論理は、日本の学園もののドラマや漫画などでもよく見られる。ドラマや漫画では、往々にして「自分の問題だから、自分が生きようと死のうと関係ないだろう。ほっといてくれ」というキャラクターが登場するが、これは自分の体の責任は自分が持つので、自由にふるまってもかまわないという考え方である。

こうした思想は、ほぼ１００％の可能性で「おまえが死んだら家族だって悲しい（多くの場合、彼もしくは彼女は自分が親から愛されていなかったと誤解しているか、親はつい仕事にかまけて子供に愛情を注ぐのを怠っている）。それにクラスメートだっておまえを心配しているんだ。みんな仲間だろ」という論理に説得される。

これは「自分の体は自分個人のものではない。コミュニティに帰属しているので自由にふるまってはいけない」という論理である。

＊伝統の取り扱いは要注意

もちろん伝統を大切にすることは重要であり、その意見は否定しがたい。また、わが国に

は長らくナショナリズムについて真っ向から議論ができない風土があった。そうした歴史をはがゆく思い、現在の伝統回帰やナショナリズムの高揚に、やや違和感を覚えながらも、「自虐史観よりマシ」と考えている人もいるかもしれない。

しかし注意しなければならないのは、グローバル化の進行とともに伝統への回帰が起こり（要するに懐かしブームが起こり）、ナショナリズムが高揚することは、繰り返すが、実は「ありがち」な現象である。しかも外国の例を見ると、それは社会に悪い空気を生じさせることが多い。

そのよい例が、「誰にでも成功のチャンスが与えられる」というアメリカンドリームを建前としながら、国内では排他的なコミュニティが乱立、キリスト教原理主義が隆盛し、対外的には泥沼の〝宗教戦争〟に踏み込んでしまったアメリカの姿である。

格差が進行し、社会が階層化していく時代には、将来への不安や厳しい現状への不満がいともたやすく他のコミュニティへの悪意へと成長してしまう。

ヨーロッパでも近年、イギリスの国民党、ドイツの国民連合や国家民主党といった右翼政党が議席を伸ばし、もともと多様性に寛容だった北欧諸国ですら、移民排斥などを掲げる政党が勢力を広げている。そうした背景には、やはりグローバル化にともなう格差の拡大が

ある。

たとえばフランスの右派政党・国民戦線は、低収入層や失業者など、日本のマスコミになららえば、いわゆる「負け組」と呼ばれる人々に支持層を広げている。彼らは、欧州連合に別れを告げ、国家のアイデンティティを回復しようとアピールしている（もっともこうした政党は、〝自由、寛容といったリベラルな価値を共有することができない移民は受け入れられない〟などという論理を展開していたりするので、話がややこしくなるのだが）。

日本でも近年、近隣諸国や国内の特定の地域を批判する書籍が話題になるなど、排他の論理が顕在化している。またインターネットの普及により、既存のメディアでは「なかったこと」にされていた近隣諸国や特定の社会層に対する排他的な言説が顕在化。そういう言説を掲示板やブログに書き込む人々は「ネット右翼」と呼ばれ、もしインターネット上で国民投票を行った場合、すぐにでも改憲が実現するのではないかというほどの存在感を示している。

しかし厳しい時代のナショナリズムは、シビアな現実に対する甘美な逃避として働き、やがては暴走を呼び、社会の中に悪意を育てる危険性がある。大規模な暴動まで起こったフランスはその一例だ。伝統の取り扱いは要注意なのである。

教育分野でも保守的な価値観や伝統への回帰現象が見られる。'06年12月に成立した新しい

教育基本法では、その二条五項に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と明記された。

これは以前ならば相当大きな論議を巻き起こす修正だったはずだが、ずいぶんあっさりと実現してしまった。改憲論議の具体化と並んで日本社会における保守感情の高まりを示す一例である。

しかし、いじめなどの教育に関する問題が、こうした保守的な価値観で解決可能だろうか。現在のいじめは、ネットワークを駆使するなど非常に陰湿である。道徳教育の強化や地域コミュニティの再建などだけでは対応できないのではないか。

現状では、伝統的な価値観の再建は、子供から逃げ場を奪うことになるだけだろう。むしろ必要なのは「みんな学校に行く」という伝統をすててしまうことではないか。

＊意外に新しい伝統

岡崎哲二氏、奥野正寛氏編の『現代日本経済システムの源流』（日本経済新聞社、1993）によると、終身雇用や年功序列、株式の持ち合いなど、戦後の日本社会で成立した慣行

と思われてきたものの多くが、実は戦争中に強制的に断行され、つくられた制度に起源を持つという。

たとえば年功序列賃金は、１９３８（昭和13）年に施行された国家総動員法がその原型である。この法律で政府は、初任給を固定。昇給は全従業員を対象にした定期昇給のみを認めた。その結果、労働年数に応じて給料が上がっていく年功型賃金が日本社会に定着したのである。

また戦後の日本企業の特色として、株主の権限の小ささが挙げられるが、これも１９４３年に制定され、資本と経営の分離を定めた軍需会社法に由来している。

他にも長期固定雇用、経営陣の社内昇格、間接金融、護送船団方式など、戦後日本経済の特徴とされてきたものの多くが、実はナチスドイツの戦時経済体制とソ連の社会主義的計画経済を参考にしてつくられた戦時下の総動員体制に原型が求められることを、岡崎氏らの研究は指摘している。

戦後の高度経済成長の時代には、こうした制度がうまく働いてきた。

ふりかえってみると国は、意外なほど積極的に国民に生活のモデルを提案してきた。

「女性はしっかりと家を守り、外で働く男を支える」という良妻賢母主義は一見、儒教に由

来する日本古来の伝統的価値観のように思われるが、実は19世紀末に明治政府が定着させたもので意外に新しい。元来、江戸期までの日本人は結婚、離婚に対して結構あっけらかんとしていた。離婚が女性にとって恥になるのもこの明治期からである。

後段の「外で働く男」も、明治国家の工業化路線に対応して、この時期に定着したライフスタイルだ。江戸期のころは、労働者は必ずしも「通い」で働くとは限らなかった。

国が定着させた生活モデルの中でも傑作といえるのが、戦後日本社会に定着した「マイホーム取得の夢」である。

戦前の日本人にとって、生涯借家で暮らすのは普通のことだった。それが一生懸命働いて貯金し、自分の家を建て「一国一城のあるじ」になることが働く人の目標として強く意識されるようになったのは、戦後の住宅政策以降である。

これがいかに国にとって都合よく機能したか。『日本列島改造論』（日刊工業新聞社、1972）で日本中に土建業ブームを巻き起こした田中角栄氏はこれを明快に要約している。田中氏はかつて「住宅を買うために国民が貯金をすれば、銀行や郵便局が潤う。住宅を買えば、建設・不動産会社、仲介会社、そして資金を貸し付ける銀行が潤う。政府や自治体には固定資産税などの税収が入る。亡くなれば相続税が入る」と語ったという（毎日新聞'99年

5月4日付朝刊「土地神話を超えて」)。

家を買うために一生懸命働いて、貯金する。それが日本の高い貯蓄率につながり、銀行の金融資産となって、企業に循環していく。また銀行は個人に住宅資金を貸し付けて利息で儲けもする。かつては、終身雇用と年功序列賃金が定着していたので、個人向け融資は銀行にとって取りはぐれの少ない融資だった。

銀行ではなく郵便局に預けられた場合は郵便貯金となり、そのお金は財政投融資として公共事業に流れていく。財政投融資が第二の予算といわれたゆえんである。

また、家を買うために長期ローンを組むと簡単には離職できなくなり、雇用の長期安定化につながる。しかも不況期に住宅購入の金利優遇策などを打ち出して住宅需要をあおれば、不動産会社やゼネコンが儲かり経済の活性化に役立つ。

このように書くと、「政府というものはとことん国民を搾取する存在である」というメッセージを伝えようとしているのかと思われるかもしれないが、「国」に参加し、その伝統と慣習に身を委ねるのは甘美なことでもある。サッカーの日本代表を応援している人々の姿を見ればよくわかるだろう。

伝統や文化を提案することは国にとって義務でもあり、実は国民の無意識の集合がそれを

編み上げているともいえるのだ。

＊公というものを頼りにしない

ただ、筆者自身は国というものにはあまり帰属意識を感じない。

'98年のことだが、当時の小渕(おぶち)内閣は不況対策として「住宅金融公庫の融資の基準金利の引き下げ」「頭金なしでも公庫融資を受けられるように融資条件の緩和」「住宅ローン減税の拡大」という三つの政策を打ち出し、「今、住宅を買わないと損だ」と住宅需要を激しく喚起した。

もともと政府には、不況になるたびに国民に住宅を買わせようとする傾向があった。住宅金融公庫は'93年に「ゆとり返済」という住宅ローンの極端な後払いサービスを打ち出して、20代半ばの人間に巨額の長期ローンを背負わせるようなことをやっていた。

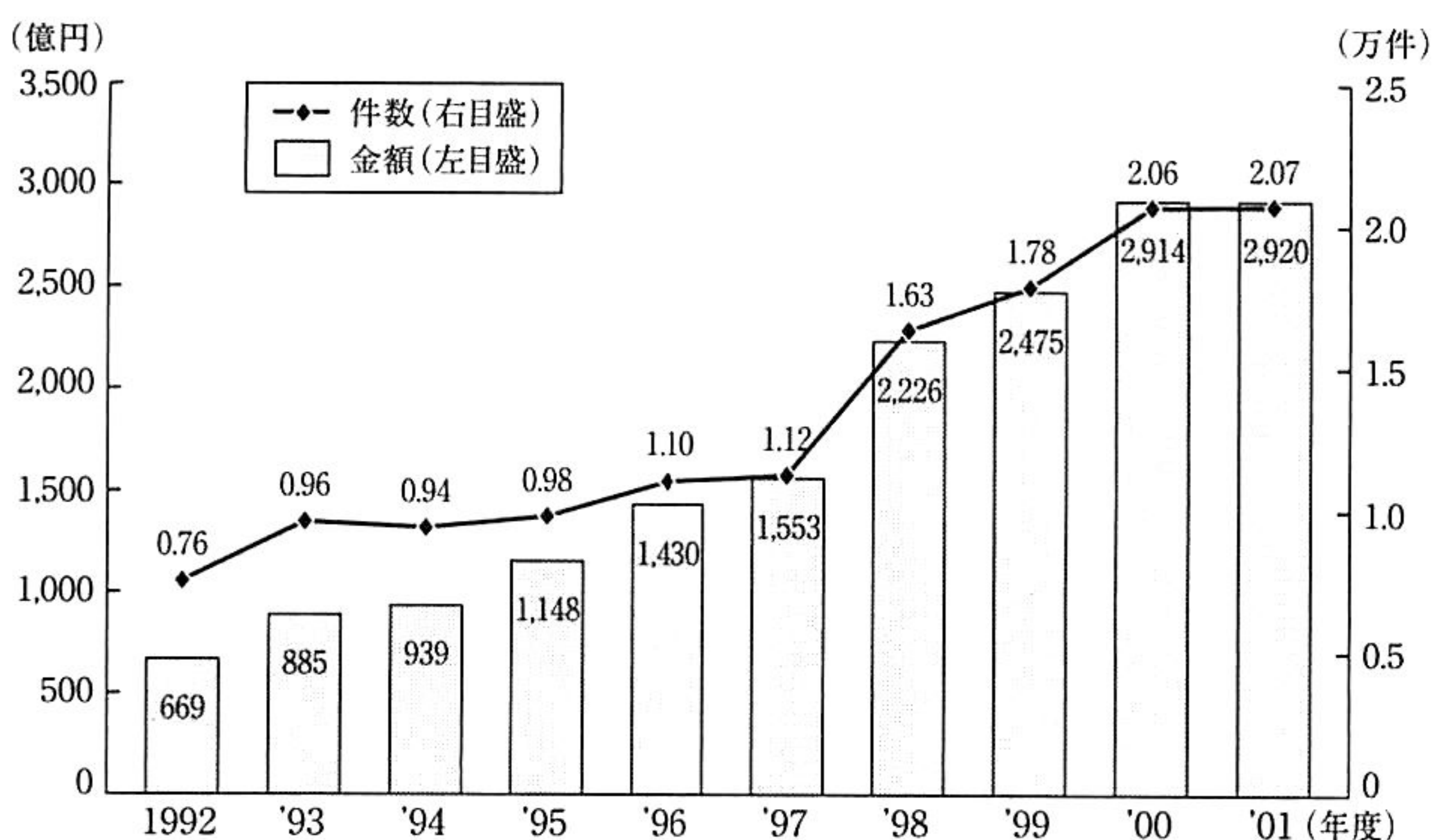
時代は資産デフレ下にあり、すでに終身雇用や年功序列の時代が終わりつつあったことはわかっていたはずである。年齢が上がっても、以前のように給料は上がらないから、返済額が高くなったら払えない。実際に'90年代前半の「ゆとり返済」では、返済額が急増する5年後に多くの自己破産者を出したが、前述のように、政府は'98年に再び住宅需要をあおった。

（財団法人公庫住宅融資保証協会資料より）

図2-7　住宅金融公庫などの代位弁済件数および金額の推移（住宅金融公庫などからのローンを払えなくなり、保証協会に返済の肩代わりをしてもらった件数と金額の推移）

　あの頃筆者自身は国というものを、公というものを頼りにしないことに決めた。政府は国民の生活のために政策を決めているのではない。政府は経済政策のために国民の消費をあおっているのだと痛感したのだ。

　税金は払わざるを得ないが、公から受けるサービスは公共インフラの使用など最小限で結構だ。健康保険料も払わざるを得ないので保険診療は受けるが、大きな疾病に関して頼りにするのは、まだ加入していないが民間の保険である。公的年金など、制度もよく知らない。老後は自分でなんとかする。小泉政権に言われるまでもなく、自分の人生については「自己責任」を覚悟している。

第3章　フリーターの人でも安心して暮らせる社会を

堀田純司

＊国の起源

ヨーロッパで国家という概念が明確になったのは、30年間にわたる宗教戦争に終止符が打たれた1648年のウエストファリア条約以来である。そして国家が、その領域内に暮らす人々を、共通の言語や利害、伝統、感情でまとめ上げ、「国民国家」として生まれ変わったのが、1789年のフランス革命だった。

自分たちの国の運命は、自分たち個人の運命である。こうした意識の下に成立した国民国家は、さまざまな意味で非常に強力だった。軍事的にも強力であることを証明したのが、国民を徴兵し国民軍として戦争に投入した、ナポレオンの軍隊である。

国民国家の強力さを知った周辺の国々――イギリスやイタリアなどは、次々と国民国家を成立させていく。日本の明治維新もまた、国民国家の強力さを知り、あわてて自国を国民国家化した典型例のひとつである。

明治維新までの日本は幕藩体制にあり、「日本人」という意識で考え、行動する人はまれだった。しかし西洋で成立した国民国家の強力さを知った幕末の人々は、幕藩体制を解体し、新たに天皇の下での一君万民思想という形で社会を再編成し、促成栽培の国民国家をつくり

あげてしまったのである。

その際「どうやら国民国家には国語が必要らしいぞ」となれば、「日本語廃止論、英語採用論」「漢字削減論」「ローマ字国字化論」などさまざまな論議を巻き起こしながら、国語を成立させ、「国歌というものが必要らしいぞ」となれば、外国から招いた軍楽隊の先生に依頼して作曲してもらったり、あるいはヨーロッパの古い音楽を元に作ったりして（「君が代」には、その歌詞とメロディーの組み合わせでいくつかのヴァージョンがあったことをご存じか）、国民国家の形を整えていった。

日本の国民国家成立過程でとくにユニークだったのは「国民国家には、民族の伝統が必要だ」ということをきちんと認識し、天皇を中心にした民族の神話の体系まで構築したところである。

この過程で政策を具体的に行ったのが、薩摩藩出身の初代文部大臣、森有礼（もりありのり）である。彼は国民意識を日本社会に定着させるために、神武天皇が即位したとされる紀元節と天皇誕生日である天長節に、学校で祝賀儀式を行った。教室に天皇皇后のご真影を飾るようにしたのもこの人である。

もっとも、共著者の本田氏が指摘していることだが、日本人はこのときに持ちなれぬ国民

国家のイデオロギーというものを手にしてしまったため、後にそれを暴走させ、昭和期の15年戦争という他国にも自国にも不幸な歴史を招くことになる。
しかし誤解を恐れずに言えば、イデオロギーという本来制御が非常に難しいものの力学から考えると、これは仕方のないことだったのかもしれない。

＊子役の就労時間も延びた規制緩和

筆者の手元には、平成18年3月の閣議決定「規制改革・民間開放推進3か年計画（再改定）」という500ページを超える冊子がある。
それらには2000年代に入ってから検討された、IT、法務、教育・研究、医療、福祉、農林水産、流通、エネルギー、環境など、私たちの生活をとりまく様々な分野の規制緩和項目がならんでいる。その気分を伝えるために、この冊子の中からすでに措置済みであり、またマクロ経済政策的ではない例を一覧表にまとめてみた（図3－1）。
これら以外には「労働時間規制の適用除外制度の整備拡充」という項目もある。いわゆるホワイトカラーエグゼンプションのことである。
このように、大はそもそも規制緩和に関する手続きの見直しから、義務教育修了前の演劇

図3-1　実現した規制緩和の例

●携帯電話における番号ポータビリティの導入(総務省)

携帯キャリアを替えても、元の電話番号が使えるようになった。これはよく知られていますね。(平成18年度)

●民法の現代語化(法務省)

カタカナ文語体で表記される民法を、読みやすいひらがな口語体にあらためた。(平成17年度)

●バイオメトリクス(生体情報)を活用した出入国審査体制の構築に向けた調査研究等(法務省)

生体情報の読み取りや認証を行う機器の開発、設置に向けて調査研究や実証実験を開始した。(平成16年度)

●学校の教室の天井高に関する規制緩和(国土交通省・文部科学省)

これまでは健康的な教育環境を確保するため、床面積が50平方メートルを超える教室の天井の高さは3メートル以上なければならなかったが、この制限を撤廃した。(平成17年度)

●コップ販売式自動販売機にて取り扱い可能な容器に関する周知徹底(厚生労働省)

コップ販売式自動販売機では、専用のコップ以外の容器で販売してもよいことになっていたが、その「専用コップ以外の容器」には水筒、魔法瓶、ペットボトルなども含まれることをあらためて各都道府県に知らしめるようにした。(平成17年度)

●道路上の自転車駐車場設置の容認（国土交通省）

道路上の自転車駐車場を道路の付属物として位置づけ、道路上に自転車の駐輪場を設置することを可能にした。（平成17年度）

●「たら」輸入割り当てに関する申請者の資格要件のうち輸入規約数量要件の撤廃（農林水産省）

「たら」の先着順割り当てに関わる申請資格のひとつである「輸入契約数が20トン以上であること」を撤廃した。ちなみに平成18年度は「たら」の人気がなかったらしく、割り当て枠が埋まるまで数日かかったという。（平成17年度）

●電力線搬送通信設備に使用する周波数帯の拡大（総務省）

家庭の電力線と電気コンセントを使用してインターネットに接続するＰＬＣ技術の実用を認めた。（平成18年度）

●女性を対象とした坑内労働の禁止に係る労働基準法の見直し（厚生労働省）

男女間における雇用機会の均等のさらなる実現をはかるために、トンネル内における女性の労働を可能にするなど、労働基準を見直した。（平成18年度）

子役の就労可能時間の延長（午後8時までだったのが午後9時までOKになった）まで、約1100の項目がならぶ。世の中も変わるはずである。

＊規制緩和を振り返る

『エイリアンvs.プレデター』（2004）という映画で筆者は知ったのだが、航空業界には「PSR（Point of Safe Return）」という、燃料のちょうど半分を使いきり、もし目的地に着かなければもはや帰還できなくなる地点を指す用語があるそうだ。

現在から振り返ると、日本の規制緩和がPSRを越えたのは、'96年から'97年にかけてのことだった。

'90年代の規制緩和の論議は、'93年発表の、経団連会長・平岩外四（ひらいわがいし）氏（当時）が座長となった経済改革研究会の報告書、いわゆる「平岩レポート」が口火を切る形ではじまる。経済改革研究会とは、当時の細川護熙（もりひろ）首相（日本新党、在任'93年8月〜'94年4月）が私的に組織した諮問機関である。

論議が開始された規制緩和は、村山内閣（社会党、在任'94年6月〜'96年1月）のもと「規制緩和推進5カ年計画」として政策の形をなすが、これは事前の中間発表から緩和項目が半

減しており「玉虫色だ」などの批判を浴びる。
しかし続く橋本内閣（自民党、在任'96年1月〜'98年7月）が'96年に行政、財政構造、金融システム、社会保障構造、経済構造、教育の6分野の改革を提唱。中でも金融分野ではフリー、フェア、グローバルをスローガンとした「日本版金融ビッグバン」を打ち出し、ここで小さな政府のグランドデザインが示されることになる。
この'96年から翌'97年には、それまでは聖域として、改正などとんでもないとされていた領域で、大きな変更が実現している。
それは独占禁止法の九条の改正だ。独占禁止法の九条といえば、戦争の永久放棄をうたった憲法九条とならぶ「二つめの九条」と言われた法律で、これは純粋持ち株会社の設立を禁止していた。
持ち株会社とは、傘下企業の株式を所有することで各社の経営を支配する会社を指す。この持ち株会社がなぜタブー視されたかというと、持ち株会社による強固で統合的な企業グループの経営支配が実現すると、一企業の多角経営とは比較にならない規模で事業の多面展開ができるからである。
そうすると、ある事業会社が損失を出しても他で収益をあげればよいという経営コントロ

ールが可能になり、損失覚悟の会社と競合する他の単独企業は、とても太刀打ちできなくなる。その結果として起こる、大企業グループによる寡占が不安視されていたのだ。

ただし消費者側のメリットとしては、経営のトータルな合理化により、安くよいものが手に入る可能性が考えられる。

「財閥の復活につながる」と懸念され、独占禁止法の制定以来、持ち株会社の解禁は三度も論議されながらも実現しなかった。

特に'96年には通産省（現・経済産業省）と自民党、経団連が一体となって独占禁止法の改正を推し進め、実現直前までいったが、当時自民党と連立与党の立場であった社民党の反対により潰えてしまう。しかし翌'97年に再び息を吹き返し、今度はあっさりと実現することになった。

またこの時期、外国為替及び外国貿易管理法の改正のように、地味でテクニカルだが大きな規制緩和も行われている。'97年1月に可決されたこの法改正により、日本の円と海外のお金のやりとりが原則自由化された。

実はこの改正が行われるまで、当初は乏しい外貨の流出をふせぐため、後には資金の海外移転をふせぐために、日本の円と海外の通貨の自由な交換は法律で規制されていたのである。

その意味で円は鎖国体制にあったのだ。

規制緩和はシステム全体の問題であり、どこか特定の部門だけをいじればいいというものではない。

＊日本にも誕生した民営刑務所

たとえば持ち株会社を解禁しても、今度は税制を変更して、親会社がまとめて申告納税すればよい連結納税制度を導入しなければ、統合経営の意味は薄れてしまう。外為法を改正しても国内の銀行保護政策を改めない限り、真に外資と競合することにはならない。

橋本内閣以後、再び「小さな政府」への転換を掲げた内閣は、ご存じのとおり小泉内閣(自民党、在任'01年4月~'06年9月)だ。

ともに改革を標榜した橋本内閣と小泉内閣の違いは、小泉内閣が民営化の推進をより大きくアピールした点である。その特徴は二人が総裁選を戦った'95年からすでに現れていた。

当時、問題になっていた財政投融資について、橋本氏は資金の使い道を決める財投機関の見直しを表明し、一方、小泉氏は、そもそも財投資金の入り口である郵便貯金を民営化することを訴えた。後に実現する郵政の民営化である。

「民間にできることは民間に」の基本方針の下で進められた小泉内閣の民営化路線は、郵政や道路公団が話題になったが、問題の多いこの両民営化の他にも注目すべき試みを行っている。それは、道路や郵便のような国が提供する公共サービスだけでなく、社会の利益のために個人の身体や財産を侵害するような実力行使をともなう業務、すなわち「公権力の行使」にまで踏み込んでいるのだ。

すなわち、放置駐車違反車両の通報や移動・保管、刑務所施設関連業務、検疫業務といった、小さくても公権力の行使をともなう業務まで、民間への開放が実施・検討されたのである。

民間による駐車違反の通報は、警察から委託を受けた業者が「駐車違反監視員」を派遣するなど、すでに実施されているが（こうした場合、監視員は「みなし公務員」として扱われる）、さっそく、駐車監視員の人が暴行されるなどトラブルも起こっている。

小さな政府化で最先端を走るイギリスやアメリカでは、'90年代からすでに民間刑務所運営会社が成立しているが、日本でも'07年5月に民間資本を導入した刑務所が登場した。山口県の美祢（みね）社会復帰促進センターである。

美祢社会復帰促進センターはＰＦＩ法（'99年施行）に基づいて設立された。ＰＦＩ（プラ

イベート・ファイナンス・イニシアティブ）とは民間の資金と運営ノウハウを活用して、公共施設などの建設や運営を行う手法である。公的機関は資金の調達から、建設、運営を民間に委託し、民間はその事業から収益を上げ、一定期間後に、公的機関に所有権を移転するスキームである。

民間の事業会社によって設立され、刑務所運営を行政から委託されている美祢社会復帰促進センターでは、国家公務員である刑務官と、民間人である警備員がともに働くことになる。面白いことに、受刑者が脱走を企てた際、民間人である警備員が直接手を触れて取り押さえることはできない。公権力の行使になってしまうからだ。警備員は笛を吹いたり叫んだりして威嚇し、実際に取り押さえるのは公務員の刑務官である。しかし現実問題として、現場では民間人が緊急に対処しなければならない事態も起こるに違いない。その際、正当防衛の解釈を適用して直接対応するようなこともありうるだろう。ただしこの刑務所に入るのは懲役8年未満で初犯の、比較的刑の軽い人たちである。

日本の民間刑務所は、刑務所運営を丸ごと民間に任せるアメリカ、イギリス型とは異なり、行政と民間が相半ばして運営にあたるドイツ、フランス型の流れにあたる。しかしそれでも従来では考えられなかった大胆な試みである。民間企業によって警察が運営されているとい

う設定の映画『ロボコップ』（1987）の世界が、あながち荒唐無稽ではなくなってきた。ちなみに作品の舞台は2010年である。
本来、治安の維持は国家の重要な責務である。しかし現在、この分野でも、行政が提供する以上のサービスを望む人は、身銭を切ってセコムのような企業のサービスに加入するのが当たり前になっている。
ちなみに美祢社会復帰促進センターの設立の主体になった企業はセコムである。

＊かつての規制のすさまじさ

近年、格差や貧困が社会問題化するにともない「規制緩和に歯止めをかけよ」という意見も出てきたが、それはのど元過ぎればなんとやらで、規制というもののすさまじさを忘れているのだ。
たとえばである。悪名高い需給調整の名の下で新規業者の参入を阻んできた運輸業界の場合、かつてはトラック運送業に参入しようとしても、各都道府県の陸運局が定める細かい免許基準に直面することになった。
東京都の場合「車庫は車両相互の間隔が50センチ以上確保されること」「都区部に営業所

を設置するものは車両数が10台以上あること」といった具合である。こうした規制について、業界側は「むしろもっと厳しくしてもらいたいくらいだ」と吼えていたものだ。
現在ではコンビニなどで簡単に買えるようになった酒の販売も、厳しい規制の下に置かれていた。店舗間の距離が、人口１５００人以上の地域では１００メートル、人口７５０人以上の地域では１５０メートル必要など、以前は販売店の開設について細かい距離制限が設けられていた。'89年には大型店にも免許が与えられるようになったが、人口２００万人以上の地域で1店舗の開店を認めるというもの。これは長野県全体で1店という計算になる。
ありがたいことに、24時間いつでもＡＴＭでお金が引き出せるようになった銀行だが、この業界は護送船団方式で知られる強烈な規制の下にあった。昭和28年以降、金融ビッグバンが訪れるまで、銀行の新規設立はゼロ。現在ではＩＴ企業や小売業からの参入があり、非常に便利になった。
これらの規制は法令で定められていたものだからまだいい。現実には「行政指導」の名の下で、法的には根拠のない規制がまかり通っていたのである。冗談でもなんでもなしに、許認可をあおぐ書類に記入するインクの色から書体までが、うんざりするほど厳しく定められていたのだ。

総務庁では'93年から、官庁の規制について情報収集を行ってきたが、その実情は許認可を実際に申請してみないとわからないそうだ。また、業界団体の自主規制についても実際に参入を試みないとわからない。そのため、規制の実態について本当のところはいまだに完全に把握できていないという。

恐らく、こうした世の中に戻ろうとしても、もう戻れないはずである。

＊多様な生活を肯定する制度を

しかしだからといって、貧乏な人は働く意欲がないのだから、厳しい暮らしでも仕方がないというような社会は肯定できない。最低賃金アップのような労働者保護政策に対して、「それでは国際競争力が維持できない」と反発する意見があるが、そのように厳しい国際競争はいつか自滅するチキンレースだから、早々に降りたほうがトクである。多くの人々が安心して暮らすことができない社会に、長期的な成長はのぞめないはずだからだ。

今の日本の社会保障は、なんらかの事情で働けなくなった人に対しては案外手厚いところもあり、「生活福祉資金貸付制度」など、それなりの制度もある。

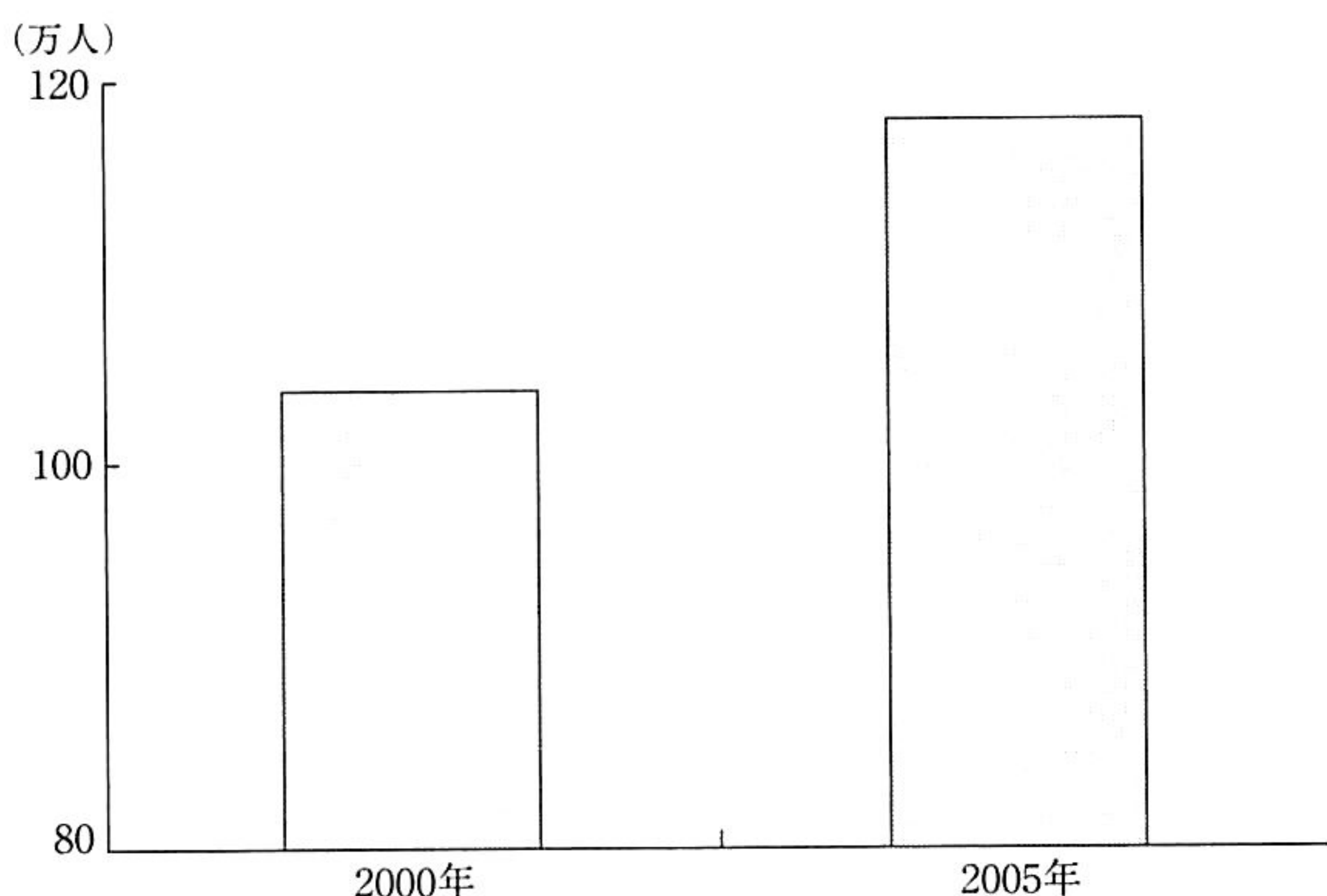
しかし問題はこうした社会保障制度や税制が、基本的に「定職についていること」を前提

（財団法人日本統計協会発行「統計」平成18年11月号より）

図3-2　「子と同居で配偶者のいない女性（いわゆるシングルマザー）」（15〜49歳）の推移

に考えられているところだ。

たとえば筆者のように、独身でかつ雇用されていない人間やシングルマザー（図3-2）は、自己負担の重い国民年金や国民健康保険に加入するしかない。非正規雇用者の社会保障では年金や健康保険への非加入が目立つが（図3-3）、実感としてよく理解できる。

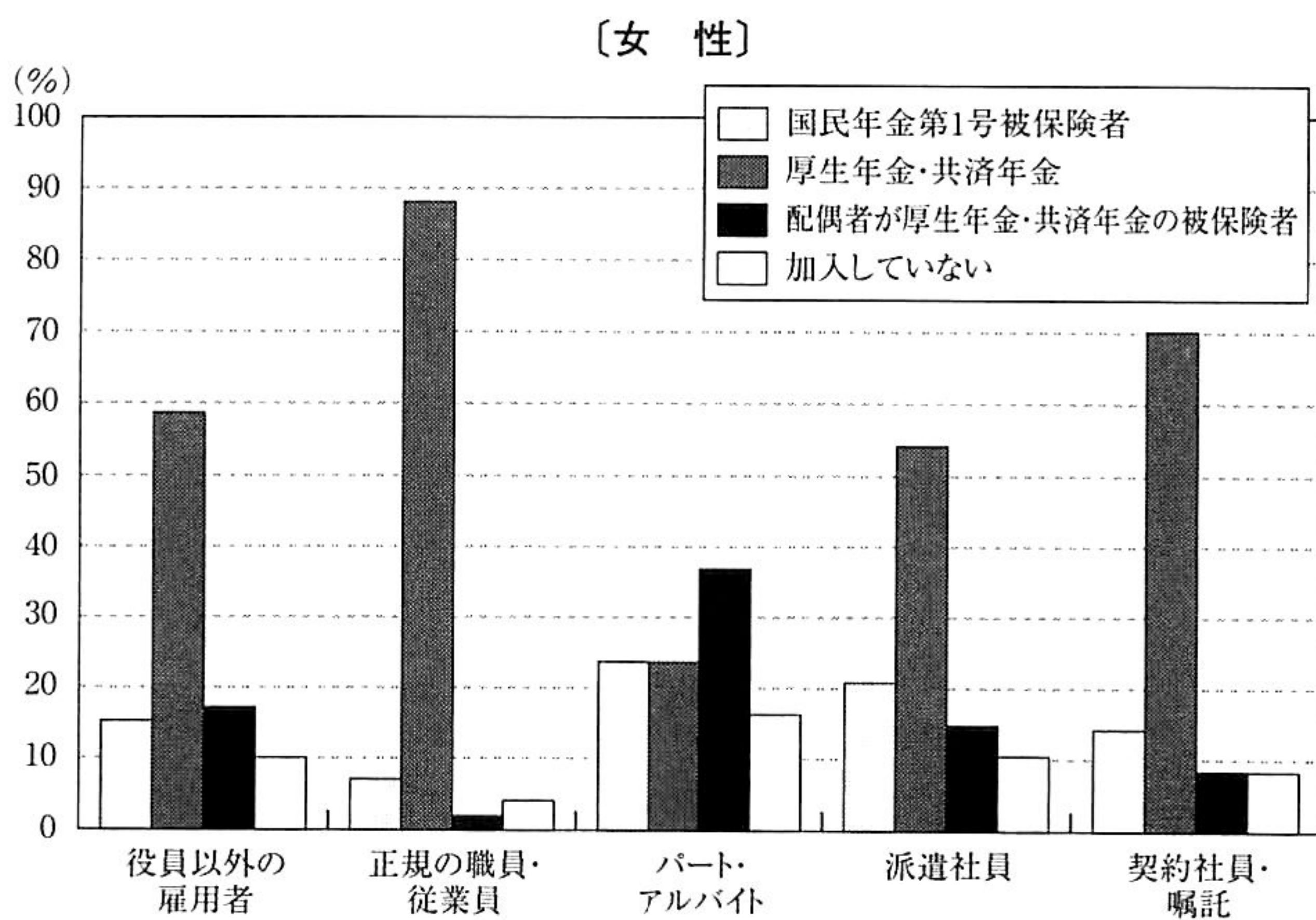
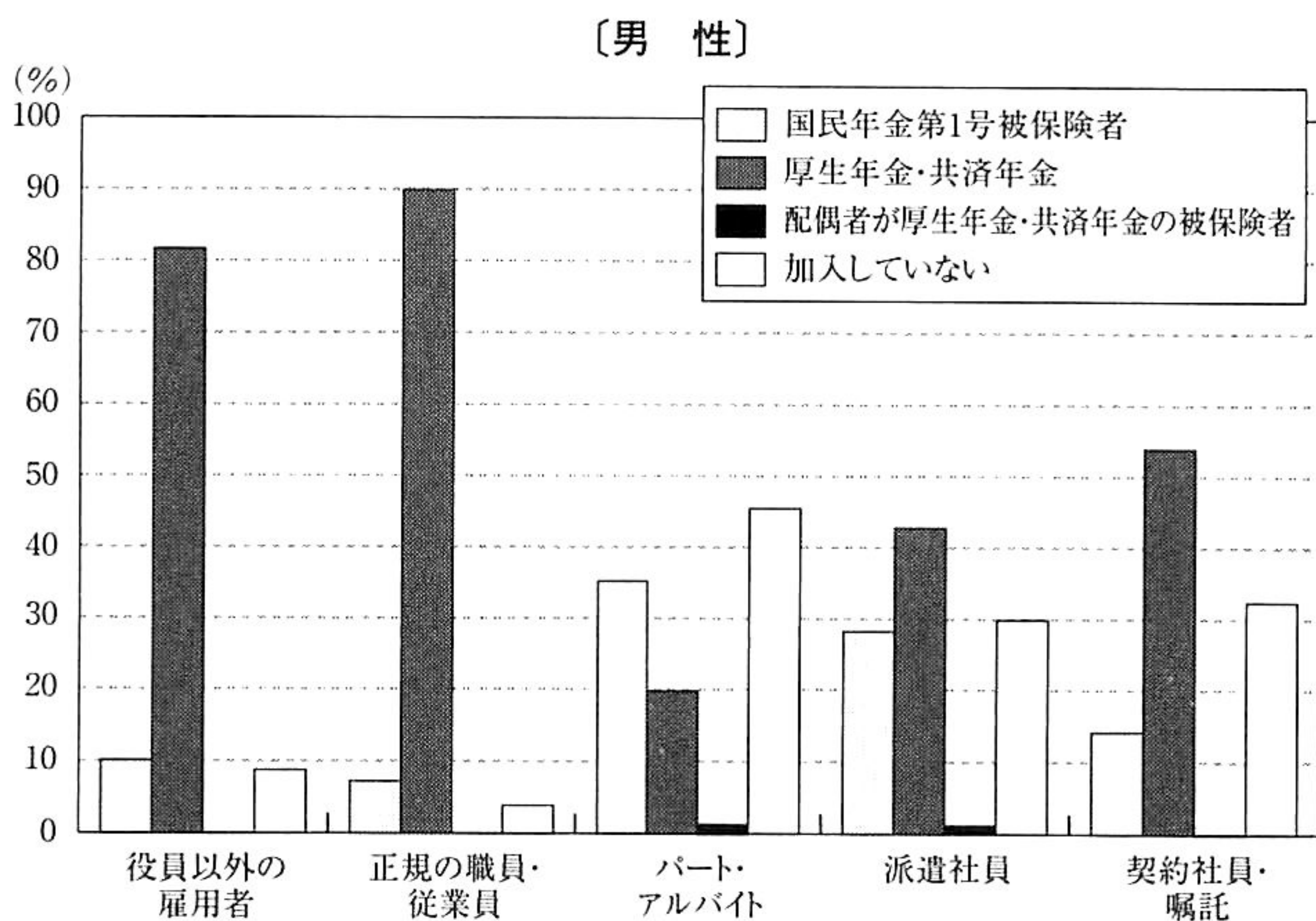
筆者はかつて、国民健康保険の保険料について区から差し押さえを食らって愕然（がくぜん）としたことがある。筆者はあまり医者を好まず、数年に一度しかかからない。そのためうっかり支払いを忘れていた。これはもちろん自分が悪いのであって、苦情は言えない。しかし筆者のように、明日、突然まったく収入がなく

(厚生労働省「平成18年版　労働経済の分析」より)

図3-3　就業形態別公的年金加入状況(2004年)

なるかもしれない人間からも、口座を差し押さえてまで保険料を徴収することに、非常に驚いた。「では僕は国民健康保険制度から離脱します」と、区の担当者に大人気ないことを申し立ててみたのだが、「そういう訳にはいかないんですよ」と、ものやわらかに、あきらかに問題児を相手にするような口調でさとされたものである。

筆者の知人に、正規雇用されないままに雑誌の編集長を任されている人物がいる（私たちの業界では非正規雇用者保護政策がかえってアダになり、こういうことが起こる）。この人は、同様のケースで「では私が来年アメリカ人と結婚して、アメリカ人になったらどうしますか」などと、筆者など問題にならないくらいのことを言ったそうである。「ウヘッ、大人気ないなあ」とは思うものの、その気持ちもわからなくはない。

もっとも、政府もこうした事態を放置しているわけではなく、雇用保険に加入できる労働時間、日数を引き下げるなど対策をこうじてきた。しかし、１日単位で働く人を派遣するスポット派遣の出現や、１日に複数のバイトを掛け持ちする人など、働き方が急速に多様化した状況に対応するためには、個々の制度の修正ではなく、税制、教育などあらゆる分野にわたって、国のかたちをつくりかえるしかないと思う。

現在の制度は「男は学校を出て定職につき、妻子を養っていく」という、高度経済成長期

の価値観にもとづいてつくられたものだ。これからは、夫も妻もアルバイトで働き、局面によって男女の役割が入れ代わる家庭や、あるいは結婚はしないが子どものいるカップル、同居しないカップルなど、多様な家庭像を前提に考える必要があるだろう。

娯楽分野の作品は忠実にその世相を映し出す。１９７０年代の漫画作品『愛と誠』（講談社）では、男は女性への愛を証明するために、ナイフの刃に向かって命をかけて倒れこんだ。今では驚くべきことに、突然、空から女性が降ってきて「あなたのことが大好き」などと宣言してくれたりする。ナイフに向かって倒れるどころか、男子の主人公が女子に守られながら、女子の敵と戦っていたりする。

またかつては必須だったライバルキャラクターが、近年の作品では意図的に省かれるようになった。現実は厳しい。だったら漫画の中くらいはステキなファンタジーを楽しみたいという変化なのだろう。

世の中の価値観は高度成長期の時代から、かくも激変しており、今後はもっともっと激しい変化が到来すると思われる。こうした変化を踏まえて、社会制度を設計し直すことが今後望まれるはずである。

＊多様化に対応した教育制度を

教育分野も同じである。徳育の強化というが、実情に即していない伝統教育など、根づくはずがない。これからは、なんでもアリの世の中に対する柔軟さを養うことのほうが大切だろう。すべての人が同じような学校に行くという建前を捨て、考え直したほうがいい。

教師や医者は聖職とされ、教育や医療の現場は聖域扱いされる。構造改革特区の実験を見ても、学校はなかなか大胆に改革しづらい世界である。本当のところ、もう少し規模を小さくし、大きめの学習塾ぐらいのさまざまなスタイルの学校がたくさんできて、生徒や親御さんはそれらから自由に選択できるという制度にするのがいいように思う。

ネオリベラリズムの卸元である経済学者の故ミルトン・フリードマン氏は、納税者が子供を私立学校に通わせた場合、政府が公立の学校を運営するための税金に加えて、私立学校の授業料をも支払わなければならないことを指摘した。そこから、政府が授業料クーポンを支給し、親はそのクーポンを使って自由に学校を選択できる「授業料クーポン制度」を提案した。

この制度では、たとえばクーポンにお金を少し足して公立学校に通わせてもいいし、たくさん足して授業料の高い私立学校に通わせてもいい。つまり、「公立学校運営のための税金

を払いながら、公立学校に通わずに私立に行く」という教育費の重複が解消され、選択の幅が広くなるのが、この制度のポイントである。

確かに合理的に感じられるが、もともと公立学校に通っている人は、この制度が導入されても直接には恩恵を受けないことにご注意いただきたい。

こうした市場原理的な改革は、それが情緒に欠けると感じられ、簡単には進まないだろう。そうすると、すでに都市部では常識になっているように、お金に余裕のある人はさっさと公立学校を見捨てて、私立に移行していくことになるだろう。恐らく教育分野でも格差が進行し、階層化していくと思われる。その結果、階層間の軋轢（あつれき）が顕在化することも充分にありうる。そこできっと起こる、現在のいじめ問題よりもさらに荒涼としているだろう悲劇をふせぐためには、進まぬ改革を待っていては手遅れである。

もし現在なにか問題を抱えている人は「一人市場原理」を実践して、学校に行かなくても平気な心構えを持ったほうがいい。

また親御さんも、自分の子供が学校に行かなくても、今の時代はそれで人生が終わるわけではないという意識を、持ったほうがいい。終わったのは「いい学校を出れば、いい会社に入れて、そこそこ幸福に暮らせる」という時代である。

現在のいじめ問題は、大人社会を反映して、非常に複雑で陰湿である。子供に、大人でも解決できないようないじめの問題を解決せよと言っても無理である。もちろん教師でも難しい。

一番現実的な解決は、いじめにあったら学校に行かないことである。しかし「人は学校に行くものだ」という前時代のモデルを、親も生徒もあまりに当たり前に信じているがために、学校から逃げられずにいる。そうして逃げ場を失った結果、死を選んでしまった子供の報道を目にすると心が痛む。

＊私も学校をやめて大検を受けました

ダイエーの創業者である故中内㓛氏は、'90年代に「今は結婚は二回、転職は三回の時代だ」と語っていた。筆者はこの言葉が好きである。氏は「人間、10代、30代、50代と三回失敗できる」とも言っていたようにも思うのだが、これは筆者の妄想かもしれない。

筆者は、かつて高校を卒業できずに中退した。いざ中退が現実になるまで今ひとつ実感はわかず、あれは3月、担任の教師に中退を申し出たときは、口惜しいような、情けないような、そして悲しいような、なんとも複雑な気持ちであった。教師のほうは、なにかさばさば

した感じだった。中退について、家族に怒られた記憶はないが、一種のあきらめの境地だったのではないかと思う。

中退したからといって、自分で働きはじめるほどの甲斐性（かいしょう）もない筆者は、とりあえず確たる目標もないままに、当時は8月に行われていた大学入学資格検定（現在は、高等学校卒業程度認定試験。略して高認）の合格を目指して、勉強をはじめることにした。

あの頃はなんとも地に足のつかない、情けない気分の日々だった。自分は何者でもないのである。浪人生ですらない。これは非常に心もとない状況だ。

中退するまでわからなかったことだが、以前の友達、順調に高校を卒業して大学に入った友人は当然のこと、浪人生の友人ですら、そうしたコースから落ちこぼれた自分にはまぶしく、自分の身が恥ずかしくて、とてもいっしょにいられないのである。

筆者は、おのれの身の恥ずかしさゆえに、それまでの交際は一切絶ってしまった。これは中退者にしばしば見られる心理のようだ。

そうした自分にとって、引け目なくつきあえるのは、大検の予備校の生徒たちだったはずだが、こちらはこちらでまたうまくコミュニケーションができなかった。

当時は'80年代中盤。インターネットどころかパソコン通信も普及しておらず、情報へのア

クセスが難しい時代である。とりあえず、新聞の広告を見て大検の予備校を探し、母といっしょに面接を受けてまわった。

だが、「さっきまでは秘書と所長として振舞っていたのに、偶然、その直後にデパートで見かけると秘書は明らかに愛人だった」など、ずいぶん怪しげな教室も多かった。

その中でもなるべくちゃんとしてそうなところに入ったのだが、見た目はまったく普通なのに、高校中退というアナーキーな人生を歩いている人が多いのには驚いたものである。もちろん自分もその一人だったわけだが。

1クラス20人程度だったろうか。学業のレベルはみんなマチマチなので、最初にどの程度からはじめるか先生が希望を募ったところ、「地図は英語で言うとmapとか、そういうレベルから始めてください」と叫んだ生徒がいた。彼はこの瞬間、大阪でも五本の指に入るカッコ悪い男だったが、筆者は「グッジョブ！」と心で叫んでいた。筆者もまた同レベルだったからである。

通いはじめて、幾人かは親しく話すようになり、また食事などもするようになったが、打ち解けて話すことはなかった。

打ち解けるためには、まず「自分がなぜここにいるか」を解説する必要があったが、この

教室では誰もその話題に触れない。それはタブーになっていたからである。みんな心の中を見せないようにしながら、大阪のビルの一室にあるその教室に通っていたのだ。

もっとも、筆者の場合、そもそも学校に通うのが苦手だから中退したわけである。しばらく通って大検について書物では得られない情報をつかむと、予備校には行かなくなった。代わりに自宅に引きこもって勉強するようになったわけだが、真の引きこもりの時代は、まだ先のことであった。

大検の試験は夏、大阪では北野高校で行われた。会場で中学の時の同級生と出くわし、気恥ずかしい思いで苦笑しながら「おまえもやめたんけ」と言葉を交わした。彼も同じ心境のようだった。中学を出てすぐ自衛隊に入ったが、やめて大検を受けるという。

試験の結果がわかるのは11月。その間、大検に合格していることを前提にバリバリ勉強し、大学受験を目指すべきだったのだが、受かっているかどうかもわからないのに、大学受験の勉強をする気にはまったくなれなかった。単語カードなんかをつくったりして、無為に日々を過ごしていたような気がする。

当時、大検について年間〝最低一回行うこと〟という規定になっているのを本で見て「じゃあ年に二回くらいやってくれると気分もずいぶん救われるのに」と思ったことを覚えてい

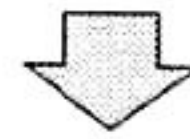
る。これは、その後'01年度に実現し、年二回の試験となった。いいことである。

＊「大検」から「高認」へ

本田氏や筆者が受験した大学入学資格検定、通称「大検」は、前述のように'05年に「高等学校卒業程度認定試験＝高認」へと制度を変えた。ちなみにこの制度変更も、規制緩和の流れの中で、多様化する選択に対応して行われたことである。

試験が行われるのは8月と11月の年に二回。受験科目は、国語、地理歴史（世界史A、世界史Bのどちらか1科目。日本史A、日本史B、地理A、地理Bのどれか1科目）、公民（現代社会1科目ないし倫理と政治・経済の2科目のどちらか）、数学、理科（理科総合A・B、物理、化学、生物、地学のどれか2科目）、外国語（英語）の8科目、ないし9科目となる(図3‐4)。

また、大検にも同じような制度があったが、高校で取得済みの単位によっては、受験を免除される科目もあり、すべての受験者が、8ないし9科目を受ける必要があるわけではない。科目免除に有効期限はないので、昔に取得した単位でも大丈夫である。合格者の平均年齢は20歳前後で推移しているが、80歳代で合格した人もいる(図3‐5、3‐6)。ちなみに筆者

教科	試験科目	要　件
国語	国語	必修
地理歴史	世界史A・世界史B	A・Bのうち１科目必修
	日本史A・日本史B	日本史A・B、地理A・Bのうちいずれか１科目必修
	地理A・地理B	
公民	現代社会	現代社会1科目または倫理、政治・経済の２科目どちらか必修
	倫理	
	政治・経済	
数学	数学	必修
理科	理科総合	５科目のうち2科目必修
	物理Ⅰ	
	化学Ⅰ	
	生物Ⅰ	
	地学Ⅰ	
外国語	英語	必修

合格に必要な科目数…８科目（現代社会を選択した場合）
９科目（倫理及び政治・経済を選択した場合）

※既に合格している科目を再度受験すること、合格に必要な科目数を超えて受験することはできません。
※高等学校の単位認定のためにこの試験を受験する場合であっても、上記の試験科目数を超えて受験することはできません。

（文部科学省HPより）

図3-4　高認の試験科目および合格要件

年　齢	人　数（%）
16～18歳	4,696人（55.3）
19～20歳	1,958人（23.0）
21～25歳	1,166人（13.7）
26～30歳	399人（4.7）
31～40歳	225人（2.6）
41～50歳	42人（0.5）
51～60歳	11人（0.1）
61歳～	2人（0.0）

（注）合格者の年齢は、年度末における年齢。

（『高認試験のすべてがわかる本』〈法学書院〉より）

図3-5　平成17年度（第1回・2回の合計）高認合格者の年齢別内訳

年度	平均年齢	最高年齢
13年度①	20.1	67
13年度②	20.2	81
14年度①	20.3	74
14年度②	20.5	70
15年度①	20.4	71
15年度②	20.5	72
16年度①	20.7	58
16年度②	20.8	81
17年度①	**19.8**	**55**
17年度②	**19.8**	**70**

（注）合格者の年齢は、年度末における年齢。

（『高認試験のすべてがわかる本』〈法学書院〉より）

図3-6　合格者の平均年齢の推移（平成16年度までは大検）

の場合、４科目に合格する必要があった。当時は合格が比較的容易な家庭科で１科目稼ぐという手があったが、今は家庭科はない。

合格した科目は次回の試験に持ち越せるので「８月は４科目に絞り、11月は残った科目に専念する」という受験方法も可能である。合格ラインは１００点満点中、40点と見られている。

試験の合格率は約40％。これは大検時代とそう変わらないが、試験の性質が変わった。大検はあくまで「大学受験資格をとる」制度であり、合格しても公式に得られるのは「大学入試受験資格」だった。しかし高認では、試験の性質が〝高校卒業程度の学力があること〟を認定するものになった。合格しても、最終学歴が高校卒業にならないのは大検と同様だが、高校卒業者と同程度の学力を持つと認定されるため、高校卒業の資格を必要とする就職などでより広く活かせる制度となっている。

また大検は、高校在学者は受験できなかったが、高認では受験できるようになった。つまり「在学しているが不登校」という人でも試験を受けられるわけだ。不登校や休学中の人には、在学しながら試験を受けるという選択肢が増えたことになる。

さらに、学校長が許可すれば、長期休学者がこの試験を利用して単位を取得し、卒業単位

として活用することもできる。

筆者の場合、結局無事に大検に受かり、その年に一応大学受験も試みたが、やはり準備不足は否めず全滅だった。そして通常の二浪目にあたる年から、大学受験に向けて勉強を始めることになる。

＊引きこもる生活へ

あの頃はネットがなかったので、人づき合いを絶つということは、そのまま情報を絶つことを意味した。

高校卒業→大学受験という通常ルートに乗っていなかった筆者は、「大学受験ってそもそも何科目?」といったところから、勉強を始めていかねばならなかった。さっぱり大学受験というものの世界観がつかめなかったのだ。

幸い、某予備校の「昼間部私立文系B」という、午前に対して昼、国立に対する私立、理系に対する文系、Aに対するBと、すべてのパラメーターが二流であることを指すクラスに入ることができたのだが、ありがたかったのは授業ではなく、受験の情報にアクセスできたことだった。

といってもそんな大げさなことではなく、教科書として参考書を買わされたので、それを読んで、どういうことが大学試験で問われるかのイメージがつかめたのである。

例によって予備校自体は1週間しか行かなかった。行っても高校中退なんてヤツはいない。孤独感が増すばかりである。一人のほうがつらくない。

だが引きこもりには、引きこもり固有の問題もある。

当時、筆者の家庭は2DKの狭い社宅に暮らしていたが、家族4人の生活はいっぱいいっぱいであった。一応自分の部屋を与えられていたが、うすっぺらい壁を一枚隔てただけで、プライバシーもへったくれもなかった。

また社宅だけに、人の目も気になる。

引きこもりと言えど、時には体を動かしたくなるものだ。そこで、グローブを持って社宅の壁にボールをぶつけたりした。しかしそういうことをすると、母に「社宅の人にみっともないから」とたしなめられた。

そんなことは本人が一番わかっているのである。でかい図体をしたむさい男がどんなに情けない気持ちで、壁にボールを放っていたと思うのだ。

それからは人目のない深夜に街を徘徊(はいかい)するようになったが、これも母にたしなめられた。

「あんた下着泥棒と間違えられるで」と。確かに！　だが真の問題は、息子が本当に下着を盗んでいるのではないかという疑念が、母の目にかすかに宿っていたことである。

しかし、あれはきつかった。

家の中はせまいしうるさい。弟が隣室でギターをつまびきながら長渕剛を熱唱していたある夜、筆者のフラストレーションは頂点に達した。両親に一人暮らしを直訴し、大阪市内に下宿することになる。

筆者はここでついに、ほぼ1週間誰とも口をきかない生活を1年近くにわたって送るという、真の引きこもりライフに突入することになる。ちなみに「それって親に甘えているだけでは」という非難は甘んじて受ける覚悟である。

考えてみれば、家が狭かったのは結構な幸運で、下手にそこそこプライバシーを確保できる環境なら、筆者はそのまま自宅で引きこもっていたことだろう。するとフラストレーションを抱えたまま、いわば生殺しの状態で自宅で過ごすことになっていたわけだ。

受験生が自宅で事件を起こしたという報道をときどき目にするが、まったく他人事（ひとごと）とは思えない。

＊引きこもりは快適

真に一人っきりの生活はとても快適だった。
一般の人は社会のモデルの中で生きている。みんなは社会の中で「何者か」なのである。しかし自分は違う。「何者でもない」のだ。これは案外つらくて、それならばいっそ誰とも顔を合わせないほうが快適なのである。
また、引きこもって一人で暮らす行為は、武道家の山ごもりにも似て、感性が研ぎ澄まされるという効果もある。もっともこれにはデメリットもあって、いかにも不思議なことだが、普段だと絶対に視聴を完遂しないようなダメっぽい映画でも、最後まで引き込まれるように観てしまったりする。
あの頃の深夜にテレビで放映される映画の定番『ドクター・モローの島』とか、あるいは「炭鉱主がゾンビを労働力として使役していたっ！」という訳のわからぬ映画とか、いくら「あと10分観たらやめよう」と決意していても最後まで観てしまう。もっともこれは、世に言う逃避であろう。
余談はさておき、当初は、はりきって1日のうち相当長い時間勉強したが、ほどなく偏頭痛に悩まされるようになる。これは「あんまりまじめに勉強せずとも大学に受かりましたわ」

などと自慢したいのではなく、人間、肉体に無理をしてもいけないように、頭脳も酷使すればいい、というものではないらしい。

偏頭痛が勉強に響くようになり、筆者は以降、人間の集中力は15分が限界と割りきって「飽きたらすぐやめて休み、また勉強に戻る」という無理をしないスタイルに切り替えた。最初に高邁な理想を掲げても、受験は長丁場である。続かない。

受験勉強のための一人暮らしである以上、部屋にテレビはなかったが、これも初期のうちに、渡された生活費をやりくりし、日本橋（にっぽんばし）という電気街におもむきジャンク同然のものを購入。自転車で部屋に輸送した。ついでにいつの間にかファミコンも稼動をはじめた。

このように書くと、あたかも引きこもりライフを満喫していたかのように思われるかもしれないが、実際にはいろいろ問題も生じていた。

中でも大きかったのは睡眠時間である。

人間は、なににも拘束されないでいると、どんどん睡眠時間がずれていくようで、深夜、早朝、午前中と寝る時間が遅くなっていく。引きこもり中なら問題はないように思えるが、ときおり受ける模擬試験などはつらい。

また就寝時間が午前中に突入すると起きるのが夕刻になり、脳の活発な時間が午前0時か

ら２〜３時間に限られ効率が悪くなる。

それにあまり一般社会のリズムからかけ離れると、孤独感も深まりメンタルにもよくない。あえて午前中になっても眠らず、夜まで外に出て歩きまわって体を疲れさせるなど、睡眠リズムの改善はいろいろ試みた。しかし結局どれも実らず、試験や面接の本番も徹夜でのぞむなど最後まで解決できなかった。ちなみに今でもこの問題には苦労している。

初期の偏頭痛で、頭脳の健康も大切だと気づかされた、というほどでもないのだが、よく外を歩いた。

大阪というところは、さすがに商都というだけあって、都市全体が商店街でつながっているようなところがある。ある商店街の気配が薄まって、普通の市街になってくるとまた次の商店街がはじまる。その風情（ふぜい）が面白くてとんでもない距離を歩いたものだ。これが心の健康にはよかったように思う。

人間は半年も引きこもれば、いともかんたんに心にダメージを引き起こすことができる。友人の経験からそれを痛感し慄然（りつぜん）としたことがあるが、引きこもっている、あるいはまさに引きこもらんとしている人には、とにかくなにをおいても自分なりの娯楽を確立することをお勧めする。

＊引きこもる意味

自分の場合は運がよかったが、それでもやはりあせりはあった。ストレスとは無縁ではいられず、軽い胃潰瘍（いかいよう）になった。

夏を待たずに胃に違和感を覚える箇所ができ、その不快感から逃れるためには、強い酒を「くいっ」と胃に送り、アルコールでその箇所を「焼く」必要があった。飲酒が目的ではなかったが、筆者の下宿の冷蔵庫には安物のウイスキーが常備されるようになった。結局、完治は大学卒業まで持ち越すことになる。

今にして思えば、後半はいろいろな齟齬（そご）が現れ、破れ目をつくろいながらなんとか乗り切ったという感じだった。

後半は勉強もダレてしまい、学力のピークを受験の時期に持っていくのに失敗してしまった。秋から蓄積がものをいう暗記科目が伸びたためになんとか間に合ったが、危ないところだった。筆者の場合、あの経験を2年やれと言われてもできなかったと思う。

しかしそれでも、あの時の筆者には人と顔を合わせない生活が必要だった。

大学受験というと予備校に通うのが一般的である。とくに自分の場合は社会のレールから

はずれているだけに、ここで予備校というレールに乗らないのは不安だった。もちろん社会的な体面もよくない。が、だからといって無理に集団に参加していたら、あるいはさせられていたら、自分はどうなっていただろうか。どう考えてもよい未来は想像がつかない。

現在、引きこもりを社会不適合の病気、あるいは著しい甘えと見なし、「引き出せばいい」という考え方をする人がいる。これを実践する団体もあり、そこではいたましい死亡例すらある。しかし、かつての筆者同様、引きこもっている多くの人にとって、恐らくそれが必要なのではないかと思う。

引きこもることによって真の破局を回避しているわけで、それを「みんな学校を出て、働く」という戦後の高度経済成長期の価値観によって否定するのはよくない。そのせいで本人自身が「自分はダメだ」と焦燥を感じフラストレーションを溜め、最終的に社会を呪(のろ)うようになると、ときに破滅的な結末を招く。

いじめの問題も同様である。

もちろん真の解決はいじめがなくなることだが、それは現実的ではない。現実的で確実な解決法は、学校というコミュニティから離脱することである。

それが、「学校を出て働く」という価値観が現代の社会でもまだ生き残っているために、

子供も「学校には行かない」とは言い出せず、親もまた「学校に行かなくていい」と言えない。社会も、共同体から離脱するのではなく、向き合えという視線を送る。
さすがに口に出す人は少なくなったが、「いじめられるのは、いじめられる側にも問題がある」と考え、共同体からの離脱を甘えと見なす人はいまだ潜在的に多くいるはずである。
そうした目線が子供から逃げ場を奪うにもかかわらず。
価値観が多様化した時代に、学校という大きな物理空間の中でさまざまな人が均質な共同生活を送るのは、そもそも不可能だ。
いじめや引きこもり、あるいはフリーターが社会問題として論じられるときも同様に、明らかに前時代の価値観が前提にある。
それは国家をあげて欧米に追いつき追い越せとがんばっていた時代の「孤立しているのはかっこ悪い」「人とは活発に交際していたほうがよい」「定職についていないやつはダメな人間」というような価値観である。
これが家族を追いつめ、本来逃避先となるべき家庭を重圧の場に変え、また本人を焦燥に駆り立て、社会を呪う心を育てる原因となる。

＊格差？　いや多様性

格差社会の是正という表現は、生活に上下があることを暗黙の前提とし、自らの意思である暮らし方を選択した人々を社会問題視している。
また、ニートや引きこもりを引き出して定職につけるという発想は、明らかに定職についている人間のほうが上で、そちらに引き上げてやるという前提がある。これは引き上げられる側の人生を否定しているのに等しい。
こうした否定は、人をして自分がこの社会から疎外されているように感じさせ、やがて社会を呪う心境へと駆り立てるだろう。そんな不幸を避けるためにも、時代の変化を認識し、価値観を変えるべきだ。
無論、変わってはいけないものもあるが、なにかを否定するのではなく、肯定するほうがいい。
筆者は引きこもり生活を経て、やがて大学に合格し、見た目は普通の学生の生活に復帰した。といっても、友達の家で延々とゲームをしたりして、引きこもりとさして変わらない生活だったが。
お互いに無言で、筆者はパソコンで「信長の野望」を、友達はファミコンで「ガチャポン

戦記」を一日中プレイし、「こういうのを第三者が見たら、〝コミュニケーションが途絶した現代の若者〟とか言われるんだろうな」と苦笑し合ったのを覚えている。
まあそのような感じで、学校を中退するような人間であるということはいつまでも変わらず、安定した職につくことなく今に至っている。あの頃のなんとも言えない情けない気分は、今もどこかで尾を引いており、現在の自分を形づくっている。

＊今の時代には可能性もある

筆者は、案の定大学を４年で卒業できず、在学中からフリーの編集者として働きはじめた。'90年代半ば、筆者はある青年漫画誌の編集者として働き、銀行や官僚の漫画を担当していた。当時は経済関係の文献を、それこそアングラペーパーから研究機関のレポートまで読み漁ったものだ。
そんな筆者は、'90年代の規制緩和について、「すでにスタンダードから転落した自分はいい。自分のような人間はむしろ今の世の中など壊れてしまえと思っているが、みなさんは勇気があるなあ」と感じていた。
たとえば「学歴社会」というのも、ひとつの規制である。これはすべての人を卒業した学

校で判断する非人間的な規制かというとそうでもなく、大学さえ出ていれば評価してもらえる、むしろ優しい規制である。

筆者は私立大学の文学部卒であり、人に自慢できるほどの学歴はない。しかしそれでも、学生でも浪人生でもなかった自分が、大学に入ることで「大学生」になれた。そして人がましく扱ってもらえるようになった。これはずいぶん便利で優しい制度だと、大学に入ってしみじみと感じたものである。学歴が通用しないとしたら、人間が持つ才能そのものが評価される。それはたいへんシビアな話だ。もしなにかひとつ突出した能力があれば、筆者も大学に行く必要はなかっただろう。

すでに現在の日本社会では企業が人を育てるという風土は薄れ、人材が持つ才能そのものが評価される世の中になりつつある。当時の筆者は、「そんな世の中になるのなら、とにかくいい大学さえ出れば就職ができて、たとえ窓際でも定年までお金をもらえる社会のほうがいいだろうに」と思っていたのである。そういえば「窓際族」という言葉も死語になった。

当時、民間の政策シンクタンクである構想日本の政策委員、丹治幹雄氏と、知事を主人公にした漫画を企画していた。石原慎太郎都知事の誕生や地方の改革派の知事が話題になる前であり、今でも着眼点はよかったと思っているが、諸事情により実現しなかった。

あの頃、丹治氏と「日本はあえてグローバリズムに参加せず、再鎖国して小規模な経済の独自文化国家になるという選択肢もある」と話し合っていたものだが、現実には、もちろんそうはならなかった。鎖国するにはこの国に暮らす人々はあまりに新しもの好きであり、「なに、先進国は小さい政府を目指すのか。じゃあ俺たちもやらないと」という意識があり過ぎる。しかしこれは決して悪いことではない。

自分のような暮らしぶりの人間にとって、価値観が多様化し、多様な生き方が許される現代は、なかなかよいところもある時代である。銀行も24時間お金を下ろせるようになったし、スーパーも深夜まで、あるいは24時間営業するようになった。ありがたい。

電話会社が民営化されていなければ、通信費がこんなに安くなることはなかったはずである。インターネットのおかげで情報へのアクセスは劇的に飛躍した。今の時代に引きこもっていたら、2ちゃんねるで仲間を大勢見つけていたことだろう。Vipper（インターネットの巨大掲示板「2ちゃんねる」の中でも、とくに独自の用語を駆使するコアなユーザーを指す。ニートや引きこもりの人も多いと言われている）になっていたかもしれない。

規制緩和の結果、物流も充実し、家にいながらなんでも通販で買えるようになった。筆者は金魚の水槽のフィルターもネット通販で買う、「杉並区でも有数のネットでなんでも買う

男」だと自負している。
ネットラジオで海外のマイナーな音楽を知り、それをアメリカのアマゾン経由で買うことも簡単にできるようになった。ありがたい、ありがたいことである。

＊ジャパニーズドリーム

私たちが体験しているグローバル化については「奔放なネオリベラリズムの跳梁を招いただけだ」という批判がある。この危惧はまったく正しい。
すでに１００万円持っている人がまた１００万円を稼ぐのと、ゼロから１００万円稼ぐのでは前者のほうが圧倒的に有利である。放っておくと不平等はどんどん拡大していくので、司法は機会の平等が侵害されないように、違法な経済活動はきちんと摘発しなければならない。
だから国家の役割の縮小は、一方で番人としての機能の強化を意味するのだ。企業の犯罪が明らかになるたびに証券取引等監視委員会や公正取引委員会の強化が論議されるのは、そのためである。海外でも地域によっては、規制緩和の結果かえって警察の介入が頻繁になったケースがあるそうだ。

また市場原理主義は、あるゆる人を市場の競争にさらすが、安定した生活者層が存在しない社会に成長はのぞめない。

グローバル化は伝統を崩壊させるという批判もある。これは、確かにその通りである。だが、伝統とはそれほど大切なものか。繰り返すが、実は伝統と呼ばれるものの多くが国民国家の創成期につくり出されたものであり、案外新しい。

一例をあげると、日本の国技、相撲も現在のような伝統と格式を持ったのは戦後の話である。戦前の相撲界は、分裂騒動などもさかんで、ちょうど今のプロレス団体のようだった。ノスタルジックに過去を大切にするあまり変化を拒むのは、明治以降いつの時代も変化してきた我々らしくないだろう。

伝統もいいが、現在の我々の社会にも目を向けたほうがいい。

それはあまりカッコよくないかもしれないが、それなりにユニークな社会でもある。40 0万人のフリーターや60万人以上のニートが暮らす国。これはなかなかの可能性を持った国であるはずだ。新時代の価値は伝統ではなく、こうしたユニークさに目を向けていくべきだろう。

フリーターの増加や、賃金格差の拡大が社会問題として報道される。しかしこれは本来、

問題の立て方がおかしい。組織に縛られず、非正規雇用者として働くことを主体的に選び、結婚などもせずに暮らしていくことは充分にありうるはずで、そうした人生観を否定するのは、前時代の価値観である。

問題なのは、今の日本でこうした道を選んだときに、安心して暮らせる社会制度が未整備なことであり、また非正規雇用者をお手軽に集め、お手軽に解雇できる労働資源としてしか見なさない企業の体質が存在することである。

フリーターが問題なのではない。フリーターが安心して暮らすことのできない社会が問題なのだ。

今後は、「人は定職につくべし」といった建前をすてて、非正規雇用者でも安心して暮らせる社会を整備することこそを検討するべきだろう。企業や政府も、本音ではフリーターの存在をありがたがっているのだから。

日本はもともと、八百万（やおよろず）の神様を持つ多神教の国だった。だから一神教の国のように、自分たちの神様以外を認めないような信仰心のあり方は見られず、よくいわれるようにクリスチャンでなくとも教会で結婚式を挙げ、クリスマスを祝ってもへっちゃらである。最近はハロウィンまで定着させようとする思惑が見え隠れするが、これはうまくいくかどうか。

それはさておき我々にはイデオロギーが希薄で、プリンシプルとやらがない。これは従来、欠点と見られてきた。しかし逆に言えば、原理がない以上、他の原理を斥ける理由もないといえる。

先に触れた丹治氏は「どんな人でも大金をつかむチャンスがあるのがアメリカンドリームの建前なら、どんな国のどんな文化の人が来ても、イスラムの人が来ても、アルバイトをして少なくとも年に200万円は稼ぐことができる。これがジャパニーズドリームだ。そんな国はなかなかない」と語る。まったくその通りだと思う。

むやみに保守回帰して排他的な心を育てるのではなく、むしろ今我々が築きつつある社会の可能性に目を向け、いろいろな文化や生き方を肯定する社会を育(はぐく)んだほうがいい。

今の日本社会には、近い将来、非常に歪んだナショナリズムや、他のコミュニティに対する悪意を育てる危険性も存在する。こうした時代、政府も愛国心や伝統を強調したり、憲法改正を論議したりしないほうがいいだろう。ナショナリズムというものは、いずれは制御できなくなる諸刃(もろは)の剣(つるぎ)である。これは過去の歴史が、そして今、私たちが目の当たりにしている世界情勢が教えてくれる。

日本が生み出したアニメーションや漫画の文化は、一見してその登場人物たちの国籍がま

ったくわからない。というか、あのように緑や青の髪の人など、いったいどこの国にいるというのか。しかしこのアニメーションがいろんな国で受け入れられ、また国境を越えて、ファン活動までもが共有されている。こうした作品を生み出す社会は、十分にユニークな社会である。

さまざまな人が伝統に頼らず、主体的に自分の生き方を選択でき、社会もそれを肯定する国。これはイデオロギーのない日本人にとって、現実的な選択であり、十分に達成可能な社会像であるはずだ。ぜんぜん美しくなくてキッチュであっても、「なんでもアリ」が自分たちらしくていいのではないかと思う。

第4章　孤独力、妄想力がコンテンツ立国を支える

本田透

＊「おちこぼれ」がつくる歴史

資本主義社会を停滞させずに回転させ続けるためには、大衆を労働に駆り立てなければなりません。そのためには、子供を全員学校に通わせ、学校で資本主義社会の労働力として役立つ資質の人間に「成長」させなければなりませんでした。

ですから、近代国家はまず学校制度を整備しなければならなかったわけです。

そのような学校で子供が必ず身につけなければならない思想の一つが、学習して労働すれば誰でも出世できるという「立身出世主義」です。

受験戦争や偏差値至上主義といった現象は、いずれも学校のそのような性格から必然的に生まれたものであって、学校制度の「目的」にかなった現象であるといえるのです。受験戦争とは資本主義社会における競争原理をシミュレートしたものであり、偏差値とは会社における成果を数値化して子供にわかりやすい形で提示してみせるものなのです。

クラスや部活動は、会社組織に慣れるための練習です。理不尽な先輩に対しても分をわきまえて礼儀正しく接しなければ部活動から排除されてしまいます。もしいじめにあっても我慢して教室に通い続けなければなりません。そのような従順さと忍耐力を学校で養えなかっ

た子供は、サラリーマンとしての素養がないものとされ、就職において不利になるわけです。
しかし、このような学校のシステムはそもそも資本主義社会にとってだけ都合の良い「従順かつ平均的な人間」つまりは集団労働者（現代では、サラリーマン）を作りだすことを目的としていますから、ある種の素質を持った子供はどうしても不適応になりがちです。
「不登校」という言葉からは「怠惰」「逃避」という負のイメージが漂っていますが、実際にはまったく逆に、異質な才能・突出した資質を持っているために不適応や不登校になる子供もいるのです。
学校は天才や異才にとっては息苦しい場所なのです。

＊ADHD、LDだったエジソン

トーマス・エジソンは小学校では完全な劣等生で、授業をちゃんと受けられないために教師に嫌われていました。最後は、教師から「お前の頭は、腐っている」と罵(ののし)られて学校から逃げだしたそうです。エジソンは「小学校中退」という現代では考えられない学歴の持ち主なのです。なにしろ、小学校にたったの3カ月しか通っていません。
そもそも、近代学校制度が確立する以前のヨーロッパでは、個人教授（家庭教師）による

レッスンを受ける子供が（富裕階層の間では）大勢いました。教室に大人数の生徒を押し込める画一的なカリキュラム教育より、個人指導のほうが学習効率が良いことは言うまでもありません。現代でも、「個人指導」「少人数指導」を売りにする学習塾とか、たくさんありますよね。高い賃金を支払って家庭教師を雇う親も大勢います。

資本主義社会を支える労働者としての素養を育成するという意味で学校制度は不可欠ですが、天才やイノベーター、起業家、アーティストといったタイプの職業人を育成するという意味では学校はまったく不向きなのです。

エジソンの場合、学校に行かない時間を図書館通いに使って、大量の本を乱読する時間に充（あ）てたとも言われています。

後にエジソンが発明王として有名になった時、エジソンを退学させた小学校の当時の校長先生が「未納の授業料と一緒に寄付金を払ってくれ」という失礼な手紙を送ってきたそうです。エジソンは「学校を追い出してくれたお礼」として25ドルを寄付したとか。どっちもどっちという感じの、心が温まらないエピソードです（笑）。

しかしよく考えれば、確かにエジソンが発明王になれたのは、学校に行かなかったからだとも言えます。もしエジソンが学校に通い続けていれば、脳が柔らかい幼い頃に興味の赴く

ままに大量の本を乱読することはできなかったでしょう。であれば、エジソンの成功は彼をさっさとお払い箱にしてくれた校長先生のおかげですよね。

またエジソンは一般に「小学校は退学したが、母親が学校の教師だったので、家でたっぷりと個人レッスンを受けられた」と言われていますが、正高信男の『天才はなぜ生まれるか』（ちくま新書、２００４）によると、実はその話は真っ赤なウソだそうです。本当は、エジソンの母ナンシーには教職歴などなかったというのです。ナンシーは17歳で結婚し、10年の間に４人の子供を産んだそうです。５人目がエジソンです。当時のアメリカ社会の状況を考えれば、これでは働いている余裕などありません。

大人向けのエジソン伝の類（たぐい）をいくら調べても「母が教師だった」という話は出てこないそうで、正高は「エジソンは母の個人教授を受けた」という話は実は「子供向けのエジソン伝」において作られたと推測します。「学校に行かない子供が発明王になった」では学校制度の意義が問われるので、後で勝手に日本人の子供向け伝記作家か誰かが「実はお母さんが先生役を務めていた」という話に伝記を修正したんだというのですね。

＊「LD」「ADHD」というレッテル

最近ではエジソンは、「学習障害」（LD）とか「注意欠陥・多動性障害」（ADHD）だったとか言われています。

LDとは最近アメリカで生まれた用語で、意地悪く言えば学校に適応できない子供に対して貼り付ける「お前は病気だ」というレッテルです。

「知能には問題がないのに、全然勉強ができない」という野比のび太みたいな子供はもちろんLDに分類されてしまいますが、それだけでなく「国語は得意だけど算数が全然ダメ」とか「勉強はできるけど体育がダメ」とか「友達がいない」とか、とにかく学校が求める「平均的な生徒」像から大きく外れたら誰でもLDなんです。

ですからLDは医学的な根拠のある疾患ではありません。学校制度に適応できない、基準から外れた子供のことを、「おちこぼれ」と呼ぶかわりに「LD」という一見科学的っぽい言葉で呼ぶようになっただけです。

もちろん、LDという概念が「発明」されたことが全く無意味だというわけではありません。かつては学校に適応できない子供はひたすら「差別」され「排除」されてきましたが、LDという概念によって少なくとも「病気」として扱ってもらえるようになりつつあります。

医学的根拠もなく学校に適応できないくらいで「病気」扱いされてはたまりませんが、学校で労働者を生産し続けている資本主義社会にとって「学校に適応できない子供」は「問題児」か、せいぜいが社会的「病人」でしかないわけです。

しかし、もしエジソンがＬＤ児童だと「病院」で「診断」されて「治療」を受けていたら、彼は発明王になっていたでしょうか。うかつに「症状」を「改善」されてしまったら、エジソンは「ただの人」になってしまったはずです。さっさと学校を中退して家に引きこもり、自分のやりたい勉強だけを集中してやっていたからこそ、発明家になるためのトレーニングをたっぷり積むことができたのではないでしょうか。

「ＡＤＨＤ」に至ってはもっとあやしげな概念で、一言で言えば「授業を黙って聴いていられない子供」のことです。もちろんエジソンも現代ならＡＤＨＤに判定されます。教師の言うことを聞かないことを「不注意」、授業を黙って聴かないことを「多動性」、協調性のないことを「衝動性」と定義し、それらの不適応特徴がいくつかある子供を「ＡＤＨＤ（注意欠陥・多動性障害）」と名づけているわけです。

しかしながら現代精神医学のバイブルである「ＤＳＭ－Ⅳ」（アメリカ精神医学会の定めた診断の指針の第４版）によると、ＡＤＨＤの診断基準は子供の「振るまい」そのものであ

って、血液検査などの生理学的な診断項目は設けられていないのです。それもそのはず、ＡＤＨＤの生物学的原因は未だに解明されていないのですから。そんなあやふやな「病気」を誰が「医学的に正しく」診察できるのでしょうか？

いずれにしても、医学的な原因がきちんと究明されていないのに、ただ学校の求める平均的・模範的な生徒像（つまりは資本主義社会における優良な労働者像です）から外れるだけで「病気」扱いというのは、いかがなものでしょう。

「ＬＤ」や「ＡＤＨＤ」は、「おちこぼれの子供」という差別用語に疑似科学の皮を被せただけの言葉かもしれません。

２００６年9月28日、フジテレビは「恐怖の食卓」という情報バラエティー番組で「偏食するとＡＤＨＤになるかもしれない」「ＡＤＨＤは少年犯罪の一因だと考えられている」という情報を流し、ＡＤＨＤ患者の支援団体から猛抗議を受けて後にホームページに謝罪文を掲載させられました。しかし、番組放送内では謝罪も訂正もしていません。

いずれにしても、ＡＤＨＤという非科学的な概念は「学校に適応できないことは悪であり病気だ」という新たなレッテルでしかないのです。信仰心が足りないとか、異端だとか、そういうことですよ。「あの子は悪魔に憑かれた」というのと同義です。

＊脳が小さかったアインシュタイン

アインシュタインもＬＤに分類されそうな天才です。アインシュタインは言語能力の発達がとても遅く、３歳になってもまだ言葉を話せませんでした。学校でも友達と遊ぶことがなく、数学以外の教科はさっぱりでした。なので、先生からは「本当はできるくせに数学以外を全部さぼっている」と嫌われていました。

「特定の教科だけが突出してできる」これはＬＤの特徴ですよね。ＬＤ判定の場合、逆に「特定の教科以外ができない」と否定的な言い方をするのですがね。どうして、こんなネガティブな解釈をするのでしょう。１科目だけでも異常によくできるのならば、その科目の学力だけを伸ばすことで将来その科目に関する専門職につけるはずではないですか。

結局アインシュタインは「数学だけに突出した才能がある」という異能者、ある種の天才だったわけですが、学校制度の中では「数学以外に何もできない、平均的な能力のない不適格者」として扱われるしかなかった、というわけです。

学校は「従順で、協調的で、平均的な人間」つまり労働者を作るための工場なのです。ですから、マイナスの方向に突出している子供だけでなく、プラスの方向に突出している子供

も排除されるのです。すなわち、学校制度はできない子を排除するだけでなく、天才の芽をも摘む制度であるともいえます。実際アインシュタインは、良い大学に進めませんでした。数学以外の教科で得点を稼げなかったからです。

しかし、たかが大学入試レベルの国語や歴史の点数が、相対性理論を構築する仕事と何の関わりがあるのでしょうか？

ここで興味深い話があります。

現代では「脳」イコール「知性」だと考えられています。実際、ホモ・サピエンスは他の動物と比べるとはるかに脳が大きい。特に大脳が発達しています。

ですから、アインシュタインの脳はきっと平均的な人間の脳よりも「優れている」のではないか、と当時の脳科学者たちは考えました。アインシュタインが死んだ後、科学者たちは彼の脳を保存したのです。そして、アインシュタインの脳の計測が行われました。

ところが、アインシュタインの脳は通常の男性の脳よりも10%ほど小さかったのです。しかも、知性に重要な関連があるはずの大脳皮質が薄く、頭頂葉に生まれつき（または、生後すぐの時期から）障害があったというのです（図4-1）。

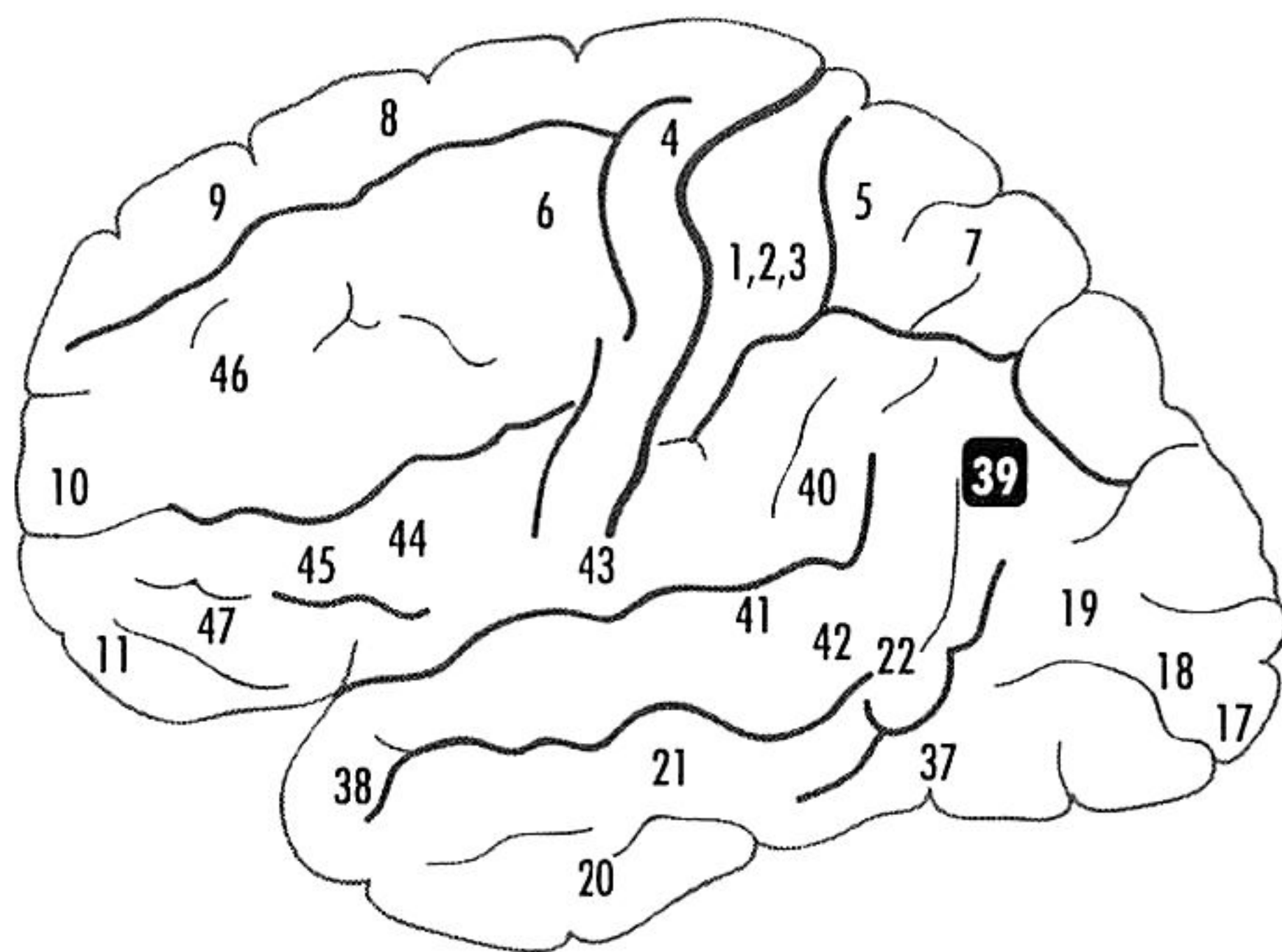
頭頂葉は、言語処理に関わる部位だそうですから、アインシュタインが幼い頃になかなか

（正高信男『天才はなぜ生まれるか』〈ちくま新書〉より）

図4-1　アインシュタインは、ブロードマンの脳地図でいう39の場所に障害があった

言葉を覚えなかったのも、学校でなまけもの扱いされていたのも、脳の障害が原因だったと思われます。

エジソンにしてもアインシュタインにしても、学校の授業についていけないＬＤ児童でした。授業中にぼーっとしていたので、教師に「なまけもの」「おちこぼれ」と嫌われていたわけです。

しかし正高信男は、彼らには並外れた空想癖・妄想力があり、常に自分の精神世界の中で集中して空想を巡らせていたため、周囲からはぼーっとしているように観られていたのではないか、と推測します。

中国あたりでは、昔から「大賢（たいけん）は大愚（だいぐ）に似たり」なんていう諺（ことわざ）があるくらいで、ＡＤ

ＨＤやＬＤの人間がある種の天才的な気質の持ち主だということを経験的に知っていたようなのですが、西欧にはそういう発想がなかったんですね。あるいは科学革命によって、元はあったかもしれないそういう発想が失われてしまったのかもしれません。

＊「おちこぼれ」からしか天才は生まれない

こういう「天才の不適応」逸話は、数えだしたらキリがありません。そもそも天才とは「優秀な人間」などではなくて、単に「標準から外れた人間」「平均から外れた人間」のうち、「たまたま」社会に貢献して「運良く」認められた人間のことなのではないかと思います。

進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンは、小学校の校長から「のらくら」と呼ばれる完全なおちこぼれ生徒で、父親からは「お前はネズミをとることしかできない家族の恥だ」と叱られていたそうです。

それでも無理して大学に進学しましたが、教授がみんなバカに見えてしまうので授業なんてとてもじゃないけど受けられません。授業から逃げて何をしていたかというと、昆虫を採集していたそうです。今なら「オタク」と言われるタイプの人です。

アイザック・ニュートンは生真面目な性格だったのできちんと大学に通っていましたが、

「万有引力の法則」をはじめとする彼の大発見はすべて、大学3年の頃の「引きこもり期」に成し遂げられています。

若き日のニュートンはケンブリッジ大学に通っていましたが、3年生の時にペストが大流行して学校が閉鎖されてしまったのです。しかたがないので、田舎に舞い戻って1年半ほど引きこもりになっていたわけです。ところが、この1年半の引きこもり期にさまざまな大発見をしたニュートンはそれらの発見を大学に持ち帰り、26歳でいきなり教授になりました。

歴史を振り返ると、突出した何らかの才能を発揮した人間……いわゆる「天才」と呼ばれる人間の多くが、学習面や社会適応性において極端な欠点や弱点を抱えていることがわかります。「天才」の多くは「平均的」な人間ではなく、「能力偏差が著しく偏っている」タイプの人間だと考えられます。

この種のタイプの人間は、現代においては幼少時に学校制度の中で「おちこぼれ」とか「なんとか障害児童」というレッテルを貼られ、長所を育む可能性を潰されてしまうわけです。

例えば日本では、数学ができない人間は東京大学には入れません。平均的に各教科の知識をまんべんなく身につけられない生徒は、いくら一つの教科に突出した才能を持っていても

センター試験で足切りされてしまいます。これでは良くないということで大学に一時導入された「一芸入試」も、結局は根付きませんでした。

しかし、今現在学校でおちこぼれになったり、いじめられたり、不登校になったりしている子供の何割かには、何らかの突出した才能があるはずです。もちろん、みんながみんなアインシュタインやエジソンに、つまり「天才」になれるはずはありませんが（社会的に認められるかどうかは、個人的資質にくわえて時代性や運も絡みます）、子供のタイプによっては学校に行かないほうが人生の可能性が広がるケースもあるのです。

ちなみに。

若くして大学教授になった後、ニュートンは残念なことにオカルトに走って錬金術や聖書の研究に没頭するようになってしまいました。アインシュタインも、若くて貧乏で無名だった時代には二つの相対性理論を書き上げるなどして巨大な業績をあげましたが、名声を得た後年は素粒子物理学者と論争したり統一理論の構築に失敗するなど、あまり華々しい成果をあげたとはいえません。エジソンも晩年は霊界通信機を作ろうとしていましたよね。

どうやら、天才型と呼ばれる人間が最高の能力を発揮できる時期は、学校なり社会なりか

ら異端として排除されている不遇の時代に限られているような気がします。一度社会のレールから外れてしまうことによって、常識やドグマに捕らわれない客観的・俯瞰的な広い視点を持つことが可能になります。また、不足や不自由こそが「このままではダメだ、何とかしなければ」という意欲を産みだすということもあるでしょう。

＊スティーブ・ジョブズの人生

アップル社を設立して世界にパーソナルコンピューターという新しい文化を広めたスティーブ・ジョブズもまた、大学を半年で中退してしまった不適応学生でした。

ジョブズは一度アップル社から追われた後、再び戻ってきて今度は携帯オーディオ機「ｉＰｏｄ」を製品化。ｉＰｏｄが新しかった点は、パソコンからオンラインで音楽をダウンロード購入し、その音楽をｉＰｏｄに入れて家の外に持ち出せるというシステムにありました。

最近ではｉＰｈｏｎｅを発売したりすぐに値下げしたりあわてて初期ユーザーにクーポン券を配ったりと、またまた世の中を騒がせていますね。残念ながら日本ではまだｉＰｈｏｎｅは使えそうにありませんが……。

アップル（パソコン）もｉＰｏｄもジョブズの独創的なアイデアから生まれた商品ですが、

ジョブズの個性的な想像力はいったいどこから生まれてきたのでしょう。
ジョブズは2005年6月にスタンフォード大学で卒業祝賀スピーチを行いました。このスピーチでジョブズは自らの波瀾万丈(はらんばんじょう)の人生について詳しく語ったのですが、重要なのはつぎのことです。

まず、ジョブズは学校に適応できませんでした。
大学に進学したけれども経済的な理由をきっかけにジョブズは大学に通う「意味」を見失い、苦悩しました。大学に通ってもわずかな家の蓄えを吸い上げられるばかりで、大学は自分に何の夢も与えてくれなかったし、人生を生きるための手助けにすらならなかったとジョブズは言います。
そこでジョブズは、カリキュラム教育制度を自ら放棄するために大学を半年で中退。以後は、自分が興味を持っている授業だけを聴講する聴講生になったのです。
自分が興味を持つ事柄については異常な集中力を発揮するが、興味がない事柄についてはまったく集中できない。すでにみてきたように、この種の「一点集中型」の生徒は画一的な集団カリキュラムを旨とする現代の学校制度には適応しづらいのです。が、こういうタイプ

の生徒こそ実は精神力を一点集中する能力の持ち主なのです。

つまりジョブズは、学問に対する興味を失ったわけではなく、ただ学校という制度に親を経済的苦境に追い込んでまで大金を支払って黙って通い続ける意味があるのかという問題、興味もない授業を受けて画一的な勉強をする必要があるのかという疑問に対して「そんな意味はない」という結論を自ら下したんですね。

大学を捨てたジョブズはその後、20歳でアップル社を設立します。大学のカリキュラム教育から逃れてすぐに、彼は「パーソナルコンピューターを作って売る」という夢を見つけたのです。

この時点では、世界にはパーソナルコンピューターなるものは影も形も存在していませんでした。今でこそパソコンのない生活は全く考えられない世の中になっていますが、発端は大学を中退して実家のガレージに引きこもっていたジョブズの妄想だったのです。

こうしてジョブズはシリコンバレーの若き英雄になったのですが、話はここでは終わりません。アップル社が巨大な企業に成長した結果、なんとジョブズは自分で作った会社から追い出されてしまったのです。30歳にしてジョブズはアップル社を解雇され、再び絶望の淵に沈みました。

ところがジョブズは、アップル社を解雇されたという痛手を再び自らの想像力を活性化させるためのエネルギー源に転換したのです。大学を中退して追い込まれた時期にパーソナルコンピューターの着想を得た体験と同じパターンを、30歳でもう一度やり直すことになりました。世界最大手のCGアニメーション制作会社であるピクサーは、アップルを追い出されていた時代にジョブズが設立した会社です。やっぱり、アニメが好きだったんですね（笑）。ジョブズは同時期にもう一つNeXTという企業も立ち上げますが、こちらは後にアップル社に買収されることになり、ジョブズはアップル社に堂々と凱旋（がいせん）復帰したのです。

というのは、ジョブズを追い出したアップル社は、経営難に陥ってジリ貧になっちゃったんですね。ジョブズの想像力を捨てたアップル社は、ただの中小パソコンメーカーの一つに成り下がってしまったのです。ビル・ゲイツ率いるWindowsマシンとシェアを奪い合いましたが、独自OSを搭載したアップル社の「マッキントッシュ」に勝ち目はありませんでした。ジョブズがいないので、会社としてどうすればいいかまったく方向性が見えなくなっていたのです。こりゃもうダメだ我々が間違っていたということで、アップル社はジョブズを呼び戻したのです。

戻ってきたジョブズはモニタ一体型パソコン「iMac」を皮切りに、液晶搭載型の新型

ｉＭａｃ、そして「ｉＰｏｄ」といった独創的なアイデアを次々と実現しました。
アップル社はモノを作る企業ですが、作るといってもそもそも最初にアイデアがなければ何を作っていいのかもわからないのです。「作りたいもの」「売りたいもの」がなければ、何もはじまらない。
ジョブズは、一度アップルを追い出されて挫折した経験によって、20歳の頃の自分を取り戻すことができた、そしてそれが後のさらなる成功の原動力となった、と述懐しています。
アインシュタインやニュートンなど、多くの天才型人間は一度社会的に大きな成功を収めてしまうと後はおとなしく社会に適応して創造性を枯渇させていく傾向があります。ジョブズもアップルを一度追い出されていなければ、クリエイターから「企業家」に転身していたかもしれません。

＊「今日が人生の最後の日だと思って生きる」

アップルの産みだしたパソコンがどれだけ世界を変革したかについてはもはや言うまでもありませんが、ｉＰｏｄもまた大きな発明です。ｉＰｏｄは音楽のダウンロード販売という従来はビジネスにならないと言われていた市場を開拓し、成功したのです。

音楽市場は、パソコンの発展によって「音楽データをインターネットでバラまかれる」という危機に陥りました。はたしてそれが本当に危機なのかどうかはさておき、音楽業界側はパソコンとインターネットを「CDの売り上げ減の元凶だ」と考えて敵視したわけです。その結果、パソコンで再生できないCD（のようなもの）が次々と発売され、すでにパソコンなしでは音楽を聴くことができなくなっていた多くの音楽ユーザーに敬遠され、さらに売り上げを落とすという悪循環に陥りました。

ジョブズは、発想がまったく逆だったのです。

今まで通りにCDを売るためにパソコンと音楽を切り離そうというのではなく、CDをすっ飛ばしてネットから個人のパソコンに直接有料音楽ファイルをデータとして売ってしまえばいいではないか、と考えたのです。

街のCDショップまででかけなくても、自宅のパソコンでマウスをクリックするだけで欲しい音楽が手に入る。

これが、世界史の中でいかに革命的なことだったか。

「在庫」と「顧客」の間に挟まっている「流通」を省いたのです。

こういうシステムは音楽ファンなら誰もが一度は妄想したでしょうが（僕も妄想していいま

した）、みんな「実現できるわけがない」と思っていました。著作権保護にうるさい音楽業界が、パソコンで音楽ファイルをダウンロードするビジネスモデルなんかに乗るわけがない、と。

しかしジョブズは自分で音楽業界の四方八方を説得してまわり、妄想にすぎないと思われていたｉＰｏｄシステムを現実化してしまったのです。

このような常識破りのジョブズの発想力は、どこから出てくるかといいますと、本人のスピーチによれば、

「Stay hungry, stay foolish.」（ハングリーであれ、馬鹿であれ）

という座右の銘を若い頃から自らの指針としてきたためだそうです。

「馬鹿であれ」というフレーズは、あのアントニオ猪木も連発していたフレーズですが、実はジョブズもまったく同じなんですね。既存の社会常識の枠から外れることで、精神の自由と客観的な視点を手に入れられる。そこから独創的なアイデアが産みだされるのです。

また、もう一つジョブズには、

「今日が人生の最後の日だと思って生きる」

というモットーがあるそうです。

さまざまなしがらみや苦悩や恐怖は、最後には死によって必ず終わる。その「事実」を、普通の人間は認識したがりません。死から目を逸らすのです。その囚われがドグマとなって、人の精神を縛る。なのでジョブズは「今日で僕は死ぬが、それでは今日やる予定の事柄を自分は本当にやりたいと思っているのだろうか」と毎朝鏡に向かって自問自答するそうです。毎日毎朝、鏡との対話を通して「死」に直面するという形で、一度外界から自分の精神を切り離してリセットしているわけです。

ハングリーであること、死を覚悟すること、そのような態度を僕は「喪(も)の精神（喪失の精神）」と呼んでいます。自らの精神にこのような負荷をかけることで、自己の内面から想像力や創造性が湧き上がってくるわけです。ジョブズは、大学を中退してパーソナルコンピューターという妄想＝夢を発見した若い頃の経験を、このようにして定式化して活かしているのです。

まあ、アントニオ猪木と同様、ジョブズもいつまたアップル社を追われるかわからない人なんですけどね。何しろ、常人とはかなり違った感性の持ち主なのですから。

＊孤独、挫折がエネルギーに

１章で少し「出家」について触れましたが、人間には本来、孤独な時期、内省的に暮らす時期が必要なのではないでしょうか。

もちろん、「誰もが一生涯孤独に暮らすべきだ」というわけではありません。しかし、特に若い時期に内省的な時間を持つということは、精神の形成や知性の向上などにとって必要なはずです。

筋肉や運動神経は、それなりのフィジカルトレーニングを行わなければ発達しません。それと同じで、精神や知性といったものも、つきつめて考えれば脳神経系をトレーニングしなければ発達しないはずです。運動しなければ筋肉が衰えるのと同じで、頭を使わなければ精神が衰えるのです。

最近、任天堂の携帯ゲーム機「ＤＳ」では「脳を鍛える」という主旨の脳トレーニングソフトが流行しています。現代日本は、従来の肉体健康ブームのみならず、一種の「脳の健康ブーム」「精神の健康ブーム」の時代だと言えます。

もちろん精神は大人になってからでも鍛えることで強化・発達させられますが、運動と同じで成長期のうちに徹底的に鍛えて基礎を作っておけば後々になってそれが生きてきます。

そもそも、学校や教育には、吸収性が高い若年のうちに知性の基礎トレーニングを積ませる

という目的もあったはずです。

しかし現在の学校は、カリキュラム主義・受験戦争主義のために、生徒の知性を鍛えるよりもまず定められたカリキュラムを消化して競争に勝ち抜ける資本主義社会型の労働者を作りだすことに特化しています。

その結果、学校はごく一部のものにとっては受験勉強のための闘技場となり、それ以外の子供にとっては確固たる将来が見えてこない刹那(せつな)的なレジャーランドと化してしまったわけです。

このような状態では、いくら口先だけで「ゆとり教育」を唱えてみても、ただ生徒の学力が落ちるだけ。学校本来の機能を回復させるのは困難でしょう。

本来、学校とは精神を鍛えるための修練の場であったはずです。

'70年代以降、筑波大学（旧・東京教育大学）をはじめ、多くの大学が都心から離れていきました。これにはもちろん都心での土地価格の高騰という経済的理由もあるのですが、大学生を田舎に隔離して都会のレジャーランド暮らしから引き離したいという大学当局の教育者としての本能も理由としてあげられるでしょう。

大学は、今でこそレジャーランドと化していますが、元々は修道院の延長線上にあるよう

な「出家の場」だったわけですから。
勉強や人間的成長と「孤独」とは、相反するものどころか、切っても切り離せない深い関係にあると思います。
「孤独」は、人間にとってもっとも耐えがたい苦痛の一つです。
人間はそもそも、独りで生きていけるような生物ではないのです。群れを形成して生きていく社会的生物なのです。だからこそ言語が高度に発達しているわけです。
しかし、筋肉トレーニングの基本が「筋肉をわざと破壊して、超回復させる」という逆説的な方法論であるのと同じように、精神のトレーニングにおいても「精神をわざと孤独や苦境に追い込んで、超回復させる」という方法論が有効なのです。
他者と切り離された孤独は、人間の想像力を発達させます。想像力とは、まあ妄想力と呼んでもいいのですが、つまりは目の前の現実とは異なる「世界」を脳内に産出する能力です。常に他人との関係性の中だけで生きていると、なかなか想像力は発達しません。他人から距離を取って一時的な「出家」状態に精神を追い込むことで、想像力は発達するのです。創造性とかアイデアといったものは、つまるところ「世の常識に囚われていない、新しい発想」であるからです。

そのような発想を得るには、想像力を養う訓練が必要です。想像力を養うためには、外界との接触を一時的に断つのが一番効率的なのです。

（もちろん、他人との対話の中から新たな発想が生まれるという現場を僕たちは経験上よく知っているわけですが、ここで語っていることは想像力の「基礎力」を養う段階のお話です。他人との対話から新たなアイデアを生みだすには、お互いがお互いのベースとなるアイデアの種をあらかじめ持っていなければなりません。お互いに「ゆうべのドラマ、面白かったね」とあたりさわりのないことを言い合っているだけでは、新たなアイデアは生まれないのです）

映画『キャスト・アウェイ』（２０００）では、無人島に漂流したトム・ハンクスが孤独に耐えるためバレーボールに顔を描いて、「友達」として語り合います。現実世界における「不足」「欠如」が、想像力を発達させたのです。

人間は一人では生きられない動物ですから、常に「孤独」イコール「悪」という強迫観念に取り憑かれています。

しかし、「孤独」には「精神を発達させる」という効用もあるのではないでしょうか。

若き日のエジソンやアインシュタインなど、歴史に天才・異才として名を残している人の

多くが、現代の学校であればＬＤだのＡＤＨＤだのといった「病名」を与えられるタイプの子供であったことはすでに書きましたが、彼らは実は周囲に大勢の人間がいようがいまいが自分の想像力の世界に集中することができるタイプだったのです。どちらかというと、彼らのほうだって周囲の子供たちや教師が邪魔だったに違いありません。深い思索、閃くような直観は、孤独な時間にこそ降ってくるものなのです。

全ての子供を一律に学校の教室へ押し込める現代の学校制度は、子供の想像力の発育を阻害しているような気がしてなりません。なにしろ、授業中は自由に空想することが許されないのです。「ボーッとしている」と教師に注意されて、「何とか障害」というレッテルを貼られかねません。

＊大人になってからの引きこもり

前述のジョブズの人生は、三度の大きな「不適応時期」に見舞われています。このうち、三度目は社会的な不適応の苦難ではなく、病気（ガン）ですが、一度目は大学を3カ月で中退した時で、二度目は自ら設立したアップル社を解雇された時ですね。

普通の人間なら、アップル社を解雇されたという挫折によって一生立ち直れなくなってし

能なのです。

僕は10代の時に高校に行かなくなって、半年ほど今でいうところの「引きこもり」を経験しました。で、その時に、周囲の大人から「若いうちに一度こういう挫折を経験しておくと、後々大きな挫折がないから、かえって良かった」なんて言われたりもしたのですが、これはただの気休めといいますか大嘘です。

学校を中退したからといって、その後の人生で二度と同じような苦境がやってこないということはありません。

むしろ、大人になってからのほうが、決定的な苦難に直面する危機が多くなります。子供時代はまだ親が住居を提供してくれたり食費を出してくれたりしますが、大人になるとそうもいかなくなっていきます。学校でのいじめは、学校をやめたり移ったりすればたいてい解決します。しかし社会・職場でのいじめは、生活費を稼がなければいけないという前提がある分、より厳しいのです。

気の弱い社員をねちねちといじめ続ける社長。

妬みややっかみの心から、仕事の足を引っ張る同僚。
「賃金の不払い」や「仕事の停止」を盾に、自分にへつらわない社員やアルバイトをシメるプチ権力者。
社会には、そんな事例がゴロゴロしています。
なので、学校でいじめられるタイプの人は、受験勉強を独習したほうが効率がよいだけでなく、仕事についても他人や組織とあまり接触しないで済ませられる職種のほうが向いているかもしれません。
学者・研究者はもちろん、作家やライター、プログラマーといったキーボード仕事は、そのような性格の人には最適でしょう。
なにしろ学習障害系に分類される性格の人は、自分が興味を持たない事柄についてはまったく注意力散漫なのですが、いざ自分が興味を持っていることにのめりこむと時間が経つのも忘れて黙々と一つの作業に集中することができます。
現代の学校制度が生産しているタイプのサラリーマン型人間には、さまざまな状況に的確に応じられる臨機応変さとオールラウンド性、そして円滑な人間関係を構築する能力を求められているのですが、学校が嫌うタイプの人間……一つの状況にのみ集中し続ける頑固さ、

一点突破型の知識や技能、人間関係よりも自分の仕事にこだわりを持つタイプの人は、ADHDだのLDだのと言われていますが、つまりはある一つの能力に特化したタイプの人間なのです。

ある能力だけが極端に発達しているから、他の能力（例えば運動とか、語学とか、数学とか）がおざなりになっているだけで、学校では受け入れられなくとも現実の社会にはそのような職人タイプを求める市場がたくさんあるわけです。

たとえば、じっと机の前に座って文字や絵を描き続けなければならない物書き、マンガ家や、同じくじっと机の前に座ってキーボードを叩き続けるプログラマー系、研究室に籠もらなければならない学者、あるいは辛くてなかなか続けられないベルトコンベア方式系の単純労働作業を得意とする人もいるでしょう。

10代での引きこもりはリカバー可能だが、20代30代での引きこもりはリカバーできない、と考える人も多いと思います。しかし、ジョブズの例を見てもわかるように、一見引きこもっているだけに見える人も実は「精神の回復」をはかって休憩し、傷ついた精神を再び強力に再生しようとしている過程の途中なのかもしれません。

＊丘の上の愚者

学校に行かなければ不登校、働かなければニートとレッテルを貼って「社会不安要員」にカテゴライズしてしまう風潮は、現代の資本主義社会がとにかく目の前の生産性効率にのみ気を奪われていて、長いスパンで人物やものごとを観ることができなくなっているのが原因ではないでしょうか。

最近の日本では、「太公望は若者だった」という新解釈設定を施した小説が流行っていますが、これはうがった見方をすれば「80歳のニート老人・太公望が中国史上最高峰の大軍師だった」という昔の中国の価値観が、現代の資本主義社会的な価値観にはそぐわないからなのでしょう。

しかし太公望は中国で最初に「兵法」という技術体系を考案した人です。彼の「兵法」という概念はやはり長年にわたる隠遁生活の中で産みだされた独自のアイデアだったのではないかと思うのです。

まあさすがに「太公望は80歳までニート暮らしだった」という逸話はオーバーだと思いますが、一見すると世間から外れている「丘の上の愚者」が実は賢者だったという逸話は、中国のみならず世界各地で語り継がれていますよね。昔の人は、その種のアウトサイダーが独

自の視点や思想体系を持っていることを薄々感じており、畏怖と尊敬の心を持っていたわけです。

ブッダは世を捨てた出家者ですし、イエスもそうですよね。

それが、今では「ニート」「引きこもり」「不登校」ですから、実に味気ない。

もちろん、「本当にただ怠けている人」だって中にはいるでしょうが（筆者の場合はただ怠けていただけのような気がしますが、それでも引きこもり期に得た「偏った」知識や着想が、後々の仕事の役に立った気がします）、全てをいっしょくたにして「怠け者」あるいは「心の病」として処理してしまうのは社会のためにも良くないことではないでしょうか。

＊学校に行かないほうが勉強がはかどるタイプ

太公望やジョブズでは話のスケールが大きすぎて我々には関係なさそうだと思われるかもしれません。

天才偉人のケースは、僕たち一般の人間の人生とはまったく関わりがなく、単に彼らが特殊な人間だったのだ、という考え方もあるかもしれません。やっぱり、普通の凡人は真面目に学校に通わなければならない、それ以外に救いはないのだ、と。

なので、ここからはもう少し身の丈に合ったスケールの話に戻りましょう。
この項目では僕自身の経験談が例として出てきます。これは「一般人のケース」の例としてちょうど身の丈に合っているのが僕だからでして、決して自分を太公望になぞらえているわけではないので、そこだけはご理解ください（汗）。
さて、「学校に行かないほうが学歴が高くなる」「学校に行かないほうが能力が伸びる」タイプの若者という層は、一定数ですが確実に存在します。
もちろん、彼ら全員が世間でいうところのいわゆる天才だというわけではありません。かならずしも所得が平均より多くなるというわけでもない。そのあたりは個人によって当然まちまちです。しかし、彼らは総じて「学校へ行かないほうがより自己実現的な人生に近づけるタイプ」の人間なのです。
それに、実は「不登校」はイコール「学歴社会からのドロップアウト」というわけではありません。高認さえパスすれば、中卒でも大学に進学できます。なので、人によっては戦略的に高校をスルーして自宅学習から大学へ進むというコースを考えたほうが「効率」が良いこともあります（もちろん、逆の場合も多々ありますが）。
学校に行かないほうが受験勉強しやすいタイプの生徒とは、どんな生徒かと言いますと、

これは主に僕自身をモデルケースとして考えているのですが、

・学校に行くといじめられる
・学校に行くと精神衛生が悪化する
・学校に行くとヘトヘトに疲れ切ってしまい、家で勉強できなくなる
・お仕着せの授業はおとなしく聞いていられないが、自分のやりたいことならいくらでも集中してできる
・学校に行くと異性が気になって、勉強どころではなくなる
・朝早く起きて学校へ行くというルーチン作業じたいが苦痛で仕方がない
・粗暴な教師・陰湿な教師とつきあうのが苦痛で仕方がない
・学校に行く以外のことで、とにかく一心不乱にやりたいことがある

このようなタイプの生徒でしょうか。
ＡＤＨＤやＬＤの診断基準と一部（だいぶ?）被っているような気がしますね。僕が学校に通っていた頃はまだそういう概念が存在しませんでしたから、単に「問題児」とか「おち

こぼれ」と呼ばれていましたが。
こういう生徒は、学校そのものが過大なストレスになって本来あるはずの能力が伸びないタイプなのです。
僕個人の経験で言えば、高校に通っていた時には偏差値が40くらいだったのが、高校を中退するに至った数カ月の「引きこもり」期のあと、１年間の自宅学習で偏差値が70くらいに上がりました。
もちろん「学校に行かないほうが良い大学に行ける」と気づいたから自らの意志で戦略的に不登校・中退のコースを選んだわけじゃなくて、単に心の底から学校に行きたくないので行かなかっただけで、気がついたら結果的にそうなっていたということです。

＊あのまま学校に行っていたら……

地元関西の高校を中退する時、当時の担任に「君は頑張れば立命館大学に入れるかもしれないのに中退するのは惜しい」なんて言われましたが、僕にしてみたら自分は学校なんてイヤな場所にさえ行かなければもっと高い点数が取れるはずだと信じていたので「その程度の生徒だと思われていたのか」と失望しました（立命館の人、すいません）。それで、断固と

して中退することを決意しました（言うまでもなく、その後が大変でしたが……）。結局担任教師の言葉を無視して中退した僕は17歳で当時の大検（今の高認）に合格し、18歳で早稲田大学の一文（もうありませんけどね。学校なんてしょせんそんなもんです）に合格したのでした。

もし高校に通っていたら現役合格という計算になりますが、断言してもいいですがもしあのまま高校に通い続けていたら早稲田どころか大学進学そのものが不可能でした。たぶんストレスのあまり自殺するか、一本切れて学校で暴れるかどっちかだったでしょう。

もっとも日本の場合、アメリカのような銃社会ではありませんから暴れたくても暴れられない。結局は前者……つまり自殺の道を選んだでしょうね。実際、不登校・引きこもりになる前後には「もうダメだ、死ぬ、死ぬ」と呻いてばかりいました。

まあ、その後また大学で不適応を起こして途中で人間科学部人間基礎科学科というところに移って卒業に6年もかかってしまったり、大学院の内部面接で「この学部は理念は美しいが、入ってみたらまったく内容がない。わざわざ転部してきたのに欺された気分だ。まじめにやるつもりがあるのか」と教授たちに説教してしまって大学院の内定を取り消されたりした（うそかまことか、早稲田大学の長い歴史の中で、大学院の内部面接で内定を取り消され

た学生は僕一人しかいないそうです）のですが、それはまた別の話です。
ちなみに人間基礎科学科も僕が批判していたとおりのところだったので、その後すぐに潰れました（笑）。いや未だに当時借りた奨学金やら借金やらの返済に苦しんでいる僕としては、笑ってる場合じゃないですね。
ことほどさように学校に適応できない僕ですが、逆に考えれば、僕ほど学校が苦手な人間でも（実は僕は幼稚園時代から不登校でした。とにかく人間がたくさんいる場所に混じっていることが耐えられないのです）、大学ならばなんとか卒業できるらしいです。
もっとも、「人がたくさんいる場所に混じってじっとしてることができない」わけですから、当然ながらサラリーマン勤めも無理でした。職場の机に座っているだけで、気分が悪くなります。で、だからしかたなくいつの間にか物書きになってしまったわけで（いろいろな職を転々としましたが、他に何ひとつ満足にできる仕事がなかったんです）、こうなるとわざわざ奨学金を借りてまで大学に行った意味ってあるのかなぁと疑問を感じないではありません。
今では、本当は僕はジョブズのようにさっさと大学を中退して自分の「夢」を見つけるべきだったのではないか、自分はせっかく高校を中退してアウトサイダー（単独者）としての

独自の視点を獲得できたのに、大学に入ることで再び資本主義社会のレールの上に戻ってしまったのではないか、大学時代は完全な無駄だったのではないかとむしろ反省しているくらいです。

というのも、今の僕の仕事を支えている知識や視点はすべて、高校に行かなかった「引きこもり時代」に培(つちか)ったものばかりだからです。大学では恩師や友達が何人かできたということはありましたが、どういうわけか人間関係以外のことはほとんど何も学べませんでした。

ただ、世の人々は学歴信仰に染まっていますから、「高校中退＝バカ」とか「大卒＝偉い」とか、そういう本当につまらない価値観で人間を平気で判断するじゃないですか。いくら僕が部屋に籠もって哲学書を読みあさっていても、そんなことは関係ないわけですよ。肩書き、学歴で差別される。だから、仕事を求めているうちに結局「大学卒の肩書きを持っておいたほうが結果的にはいいのかな」と気づいて大学に入っちゃったわけですね。

実際、高校をただ中退したくらいのことで、周囲からは「お前はバカだ」「おちこぼれだ」「もう人生終わりだ」と総スカンを食らって友達がいなくなったり親戚一同から見放されたりと大変でしたが、東京のちょっと有名な大学に受かると今度は掌(てのひら)を返してくるわけですよ。

もちろん、僕が大学で何を学ぼうとしているのかとか、そんなことは何も知らないし知るつもりもないわけです。ただ大学名に恐れ入るわけです。僕は何をしていようが僕であって何も変わっていないのに、学歴社会に乗るかそれるかだけで、１８０度評価が変わる。
本当にバカバカしいことです。怒るのも調子に乗るのも、空しいことです。
同じ思いは、最初に就職した会社をやめた時にも味わいました。会社を退社してフリーターになった時点で、またまた親戚家族一同が掌返し。なので、僕がいつの間にか作家になっていることは地元の人間にはいっさい教えていません。

＊引きこもり期のノートが本に

’06年に僕が講談社から上梓した、笑える（?）けど真面目な哲学入門書『喪男（モダン）の哲学史』は、実は僕が高校に行かずに自宅で自習していた時に自分専用の教科書として自作した「マンガ倫理入門」というノートが元ネタなのです。
これは、「モテなかったり貧乏だったり仕事がなかったりして苦しんだ男が哲学を生み出してきた」というテーマの哲学史解説書でした。僕は20年以上も前に、こんなヘンな視点で哲学を語っていたのです（当時は独り言でしたが）。そもそも哲学なんて高校じゃ教えてく

れないですからね。高校に行かなかったので時間が余って、そんなヘンな（でも本当に興味がある）知識を吸収していたわけです。しかし、20年の間によけいな知恵をつけてしまったせいで、本の内容がオリジナルのノートよりもつまらなくなったような気もします。

ともかく学校に行かなければ、1日24時間を自分のために使えますから、アルバイトや何やらの時間をさしひいてもかなりの自由時間が得られますよね。

僕の場合、1年間にわたって、1日6〜7時間ほど部屋に閉じこもって自習をしていました。受験先は早稲田の文系なので、英語・国語の2教科だけやればいい。あとは小論文。当時はセンター試験なんていう酷（ひど）い制度はなかった。

で、英語の教科書なんて講談社文庫の『ビートルズで英語を覚えよう』とかそんなんですよ。当時の僕はなぜかビートルズに夢中だったので、勉強中はずっと「アビー・ロード」のテープをエンドレスで流しっぱなしでした。ジョン・レノンが書いている歌詞であれば、興味があるのでなんでも覚えてしまうわけですよ。今となっては英語が勉強したかったのかビートルズを歌いたかったのか判然としませんが、こういう感じで好きなことだけやっていればいくらでも学力が伸びたわけです。「ハッピネス・イズ・ア・ワームガン」とか、全然受験に役立たない英文もたくさん覚えましたが。

小論文に関しては、夜中に趣味で評論や小説を書いているうちに勝手に上達しました。そういえば倫理のマンガ教科書を作ったのもただの趣味です。

実は僕は子供の頃からマンガを描くのは好きだったのですが文章を書くのが極端に苦手で、中学時代までは読書感想文すら満足に提出できない生徒でした。『坊っちゃん』の読書感想文なんて、何も思いつかないので小説本の解説を適当に写したりして、実に酷い生徒でした。作文能力に問題あり、と判定されそうな子供だったのです。

ところが、引きこもり期に、まずやることがないから本を大量に乱読することになりました。やがては本を買うお小遣いも貰えなくなったので、しかたなく自分でノートに文章を書くようになります。世から逸れて学校に行かない日々の暮らしに鬱々（うつうつ）としていますから、感情が高ぶっていていくらでも筆が走ります。不満をペンにぶつけて昇華したわけです。いろんな本を乱読していますから、自然と文章力もついていきます。そうしているうちに、ほんの数カ月でいくらでも文章が書けるようになっていました。目的があったわけではなく、ただ他にやれることが何もなかったのです。

気がつくと、いつの間にか文章能力が養われていて、後は英語だけできれば大学に進学できそうだ、ということがわかりました。なので、大学に行くことにしたわけです。

しょうね。

＊自我の崩壊

今から振り返ると、なぜ僕があの時期に必死になって哲学や現代思想、精神分析などに没頭したのかといえば、やはり学歴社会のレールから外れて精神が不安定になっていたからでしょうね。

たとえばキリスト教徒に生まれた若者が無神論者に転向したら、やっぱり不安になるわけですよ。周囲からは「このサタンめ、異端者め」と攻撃されますしね。それも親とか友達とか、親しかった人々から罵られるわけですから、これはこたえますよ。以後も、家族親戚とはなんとも荒(すさ)んだ関係のままです。

そういうわけで、僕は不登校というだけで家族から精神障害者扱いを受けまして、部屋に隔離されて半ば軟禁されるという状態に。「家の恥」として、世間から半ば隠されたわけです。

このような形で周囲から隔絶して引きこもりになると、自我が崩壊するわけです。自我なんてものは、結局は社会や他人との関係性のなかでかろうじて成立している脆弱(ぜいじゃく)なものですから、他者がいないと自我もない。そこで、神への信仰を見失った近代人が必死で新しい

世界観を構築しようとしてあがいたのと同じように、僕もいろいろな書物をあさって新しい自我を構築しなければならなかったのです。

たとえば近代哲学の祖デカルトは、神にかわって「自我」＝「自分」を世界観の中心に据えることによって近代の扉を開いたわけです。

で、調べれば調べるほど、思想や哲学というものは、（理由はことなれど）僕と同じように自我の崩壊に直面して苦しんでいる人間が考え出さざるを得なかった妄想、自分の世界を崩壊させないために作りだしていた物語の体系なのではないか、ということに気づいたわけです。そのような危機に陥っていない人間には、そもそも新しい世界観など不必要です。

それぞれの時代で、その時代の人々が信じる世界観に染まれなかった人間が、新しい世界観を作る。その世界観が、時にはたまたま次の世界を動かす力になる。それが哲学思想の歴史であり、人類そのものの歴史なのではないか……とずいぶん大袈裟なことに気づいたわけですね。

プラトンは師ソクラテスが死刑になった苦しみからイデア論を創りあげましたし、パウロは師イエスが十字架にかかったショックから再生の宗教・キリスト教を創りあげました。デカルトは世界のすべてを疑って「自我」に辿り着きましたし、フロイトは近代人の偽善と盲

目的な破滅への意志に絶望して自我理論を構築したわけです。

とまあ、そういうやたらとスケールがでかい歴史的な視点をむりやり獲得することによって、僕は「高校を中退して家族から精神異常者扱いされて部屋に軟禁状態、引きこもりになってしまった自分」という絶望的な状況を少しでも相対化しようとしていたのかもしれません。

だがまあ、現実逃避が目的だったとしても、結果的にはいかにもアウトサイダー経験者らしい、やたらと広い視野を獲得できたのではないかと思います。

最終的にはショーペンハウアーの「読書とは、他人にものを考えてもらうことである」というアフォリズムに出会って、その種の乱読はやめてしまったのですが、僕の発想のしかたとか視点の持ち方とかは、すべてこの数カ月の引きこもりの時代に獲得されたものだと思います。つまり、引きこもりが個性になったということでしょうか。

結局、人間はずぼらな生き物で（僕だけかもしれませんが）、本当に困らないと真剣にならない、という欠点があります。学校に行かずに引きこもってしまったという危機が、僕の脳を活性化させたのかもしれません。悩めば悩むほど、頭は鍛えられるのです。ただし、身体のほうはすっかり衰弱してしまい、栄養失調で倒れてしまいましたが。

ただ、本物の引きこもり生活は実際には数カ月で終わって、すぐに大検受験へとシフトをチェンジしました。やはり、完全に学歴社会からドロップアウトするのが恐ろしかったんですね。実際、いくら探してもほとんど仕事らしい仕事なんてありませんでしたから。まあ、学校という制度は実は何度ドロップアウトしても戻れるわけです。意外とフレキシブルなのです。

学校なんてものは、ただの道具です。行きたければ行けばいいいし、行きたくなければやめればいいいし、また行きたくなったらまた行けばいいいんですよ。人間が学校のためにあるのではなくて、学校が人間のためにあるのです。

ただし、僕の思想は引きこもり時代に完成されていて、大学では特に何も新しいことは学んでいません。「理系の知識がまるでない人間が哲学だの世界だのを偉そうに語る資格はない」「すなわち文系の知識だけで世界を語る現代思想家のほとんどは無意味かつ有害な存在だ」という当然の事実に気づいたくらいでしょうか。

しかし、残念ながら理系の知識を学べるほど僕は利口でもなくお金もないので、自分の世界観を完成させるという宿題は未だにそのままになっているわけです。本質的に怠け者であるという点は子供の頃から不変のようです。

＊学校がイヤでイヤで仕方ない

翻（ひるがえ）って中学高校時代の僕を思いだすと、まず読書なんてする余裕がまったくありませんでした。一日中授業と部活動で学校に縛り付けられていますし、神経をすり減らして帰宅した後はベッドの上に倒れて胃の痛みと「明日も学校に行かなくてはいけない」という憂鬱（ゆううつ）な気分に沈んでいるのがやっとです。

塾に通わされていた時期は、もう自由時間すらまったく持つことができなかった。やりたくない宿題も大量にありますし、趣味的な読書や作文なんてとてもじゃないですが不可能でした。高校のテストでは赤点ばかり取っていましたが、それもそのはず、「学校に通うのが精一杯で受験勉強どころじゃない」という本末転倒な有様だったのです。

もちろん、いじめにもあっていましたしね。こっちもまだ若くて元気なので、仕返しだとばかりにいじめっ子のリーダー格が一人になったところを待ち伏せしてブン殴ると、今度は内申書に悪く書かれる……。

そういうわけで中学高校時代は学校がイヤでイヤで仕方がなく、最後のほうはこの苦しみから逃れるために死ぬことばかり考えていたわけですが、いざ高校を中退してみるとそうい

うストレスがいっさい消え去ったわけです。退学届けを１通出してやめればすむ程度のことに、どうして生きるの死ぬのと深刻に悩んでいたのか、自分でも不思議に感じました（まあそういう生真面目で融通のきかないタイプの子供がよくいじめられるわけですが）。で、よくよく考えてみると、僕は「学校教」とでもいうべき宗教が信じられている現代日本という社会にたまたま生きているので、「学校に行かないなんて、悪魔を崇拝して神を冒涜する行為だ」という信仰心を幼い頃から親や教師たちに刷り込まれていただけだったと気づいたのです。

ですから、不登校から中退へと学校信仰の場から外れていった時期には、周囲から「お前はもうダメだ」「おちこぼれだ」「人生、終わりだ」みたいな「道徳的非難」を受けたり、「お前は頭がおかしくなっている」と言われて精神病院に連れて行かれたり、妙な宗教団体に洗脳されそうになったり、と様々なおかしな反応を起こされて「自分は本当におかしいのではないか」と悩んだりしたんですが、本当におかしいのは「学校に行かない子供は悪魔（あるいは精神病とか怠け心とか）に憑かれている」みたいなことを本気で考えて奇っ怪至極な行動に走る周囲の大人たちのほうだったわけです。

学校に行かないことによって自己実現に近づけるタイプの子供だって一定数存在するはず

なのに、社会はそれを認めようとせず病気とか道徳的怠惰というレッテルを貼って異端宣告するわけですよ。

＊物書きの仕事が天職

そんなわけで、高校中退者の僕が上京して早稲田大学を受験すると漏らした時には、周囲の大人たちから大反対の声があがりました。「ついに本当におかしくなった」「現実をよく見ろ、大人になれ」「夢を見るな」といった具合ですよ。

うちの家系は頭が悪い人が多かったのか先祖代々の貧乏が悪いのか、とにかく大学に進学した人間が親戚中見渡してもほとんどいないので（都会では考えられない話ですが、地方にはそういう一族がたくさんいるんです）、ましてやそんな頭の悪い一族の中でも高校にすらまともに行けなかった一番バカな奴が東京の有名大学に入るなんて絶対にありえないと決めつけられたわけです。

そんなわけで「立派」な大人たちから「道徳的」な「お説教」をたくさん受けましたが、彼らはただ「学校に行かない人間はおちこぼれである」という自分の信仰心を守るために闘っていたわけです。10代の子供に向かって。大人げないですよね。その頃にはもう僕は「お

かしいのは学校教に洗脳されている大人たちのほうだ」と気づいていましたから、無視していましたが。

僕が合格してからも、なおも入学を邪魔しようとする大人までいました。ろくに高校にも行かずに、ヒョッと裏口から有名大学に入るような奴はけしからん、というわけです。別に裏口から入ったんじゃなくて、普通に入学試験を受けて合格点を取って合格しただけなんですけどね。

現代は学校信仰の時代だという僕の直観は、そういう個人的な体験から得られたものなのです。もっとも最近は、さすがにこれほど酷くはないと思いますが。当時は受験戦争バブルの絶頂期でしたからね。

学校に行ってないからとか中退したからって周囲にあれこれ言われている人は、聞き流せばいいんですよ。それよりも問題は、自分は本当は何をして生きていきたいのかという夢を早く見つけることです。あとは、生活費の問題ですね（汗）。夢だけじゃ生活できないという厳然たる事実があるわけで……僕の場合、自分にでも「やれる」仕事を見つけるまでが悪夢そのものでした。

今このように必死で原稿を書いているのは、早くお金を稼いで返すべきところに返さない

と居心地が悪いし恐ろしくてたまらないというわりと切実な理由もあります。
どうやら僕には物書きの仕事しか満足にできないな、と気づいたのは、かまぼこ工場でアルバイトしていた頃でした。魚のすり身を運んでベルトコンベアに乗せて攪拌機（正確な名称はわかりません）に入れていくわけですが、攪拌機って巨大な扇風機みたいなものなので、ぼーっとしてると手の指を持って行かれるわけですよ。スパンと。持って行かれたらもう次の瞬間にはミンチになっちゃうから、再生できません。実際、隣で働いている上司のおじさんの手の指が足りないんです。で、
「それ、仕事中に……？」
と質問してみたら、
「ああ、そう。まあ、注意していれば滅多にないことだから気にするな」
と陽気に励まされました……が、次の瞬間には僕は土下座して、
「今は物書きの仕事がありませんが、僕はキーボードで文字を打つのが本職なので、指が飛ぶ危険のある仕事だけは勘弁してください」
と謝って泣いて逃げました。危機に陥ってはじめて、自分のやりたいことがわかった、という一幕でした。どうも僕は追いつめられないと目が醒めないタイプらしいです。決してか

まぼこ作りがイヤだったわけじゃないんですよ。魚肉ソーセージは今でも大好物です。お金がないときにステーキ代わりに焼いて食えて、しかも生でもうまい。実に助かります。

＊引きこもりが日本を支える

僕自身は未だにたいしたコンテンツを造れていないので声を大にして言うのははばかられるのですが、「引きこもりの力」というのは確実にあるわけです。人生に引きこもり時期を設けることのメリットは、

・学校や職場に通い続ければ死んでしまう人も、緊急待避することで生き延びられる
・同様に、学校や職場に追いつめられて犯罪者になるルートも回避できる
・ストレスで傷ついた精神が回復あるいは超回復する
・世間から隔絶されるので独自の視点やアイデアを思いつきやすくなる
・乱読や独学で個性的な知識体系を得ることができる
・引きこもることによる不足感・焦燥感が、その後の人生における行動力・原動力となる
・一時的に空白状態になることで、自分が本当にやりたいことが見えてくるかもしれない

デメリットは「世間の目が冷たくなる・友達が減る」「生活費がなくなる」「借金が増える」などで、後者の二つは深刻な問題ですから、ハワード・ヒューズのようなよほどの資産家でない限り生涯自分が建てたビルから一歩も出ないなんていう「一生引きこもり」は難しいでしょう。資本主義社会では、資本家でない人は生活費を稼がなければ生きられません。

しかし、引きこもり系の人に向いている職業というものが、世の中には実はたくさんあります。ちょっと考えただけでも、

・マンガ家
・作家
・ライター
・アニメーター
・プログラマー
・エンジニア
・学者

・研究者
・ＳＯＨＯ
・さまざまな分野の職人

などなど。つまり、職場に出ることなく、あるいは職場には出るとしてもともかく自分の世界にこもって一心不乱に一つの専門作業に従事する仕事全般ですね。音楽家も、タイプによっては向いているかもしれません。独りでシンセをピコピコやるタイプですね。もちろん、僕が思いつかないだけで、他にももっと多くの職業があるはずです。

＊第四次産業

これらの仕事を一言で言えば、多くの場合が「情報を扱う仕事」です。
こういう仕事を「第四次産業」と呼ぶ人もいます。
従来、産業は次の三つのタイプに分類されていました。
「自然」に関わる農業や鉱業が第一次産業。
「モノ」に関わる製造業が第二次産業。

「消費」に関わる商業やサービス業が第三次産業。
それでは第四次産業とは何かと言いますと、読売ＡＤレポートの２００５年７～８月号に掲載された「経済を読み解く」というレポートによると、

それでは、一次でも二次でも三次でもない、というのは、どういうことだろうか。大まかに言うと、価値を生み出すにあたって「自然」に働きかけるのが第一次産業、「モノ」に働きかけるのが第二次産業である。そうした違いはあるが、それらはいずれも、労働の成果としての価値をモノの形で残す産業である。それに対して、第三次産業は、労働の成果としての価値を、その場で消費して後に残さない産業である。
……そのいずれでもない産業となると、それは、モノ以外の形で価値を残す産業ということになる。その条件に該当するのは、「情報」の形で価値を残す産業だろう。
情報を創造する産業という意味では、音楽や映画、ゲームの制作など、以前から存在していたが、それらは従来、ＣＤやビデオなど「モノ」の形に仕上げる場合には第二次産業の一部、映画館での上映やコンサートなどが主力の場合には第三次産業の一部といった形で、いささか曖昧（あいまい）な位置付けが与えられてきた。しかし、近年では、ネットから

のダウンロードなど、純粋な情報の形でコンテンツを取引する手法が確立したことで、二次でも三次でもない「情報創造産業」の輪郭が明確になってきた。

……いまや「創造した価値を情報の形で残す産業」は、概念的な位置付けに加えて、その成長力や重要性のうえでも、既存の産業群と切り離して、第四次産業と呼ぶにふさわしい存在になりつつある。目下、一番の注目株と言えるだろう。

（小村智宏「未来経済研究室～歴史から見る次世代産業」
http://www.study-mirai.org/works/ojo0507.htm より）

こういうことなのです。

たとえばマンガそのものは「情報」ですから、本当は第四次産業なのです。それが従来第三次産業に分類されていたのは「雑誌」や「単行本」という「モノ」……メディア媒体を経由しなければマンガという情報を流通させることができなかったからです。

しかし、インターネット社会の進化によって、僕たちはマンガという情報（データ）そのものをネットから直接ダウンロードして購入できるようになりつつあるわけです。

「モノの消費」から「情報の消費」へと、現代資本主義社会の構造は劇的に変化しつつある

のです。
こうなっていくと、情報を創出するクリエイター業という存在が、従来以上に重要になります。そしてそういう仕事に向いている人間のうちの何割かは、あるいはほとんどは、間違いなくサラリーマンを育成するために回転している現行の学校制度に適応できないタイプの人間なのです。部屋にこもって、じっと妄想を働かせて黙々と一つの作業に集中できるタイプ。いわゆるＬＤとかなんとか言われるタイプの人間が、今後の社会ではこれまで以上に求められるようになるわけです。
例えばマンガ家は絵という情報を描くわけですよね。
ここで「絵なんて、ただの記号じゃないか」と斬って捨ててしまう人は、マンガ家にはなれないわけです。
せっかくマンガ家として成功した人が、ある日突然、
「マンガなんてただの記号だった」
なんて言いだすと、ぱったり描けなくなったりするんです。
そういう余計なことを何も考えずに、黙々と目の前の紙を絵で埋められる作業を持続できる人だけが、マンガ家になれるわけです（僕はこの「紙を絵で埋め続ける」という作業が苦

痛だったのでマンガ家になる夢を諦めました。好きだったけど、適性＝才能がなかったんです）。

こういう人は、学校制度が産みだすサラリーマン型人間とは対極のタイプです。

もちろん「仕事に就く」ことと「仕事で稼ぐ」ことは別ですので、仮にマンガ家や作家になれたからといっても、お金が儲かるわけではありません。そういう人はごく一部です。僕のような売れない物書きは、毎年税金やら年金の支払いで苦しんで鬱になっています。

しかし、それじゃ他に何かできる仕事があるのか、転職したいのかと問われれば、「転職したくても、自分は文章を書く以外に何もできない」と答えるしかありません。毎朝満員電車に揺られて職場に行って上司にいじめられて夜まで残業して……そんな学校時代の延長みたいな生活は絶対に続けられません。どうせ、すぐにやめてしまいます。実際、大学を出たあとすぐに勤めた会社は、１年ももちませんでした。

＊「妄想」が市場を形成する

やや話が大きくなりますが。

僕は、日本でこれだけマンガコンテンツが流行ったのは、実は日本が戦争に敗れて国その

ものが一種の引きこもり状態に陥ったからではないか、と考えています。描き手も読み手も大勢いたからこそ、巨大な市場が形成されたわけです。

軍事的に国を拡大する従来の帝国主義的方法論は、敗戦とその後の世界の変化によって不可能になってしまいました。もう、他国に進軍するわけにはいきません。そうなると経済立国しかありませんよね。ところが日本には資源がない。前の戦争だって、そもそも戦争を継続するために必要な石油がないから戦線がやたら拡大していったわけです。

で、戦後日本でも相変わらず資源がないから、「妄想」つまりアイデア勝負になったんです。たとえ全てを失ってしまっても、生きていればまだ精神は残ります。精神があれば「想像力」を鍛えることができます。だから戦後すぐに、映画やマンガが隆盛期を迎えたんじゃないかと思うのです。

ちなみにマンガの神さま・手塚治虫は、もともとアニメーター志望でした。しかし「協調性がない」という理由でアニメ会社に雇ってもらえず、しかたなく独りでやれる漫画家をやっていたんだそうです。手塚のマンガは「映画的手法を漫画に取り入れた」という点で画期的だったのですが、実は手塚はアニメをやりたい一心で紙上にアニメを再現しようとしていたのかもしれません。「アニメがやれない」という不足感が、手塚マンガに独自性を与えた

わけです。アニメや映画は金がかかる。当時の日本には金がない。だから多くの才能が、当時のマンガ業界に流れたのだ……と思います。
経済復興を遂げた今はちょっと様相が変わってしまって、ゲーム業界に才能が流れるケースも増えていますけどね。
いずれにしても、もたざる日本人たちの「妄想」つまり想像力が市場を形成し、大きく回転させ、さらには外貨まで獲得してくれる時代が到来したわけです。
第四次産業がさらに拡大していくと、いずれは会社型人間よりも引きこもり型人間のほうがより多くの職業に適応しやすい社会になっていくと思われます。会社に入っても自宅で仕事をするライフスタイルも増えるでしょうし、ＳＯＨＯも増えるでしょう。すでに、かつての日本における会社幻想を支えた生涯雇用制度は崩壊しているのです。ですから、
「毎朝早起きして、毎日学校に通い、毎日授業を黙って受けて、毎日放課後はクラブ活動にいそしみ、毎晩家で宿題をする」
というサラリーマン育成型の学校制度もまた、同時に崩壊へと向かいはじめているだけなのだと思います。
学校の崩壊は、社会構造が大きく流動化している過渡期の現象です。決して、一人ひとり

の生徒個人の道徳的責任だとかそういう小さなスケールで済ませるべき話ではないのです。
今の学校制度は、
「毎朝早起きして満員電車に揺られ、毎日会社に通い、毎日机に座って仕事をこなして、毎日残業をして、毎晩家でも持ち帰り仕事をする」
というサラリーマンを育成するための教育機関です。そういうサラリーマンになることが、唯一の幸福であり安定であると信じられていた時代が、かつてたしかにありました。しかし、今ではもう、そのような神話は幻想にすぎないということが明らかになってしまっています。今の学校は、ただのレジャーランドなのです。バブル時代にレジャーランド化されてしまった大学の空気が、今ではとうとう小学校まで降りてきているのです。だから「学級崩壊」のような現象も起こるわけです。
もちろん学校に行くことでメリットを得られる人の数も、まだまだ多いです。だがもし、ジョブズのように「僕が学校に行くことには何のメリットもない」と気づいてしまった人は、無理に自分を誤魔化して学校に通う必要などないのです。
メリットのないこと、デメリットのほうが圧倒的に多すぎることは、勇気を出してやめるべきです。精神力が要りますが、それでも早くやめたほうがいいです。

（逆に、メリットがあるならば、あるいはデメリットがあまりないなら、無理やりやめる必要はありません。たとえば学校をやめることや部屋に引きこもることを「目的」化してしまうと、いろんなことをえんえんとやめ続けなければならなくなってしまうので注意が必要です。ぼくはあらゆるケースで「学校をやめろ」「引きこもれ」と勧めているのではなくて、「そうしなければ生きられない、いのなら、堂々と不登校せよ、あるいは堂々と引きこもれ」と言っているわけです）

少なくとも、学校に行けばいじめの果てに死ぬこともありますが、学校に行かないから死ぬということはありません。

人生のルートは一つではなく、人間の価値の尺度もまた一つではない。そのような考え方が当たり前となる流動的な世界が、そろそろ訪れようとしているのかもしれません。現代の学校は、そんな過渡期に直面して揺らいでいるのです。むしろ我々は、「高度情報化社会」とでも言うべき第四次産業時代に適した新しい教育制度を考えはじめる時期に来ているのではないでしょうか。

これは、単に「詰め込み主義をやめて、ゆとり教育を」というような種類の提言ではありません。一点集中型・引きこもり型の子供には、「やりたいことだけを」好きなだけ学ばせ

る制度を提供するという思いきった発想の転換が必要なのではないかと思うのです。
なにしろ日本には「モノ」としての資源がありません。しかし、「情報」は、人間の脳さえあればいくらでも産みだすことができるのです。ですから日本は第四次産業に特化したIT立国を目指さざるを得ません。それなのに、独創性溢(あふ)れる情報を産出できるタイプの子供の脳を、現行の学校制度は「サラリーマンのステロタイプ」の枠にはめて潰(つぶ)してしまっていると思うのです。

あとがきに代えて

「生協の白石さん」こと白石昌則

私自身、実は小学校入学前まで通うべき幼稚園や保育園には行っておりません。正確にいえば、当初保育園に約半年ほど通園していたものの、ある日母親から「家にいるのと、保育園にいるのとどっちが楽しい?」と聞かれ、迷わず前者と答えたがために退園の手続きが取られたのでした。

お絵かきの時間中、仮面ライダーに出てくる怪人の名前を画用紙いっぱいにリストアップしても怒られないのは、少なくとも保育園ではなかったのです。

毎日気ままに自宅や外で遊びに興じる子供を憂えたのか、母は当時の私にとっての「先生」役をも担うようになりました。とは言っても英才教育のような全く大それたものではありません。簡単な足し算・引き算の後、九九や割り算、いわゆる小学校低学年で習うような四則演算を教わったのですが、ドリル等を用いたものではなく、母が適当に思いついた筆算

をチラシの裏に書いてそれを解く、という形式でした。それは問題というよりはクイズのようで、間違えると小馬鹿にされたのがとても悔しかったことを覚えています。

国語の先生は、別にいました。それは「漫画」先生です。5歳の頃から与えられよく読みました。ジャンプ・マガジン・サンデー・チャンピオンといった少年誌から、ビッグコミック等成人向けのものまで、近所の飲食店から1週遅れとなる号のものをいただいていたのです。おそらく親には全くそのつもりはなかったと推測されるのですが、今思えば、私はこれらの漫画から多くのことを学んで育ちました。特に少年誌ですが、セリフの吹き出しに書いてある漢字には、簡単なものにでも必ず振り仮名がふられ、これが吸収力旺盛な子供の脳に素早く浸透していくのです。

また、描かれているキャラクターの表情や全体の描写を見ることにより、登場人物の心理などを把握することができ、本で言うところの「行間を読む」ことについても知らずの内に覚えられたと記憶しています。

このおかげで私は小学校に上がった時、漢字の読み書きについては授業から何も教わる必要が無いほど身に付いており、また文章題についても、本題中に記されている光景が脳の中で「マンガ」として浮かび上がることにより、概(おおむ)ね内容をつかむことができました。私に

とって漫画は娯楽であるとともに、知識と想像力を育む重要な教材でした。

このような調子なので、入学直後は秀才やらガリ勉（実際にはこのような調子ゆえ、家で勉強などこれっぽっちもしていないのですが）やらと見られることになってしまったのですが、皆が習っていない時に教わっているのだから問題が解けるのは当たり前で、決して他の子より知能が発達しているということではなく、そのことは自分自身、子供心ながらよくわかっていました。

しかし周囲はそうは見ず、悪いことに同世代の集団生活を経験していないために空気を読めず、やり玉に挙げられることもしばしばありました。例えばテストの問題を「簡単だ」と言い切ってしまったり、できることをできると出しゃばったりすると、同じクラスの皆からは「自慢してる」とよく非難されました。

今思えば、このような振る舞いにより何だか鼻につく奴だと思われるのは当然だろう、と理解できるのですが、初めて指摘を受けた当時は「ジマンって、何だ？」という感覚でした。つまり、自慢という言葉の意味もわからないし（考えてみたら自慢って、小学校低学年にしては結構難しい単語ですよね）、できる事を宣言して揶揄（やゆ）されるような環境は初体験だったのです。

入学前は、周囲の人たちは大人ばかりで、大人は子供ができることを褒めてくれます。先述の漫画先生も、自慢が悪であるというシーンを教えてはくれず、むしろ多くの主人公は、誇るところはどんどん誇っていたものです。

非難されれば、やはりへこたれます。通学が楽しいわけがありません。ではどのようにすれば皆と仲良くなれるのだろうと考えました。

小学生独特の世界観に触れてわかったことは、活発でひょうきんな人が人気者になれるということでした。足が速かったり、授業中に面白いことを言ったり、給食をやたらモリモリ食べたりといった行動は、男子において美徳とされることだったのです。そしてタブーといえば、自慢・嘘・女子への暴力、おまけで学内トイレでの排泄（ゆっくりな方）などでした。ほどなく自分もそれを実践しつつ、その世界観に染まっていきました。すると学校はとても楽しくなり、友達もたくさんできました。そして幸か不幸か、自分が入学前に教わった計算や漢字がしだいに授業でも出てきたので、学力はあっという間に人並みとなりました。もはや自慢は、したくてもできなくなっていたのです。

もっとも、このような世界観に倣うことが小学生として必ずしも正しいこととは思いません。しかし自分にとって、学校という初めての集合体に属したことにより、皆と仲良く、楽

しく過ごしたいという意識が芽生えたことについては、その「皆」が先生だったのです。
おそらく本書で触れられている「学校に行きたくない人」も含め誰しも、私と同じ意識が一度は芽生えているに違いありません。自分が無理をしないでクラスに溶け込めるなら、それに越したことはないのです。不運にも学校・級友たちがご本人にとっての「先生」とはならずに馴染めていないだけに過ぎないと思われるのですが、きっとその大半の方々は、何故こうなってしまったか無念に思っていらっしゃることでしょう。
いじめや無視にあってしまった子供が家や先生に相談していない事例をよく聞きますが、私も当事者ならば、おそらくその心情になると思います。相談した時点で、まるで自分が集合からはじかれた不適合な弱者だというのを認めて宣言しているようで（言うまでもなく実際には決して不適合でも弱者でもなく、そもそも「いじめられる理由」という概念すらあってはならないのですが）、それが悔しくてたまらないのです。どうして自分ばかりが、という思い、さらには「自分よりもあいつの方が」という好ましくない負の感情すら抱いてしまうかもしれません。
自尊心、と言うと言葉としては端的ですが、この自尊心は本当にデリケートで大切にしなければならないものなのだと思います。あくまで主観ですが、本人からこのような相談が吐

露されるときというのは、おそらく断腸の思いで自尊心をかなぐり捨て発信したSOSなのではないでしょうか。聞き手の側もこの時ばかりは、本人の未来を案じるよりも現在の苦境を和らげることを尊重すべきかと思われます。

仮に学校という集合体から離れた場合、ストレスから解放される利点もある一方、周囲から影響を受けたり吸収したりする機会を得る巨大な場所を一つ失ってしまいます。それでも新たな目標や夢を見つけられるように、そして自信を取り戻せるように導いてくれる「先生」がいるような社会の仕組みが肝要かと思う次第です。

謝辞

もうずいぶん前のことになるが、大学入学資格検定は夏に行われていた。大阪府の試験会場は、阪急の沿線にある高校。自分の席は窓際で、試験問題を押さえた手のあとが、汗で濡れてしまったのを思い出す。自分は何者でもない。職業人でもないし、浪人生でもない。なにかの夢を追いかけているわけでもない。

あの10代も後半の頃の情けない気分を振り返ると、自分が今曲がりなりにも働いて暮らしているのが、なんだか不思議な気がする。自分のこのしょっぱい人生の中で、これだけは幸いなことに、いつも自分よりも優れた友人に恵まれて、なんとか生き延びてきた気がする。

本書においては馬淵千夏氏と深澤晃平氏にご助力をいただいた。お二人の優れたセンスに本書はずいぶん助けられている。また中村忠朗氏にもお礼を述べなければならない。中村氏の配慮がなければお二人と出会うことはなかった。

そして辛抱づよく担当していただいた光文社新書編集部の三宅貴久氏をはじめ、本書を世に送る過程でご尽力いただいた方々にも厚くお礼を申し上げる。

もちろん、最後になって恐縮ですが本書を手にとっていただいた皆様には、最大級の御礼を心から申し上げます。

ありがとうございました。

著者のひとり

本田透（ほんだとおる）
1969年兵庫県生まれ。高校を2度中退後、大検（現・高認）を経て、早稲田大学第一文学部哲学科入学（中退）、同大学人間科学部人間基礎科学科卒業。出版社勤務を経てフリーに。著書に『電波男』（三才ブックス）、『萌える男』（ちくま新書）、『喪男（モダン）の哲学史』（講談社）などがある。

堀田純司（ほったじゅんじ）
1969年大阪市生まれ。高校を中退後、大検を経て、上智大学文学部ドイツ文学科入学。在学中よりフリーランスの編集者として働く。著書に『萌え萌えジャパン――二兆円市場の萌える構造』（講談社）がある。

自殺するなら、引きこもれ　問題だらけの学校から身を守る法

2007年11月20日初版1刷発行

著　者――本田透　堀田純司
発行者――古谷俊勝
装　幀――アラン・チャン
印刷所――萩原印刷
製本所――関川製本
発行所――株式会社光文社
東京都文京区音羽1-16-6(〒112-8011)
電　話――編集部03(5395)8289　販売部03(5395)8114
業務部03(5395)8125
メール――sinsyo@kobunsha.com

 ISBN 978-4-334-03427-6

221
下流社会
新たな階層集団の出現
三浦展

「いつかはクラウン」から「毎日百円ショップ」の時代へ——。もはや「中流」ではなく「下流」化している若い世代の価値観、生活、消費を豊富なデータから分析。階層問題初の消費社会論。

237
「ニート」って言うな！
本田由紀　内藤朝雄
後藤和智

その急増が国を揺るがす大問題のように報じられる「ニート」。日本でのニート問題の論じられ方に疑問を持つ三人が、各々の立場からニート論が覆い隠す真の問題点を明らかにする。

269
グーグル・アマゾン化する社会
森健

グーグルとアマゾンに象徴されるWeb2.0の世界は、私たちの実生活に何をもたらすのか？　多様化、個人化、フラット化の果ての一極集中現象を、気鋭のジャーナリストが分析・解説。

285
次世代ウェブ
グーグルの次のモデル
佐々木俊尚

マウスイヤーでさらに加速度を増すネット業界は、早くも次のステージに移ろうとしている——気鋭のジャーナリストが豊富な取材で探るWeb3.0時代のビジネスモデルとは？

298
メディア・バイアス
あやしい健康情報とニセ科学
松永和紀

センセーショナルな話題に引っ張られるメディアの構造、記者・取材者の思い込み——さまざまなメディア・バイアスの具体例をもとに、トンデモ科学報道の見破り方を解説する。

302
ｉＰｈｏｎｅ
衝撃のビジネスモデル
岡嶋裕史

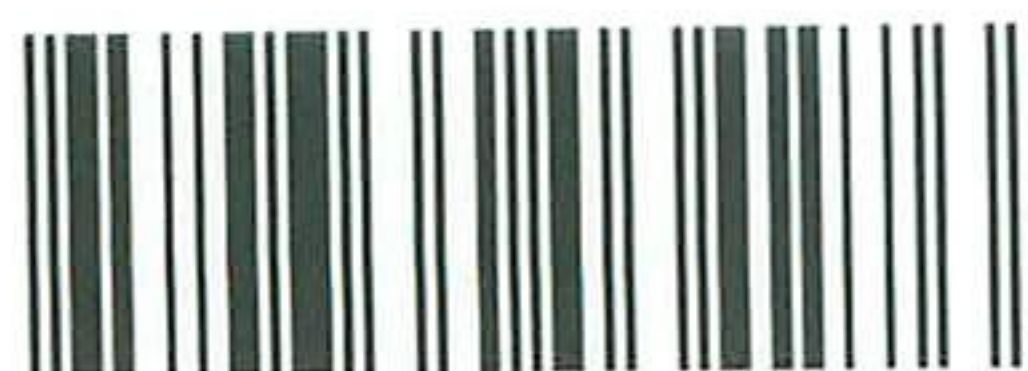
アップルの新製品ｉＰｈｏｎｅは、単なるｉＰｏｄ付き携帯電話ではない。そこには、「稼げるＷｅｂ２・０」の創出というビジョンがある。気鋭の研究者がウェブの未来図を描く。

316
下流社会　第2章
なぜ男は女に〝負けた〟のか
三浦展

全国1万人調査でわかった！「正社員になりたいわけじゃない」「妻に望む年収は５００万円」「ハケン一人暮らしは〝三重楽〟」。男女間の意識ギャップは、下流社会をどこに導くのか？

光文社新書・既刊より

▽「ニート」って言うな！――本田由紀　内藤朝雄　後藤和智
▽「私」のための現代思想――高田明典
▽若者はなぜ3年で辞めるのか？――年功序列が奪う日本の未来――城繁幸
▽犯罪不安社会――誰もが「不審者」？――浜井浩一　芹沢一也
▽モノ・サピエンス――物質化・単一化していく人類――岡本裕一朗
▽なぜ勉強させるのか？――教育再生を根本から考える――諏訪哲二
▽ハラスメントは連鎖する――「しつけ」「教育」という呪縛――安冨歩　本條晴一郎
▽ネオリベラリズムの精神分析――なぜ伝統や文化が求められるのか――樫村愛子
▽最高学府はバカだらけ――全入時代の大学「崖っぷち」事情――石渡嶺司
▽高学歴ワーキングプア――「フリーター生産工場」としての大学院――水月昭道

カバー印刷　萩原印刷

ISBN978-4-334-03427-6

C0236 ¥700E

定価（本体700円＋税）

本田透（ほんだとおる）

一九六九年兵庫県生まれ。高校を二度中退後、大検（現・高認）を経て、早稲田大学第一文学部哲学科入学（中退）、同大学人間科学部人間基礎科学科卒業。出版社勤務を経てフリーに。著書に『電波男』（三才ブックス）、『萌える男』（ちくま新書）、『喪男（モダン）の哲学史』（講談社）などがある。

堀田純司（ほったじゅんじ）

一九六九年大阪市生まれ。高校を中退後、大検を経て、上智大学文学部ドイツ文学科入学。在学中よりフリーランスの編集者として働く。著書に『萌えジャパン――二兆円市場の萌える構造』（講談社）がある。